

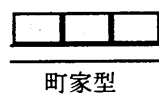
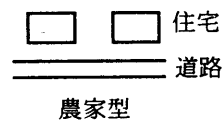
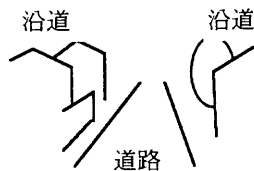
第5章 沿道の形態

第5章 目次

第5章 沿道空間の形態	185
(1) 注目する形態 - 囲繞平面形態 -	185
(2) 第5章の構成	188
5-1 対象	189
5-1-1 対象集落	189
5-1-2 対象空間	189
5-1-3 対象ロット	190
(1) 対象ロット	190
(2) 農家ロットに注目する意義	190
(3) 対象ロットの定義	191
1) 「対象LOT」は農家LOTとする	191
2) 農家であっても「複数主屋LOT」は対象から除外する	191
3) 農家であっても「建物が取り壊し中・新築中のLOT、廃屋」は対象から除外する	191
(4) 対象集落の全ロットに占める対象ロットの数	192
5-1-4 対象空間要素	205
5-2 道路境界面が囲繞に与える影響（囲繞をつくる空間要素の把握）	206
5-2-1 門扉と囲繞	207
5-2-2 屋敷囲いと囲繞	208
(1) 屋敷囲いの種類と高さ	208
(2) 囲繞と屋敷囲いの関係	209
1) 方法	209
2) 屋敷囲いと囲繞の関係および典型的な表層	211
5-2-3 まとめ--道路境界面（屋敷囲いと門扉）と囲繞	212
5-3 沿道の空間定性的特徴	213
5-3-1 間口と出入り口	214
(1) 1 LOTあたりの間口の数	214
(2) 出入り口のある間口と出入り口の無い間口の数	215
(3) 間口の方位と、出入り口の有無	215
5-3-2 沿道タイプ（沿道空間の定性的空間類型）	216
5-3-3 開放空間（出入り口から見通す開放空間）の特徴	218
(1) 地面と側面	219
(2) 正面	220
(3) 出入り口から見通す空間の典型	222
5-3-4 閉鎖空間の特徴（閉鎖空間をつくる建物の表層）	223
(1) 閉鎖空間の位置	223
(2) 閉鎖空間の表層	224
5-3-5 まとめ--沿道空間の空間定性的な特徴	226

5-4	沿道の空間定量的特徴	227
5-4-1	定量的方法	228
(1)	計測指標	228
1)	開放空間の大きさ	228
2)	閉鎖空間の大きさ	228
(2)	計測方法	229
1)	開放空間の大きさ	229
1-1)	開放奥行き長	229
1-2)	開放間口長	229
1-3)	出入り口の幅	229
2)	閉鎖空間の大きさ	230
2-1)	セットバック奥行き長	230
2-2)	セットバック間口長	230
2-3)	閉鎖間口長	230
2-4)	建物壁面長	230
5-4-2	開放空間の大きさ	231
(1)	南接道面（東西道路の北側）の開放空間	231
1)	典型タイプの開放空間	232
2)	典型タイプの開放空間と南面の全開放空間の比較	233
(2)	東西接道面（南北道路の両側）の開放空間	234
1)	典型タイプの開放空間	235
2)	典型タイプの開放空間と東西面の全開放空間の比較	236
(3)	開放空間の定量的特徴	237
(4)	出入り口の幅	239
5-4-3	閉鎖空間の大きさ	240
(1)	セットバック奥行き長	241
(2)	セットバック間口長	245
(3)	閉鎖間口長	247
1)	「閉鎖+開放タイプ」の閉鎖間口長	249
2)	「閉鎖タイプ」の閉鎖間口長	250
(4)	「開放+閉鎖タイプ」の開閉空間のプロポーシオン	252
5-4-4	まとめ--沿道空間の空間定量的な特徴	254
5-5	集落の比較	256
(1)	開閉の出現の集落比較	256
(2)	典型的風景の集落比較	257
2-1)	出入り口から見通す空間	257
2-2)	閉鎖空間の表層	257
(3)	開閉空間スケール	257
3-1)	開放空間（庭の南北長・東西長）の集落比較	257
3-2)	「開閉空間のプロポーシオン」と「ロット長」の集落比較	259
(4)	まとめ	260
5-6	まとめ—沿道空間の特徴	261
	参考文献	263

(1) 注目する形態 - 囲繞をつくる平面形態 -



道路上に立つ人が体験する「道路空間」は「道」と「沿道」によってつくられている。第3章から第4章では、「道」の形態の特徴とその形態を形成した要因を明らかにしたが、本章では「沿道」形態の特徴を明らかにしていきたい。

1章で述べた通り、ここで注目する「沿道形態」は「道路横断方向で見た囲繞空間の形態」である。特にその囲繞をつくる基盤となる平面形態（平面配置）に注目する。平面形態に注目する理由は、本研究が対象とする伝統的農村集落の道路空間の特徴が特に平面形態にあると考えられたためであるが、そのことを沿道に関してもう少し詳しく述べておこう。

一般民衆の伝統的住居（いわゆる「民家」）は、沿道に建ち並ぶ住居の建ち並び方によって「町家」型と「農家」型に大きく分けられる^{1) 2)}。

町家が道路および隣家に建物を接して軒を並べるのに対して、農家は道路および隣家との間に空間を持つ独立型の住居であり、特に沿道に庭空間を見せる特徴があり、「町家」型と「農家」型の沿道の形態は大きく異なる。すなわち「町家」型は道路横断方向の平面空間に変化がほとんどなく、壁面のディテールや屋根型や建物高さに注意が向けられるが、「農家」型は建物・庭の配置によって平面空間が極めて大きく変化するという特徴を持ち、さらに、建物は全てが2～1階建てで高さに大きな変化が無いから、建物などの空間要素の平面形態（平面配置）が空間の囲繞を決定づけている。独立型住居は農家の他に為政者の住居である武家屋敷が知られているが、武家屋敷は屋敷囲いが高いために道路から中の様子が見えず沿道は屋敷囲いに規定されて道路横断方向の囲繞平面に変化はほとんど無くなる。筆者の経験から、集居農村集落では屋敷囲いは低く門も開放されて屋敷内を道路側に視覚的に開放している場合が一般的であるが、対象集落でも、屋敷囲いは低く、門は開放され、建物と庭の配置が沿道の空間形成に決定的な影響を与えていることが現地踏査によって把握した。

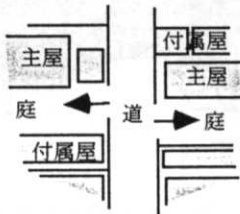
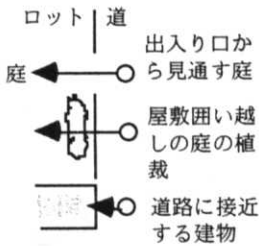
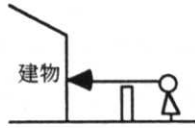
このように対象集落の沿道の囲繞の特徴は沿道ロットの空間要素がつくる「平面形態」の特徴にある。

対象集落を踏査した結果、読みとることができた沿道の特徴をもう少し詳しく述べてみよう。

沿道の様子は極めて複雑であるが注意深く観察すると、そこには、繰り返し現れる典型的な特徴を発見することができる。

1) 日本建築学会編（1979）建築設計資料集成6建築-生活-丸善、p19

2) 平井聖（1980）図説日本住宅の歴史、学芸出版、pp67-88



- 1) 沿道は基本的に住居の敷地である「ロット」である。畑が沿道を構成する場合もある。
- 2) 屋敷囲いは低く、道路に立った視点の高さ(1.5m)前後以下の場合が多い。また、屋敷林は全く見られない。そのため沿道の圍繞は屋敷囲いよりも沿道ロット内の建物や庭が規定するよう見える。
- 3) 「庭の開放空間」と「建物が接近する閉鎖空間」が沿道に交互に出現し、沿道の圍繞をつくる平面形態は凹凸の変化に富んでいる。
- 4) 「開放空間」は、「出入口から見通す庭」と、「屋敷囲い越しに見る庭の植栽」によってつくられている。出入口は基本的に南・東・西にあり、特に南と東が多い。そこから見通す空間は庭(主屋南の前庭)であり、門扉は無いか常時開放されロット内を完全に見通すことができる。
- 5) 「閉鎖空間」は、「道路に接近する建物」によってつくられる。その建物の多くは庭を取り巻く付属屋であり、特に、屋敷囲いが無く建物壁面を道路側に露出させた付属屋が多い。
- 6) このような「開放空間・閉鎖空間の出現パターン」や、「出入口から見る空間」は、道路の方位および接道面の方位によって異なる典型が見られる。

①東西道路の北面(ロットの南面)は出入口から庭を見通し、庭の奥に主屋を望む場合が多い。出入口の右(庭の南東)に沿道に接近して配置された付属屋が多く、この付属屋による閉鎖空間と出入口から見通す庭の開放空間が沿道に交互に現れる場合が多い。

②東西道路の南面(ロットの北面)は道路に接近した付属屋が沿道に並び、特に壁面を露出させた倉が多く見られる。出入口が無い場合が多く、あっても出入口から見通す空間は主屋南の庭に続く細長い通路となっている。このようにここでは基本的に閉鎖空間が連続する。

③南北道路の両側(東西面)は出入口から庭を見通し、作業庭の奥に付属屋や植栽の施された外構を望む。出入口から見る庭は、北を主屋、南を付属屋あるいは南に隣接するロットの主屋や付属屋に挟まれる。庭の南北のこれらの建物はほぼ例外なく道路に接近するため、これらの建物による閉鎖空間と出入口から見通す庭の開放空間が沿道に交互に現れる。

以上のように、沿道の特徴の中でも特筆すべき特徴は、東西道路の北面（ロットの南面）および南北道路の東西面に見られる「庭の開放空間（特に出入り口から見通す空間）」と「建物が接近する閉鎖空間」が交互に出現する変化に富む空間であると言える。

本章では、このような空間の定性的な特徴が出現することを明らかにした後、その形態を空間定量的に明らかにしたい。



写真5-1 農村の道路沿道（建物の接近）- 東吉田



写真5-3 農村の道路沿道（東入りのLOT出入口からLOT内部を見る）- 休息



写真5-2 農村の道路沿道（開放空間）- 沢登



写真5-4 町屋型の道路沿道- 妻籠宿

(2) 第5章の構成

沿道の形態（沿道の囲繞平面形態）の特徴を明らかにする手順は次の通りである。

1) 沿道の検討対象の定義（踏査把握の1に対応）（5-1）

まず、沿道を構成する要素を示し、対象を定義する。

2) 道路境界面（屋敷囲いと門扉）が囲繞に与える影響を把握

（踏査把握の2に対応）（5-2）

次に、道路境界面越しにロット内を見通す空間の見え方（表層）を明らかにして、道路境界面が囲繞の主要面にはならず囲繞はロット内の空間要素がつくっていることを確認する。

3) 沿道を定性的に捉える（5-3）

3-1) 囲繞形態の分類と典型の抽出（踏査把握の3に対応）

道路に面する間口（ロットの接道面）に注目し「庭の開放空間」「建物の閉鎖空間」の出現の仕方によって囲繞形態を分類する（これを「沿道空間タイプ」と呼ぶ）。そして、典型的な沿道空間タイプを抽出する。

3-2) 「開放空間」「閉鎖空間」を定性的に捉える（踏査把握の4・5・6に対応）

典型的な沿道空間タイプを中心に「開放空間」および「閉鎖空間」それぞれの空間の見え方を明らかにする。「開放空間」については特に「出入口から見通す空間」が重要であるから、その見え方の実態に注目する。

4) 「開放空間」「閉鎖空間」を空間定量的に捉える（5-4）

定性的把握を踏まえて「開放空間」「閉鎖空間」の大きさを明らかにする。

5) 以上で明らかにされた特徴は集落別に見ても出現するものか確認する（5-5）

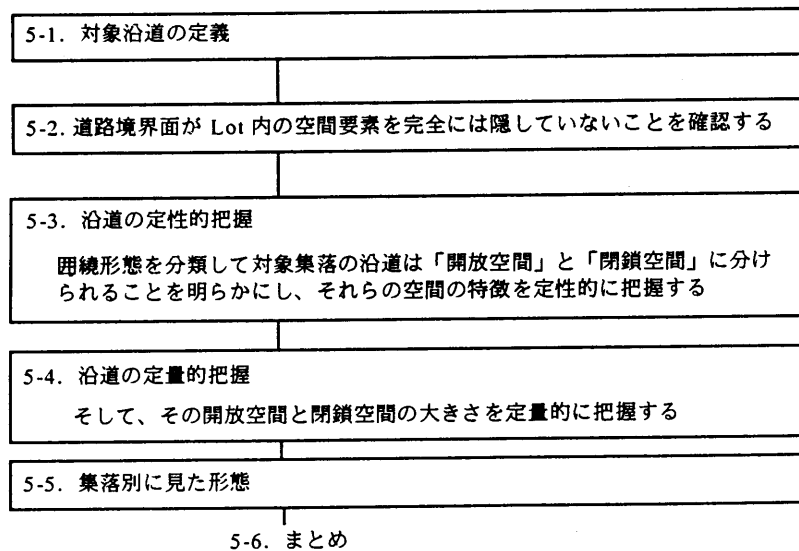


図5-1 第5章の構成

5-1 対象（沿道空間）

以下に説明する、「対象集落」の「対象空間」の「対象LOT」内にあって、道路上から見たときに現れる囲繞空間の形成に関係する「空間要素」を対象とする。その要素がつくる空間を「沿道空間（または沿道）」と呼ぶ。

5-1-1 対象集落

対象集落は「東吉田・沢登・休息・横根・上八田・上高砂」の6集落とする。「大塚」集落は沿道の一部に土地傾斜がやや大きな場所があり、そこでは沿道の盛土切り土によって横断方向の囲われ方が規定され、一般的な平坦地の集落とは特徴が異なる部分があることから、定量的な把握（特に分布形）に歪みが生じる可能性があるため、計測対象集落から除いた。

5-1-2 対象空間

対象集落の沿道空間は「LOT」と「農地」で構成されている。ここでいう「LOT」とは「各住戸の敷地であり、建物が建てられた区画」である。集落全体では沿道総延長の約8割がLOTであり、残りの約2割が畑である（下表）。

集落内の「農地」は「道路沿道に緑地空間あるいは開放空間を提供する」という理解にとどめ、それがつくる囲繞の形態を詳しく見ることはしない。

またLOTであっても道路からLOT内にある建物などが見えない「旗竿LOT」は道路空間の形成に関係しないから対象としない。旗竿LOTの定義は「LOT内の空間要素が手前のLOTに隠されて見えないLOT」である。平面図が旗と竿の形をしていることからそう呼ばれる。旗竿LOTは後に示すように21LOTあった。

対象空間は『対象道路の沿道に面するLOT』、つまり、「道路に間口を持つLOTのうち旗竿LOTを除くLOT」とする。

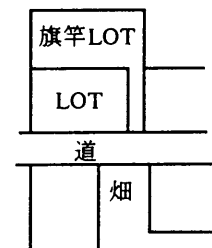


表5-1 沿道空間の構成（LOTと畑で構成される）

	横根	沢登	東吉田	休息	上高砂	上八田	大塚	計
①畑に接する道路沿道距離	1804m	814m	227m	612m	667m	2391m	151m	6667m
②全沿道距離	4038m	5152m	2636m	2734m	3038m	8330m	4446m	30374m
①/② 畑が接する沿道	45%	16%	9%	22%	22%	29%	3%	22%
LOTが接する沿道	55%	84%	91%	78%	78%	71%	97%	78%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

全沿道距離=Lineの総延長×2

沿道距離：道路の片側沿道に注目して測った距離

5-1-3 対象ロット

(1) 対象ロット

本研究は「伝統的農村集落」における「アノニマスな形態」に注目している。農村集落を構成する主要な住宅は伝統的に「農家」である。しかし、近年、離農や農地の切り売りによって「農家」以外の住宅が農村集落に入り込んでいる。この新しい空間形態は、本研究が明らかにしようとしている伝統的なアノニマスな形態ではない。

したがって、対象ロットは現存する伝統的な「農家」のロットとする。

(2) 農家ロットの歴史

農家は我が国の庶民の伝統的空間の典型である。農家というすまいの形式は平安時代に発生以降、現在まで存続する唯一の形式である³⁾

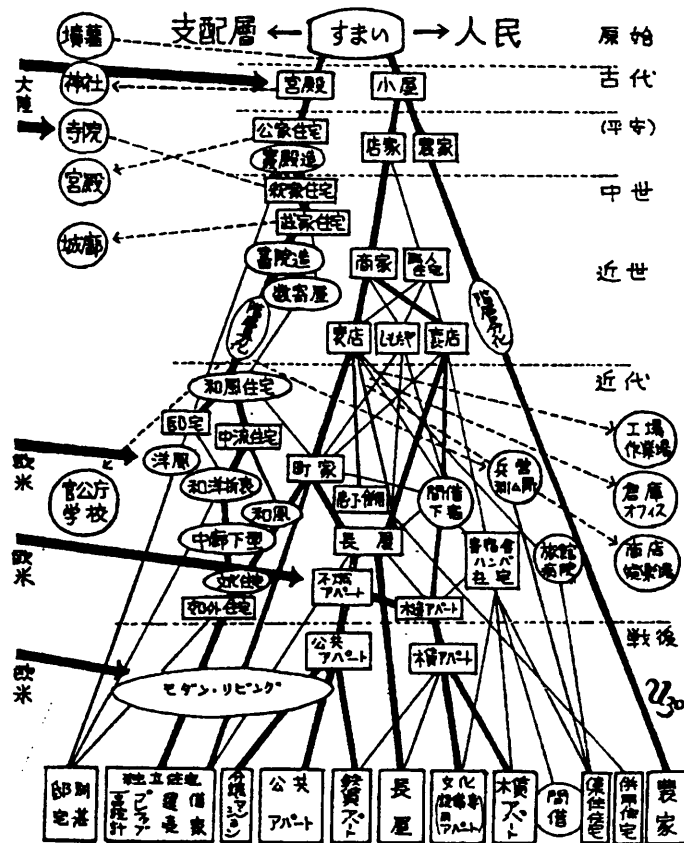


図5-2 日本の住宅の系譜 (出典：文献1のP10 図14)

3) 西山卯三 (1975) 日本のすまい (1)、勁草書房、P10.

(3) 対象ロットの定義

1) 「対象LOT」は農家LOTとする

①「農家LOT」の定義

沿道の囲繞形態に係わる平面形態（建物等の配置形態）に注目する故に、「農家LOT」はこの地方の典型的形態である「農業用の付属屋を持つLOT」⁴⁾とする。すなわち現在では離農して自家栽培のみを行っているようなLOTであっても、農業用の付属屋を持つ形態をとどめていれば「農家LOT」と見なして対象とした。農業用の付属屋とは「農機具の保管・農作物の整理および保管」のための付属屋（倉など）である。

対象地における最も古い地籍図である明治23年前後の「旧公図（和紙図面）」によって当時のLOTの宅地・農地の別を判別できる。この時宅地であったLOTは少なくとも明治期に存在を確認できる古い（伝統的な）LOTである。しかし、その後発生した宅地のLOTおよび建物の形態を現地調査によって比較した結果、この定義の農家であれば、両者に形態的な差異は見られなかった。明治期およびそれ以降に発生した農家のLOTも「伝統的形態」と連続したものと見なすことができるので、先の定義にしたがって「農家LOT」を選別することにした。

農家LOT数は後に示すように、339LOTが該当し、これは対象集落の全LOT（建物を持つ敷地）数の75%を占める。

②「農家LOT」以外のLOT（非対象- 1）

農家LOTの外には次のLOTがある。

伝統的LOTには「寺社」「伝統的な店舗」「伝統的な集会所」「付属屋だけのLOT」がある。これらは数が少なくその形態は個別的である。

現代のLOTには「非農家の一般戸建て住宅、借家」「集合住宅（非戸建て住宅）」「事業所」「近年の店舗」「近年の公民館」「消防団車庫」などがある。

「非農家の一般戸建て住宅」を除けばその数は少なくその形態は個別的である。

2) 農家であっても「複数主屋LOT」は対象から除外する（非対象- 2）

「庭や付属屋の一部をつぶして同一LOT内に既存の主屋とは別に子供世帯の主屋を建てる農家」が近年みられるようになった。これは離農を契機として伝統的な農家LOTの形態が変質したものであり、伝統的な形態とは明らかに異なるので対象から除外する。複数主屋LOTは後に示すように34LOTあり、全LOT数の7%を占める。

3) 農家であっても「建物が取り壊し中・新築中のLOT、廃屋」は対象から除外する (非対象- 3)

「建物が取り壊し中・新築中のLOT、廃屋」は人が通常に生活している状況ではない。そのため対象外とした。このLOTは後に示すように19LOTあり、全LOT数の4%を占める。

4) 坂本高雄（1994）山梨の草葺民家- 伝統的形式住居の終焉-、山梨日日新聞社、p215

(4) 対象集落の全ロットに占める対象ロットの数

「農家LOT」から「複数主屋LOT」「廃屋新築中LOT」等を除いた結果、「対象LOT」数は290となった。これは道路空間の形成に関するLOT（旗竿LOTでないLOT）数445の64%、戸建て住宅LOTの70%、農家LOTの86%を占める。

集落別に見ると、1集落あたりの「対象LOT」数は30~86で、「対象LOT」は集落のLOT数（旗竿LOTを除くLOT数）の8~6割を占める。各集落の「対象LOT」図を図5-4~図5-9に、「LOT内空間要素配置」図を、図5-10~図5-15に示す。

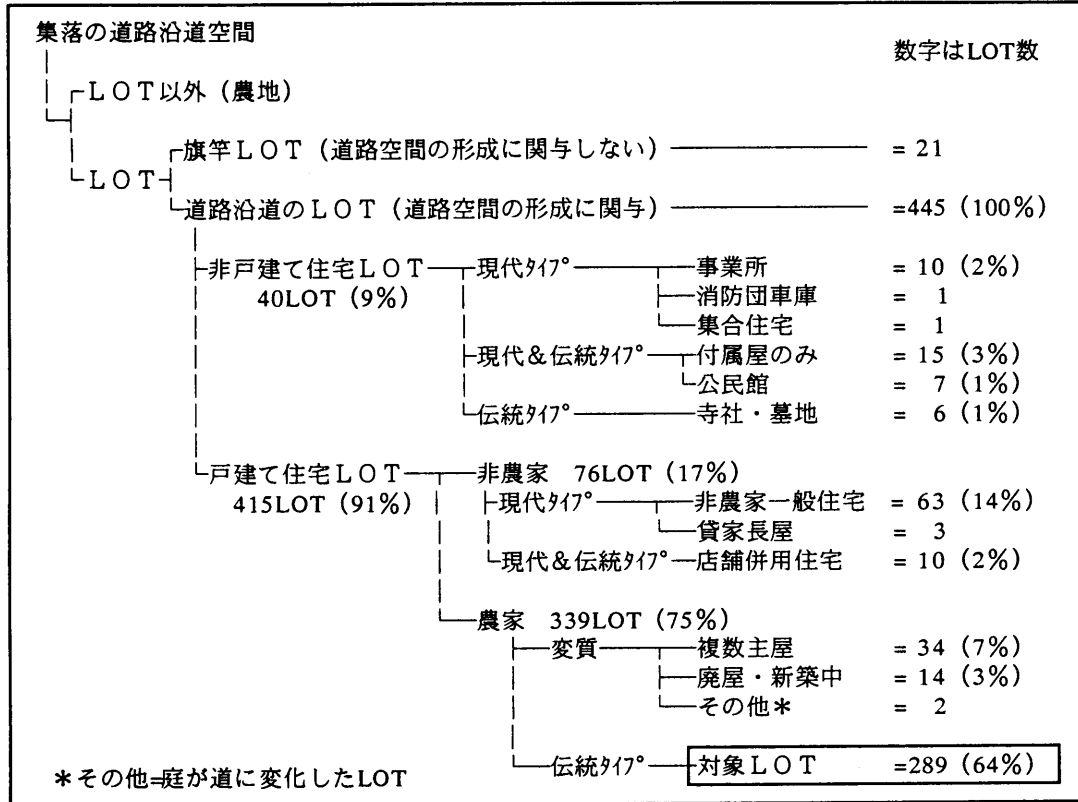


図5-3 対象集落のロット類別

表5-2 集落別の対象LOT数

道路空間に 関係	種別	LOT数	構成比	東吉田		沢登		休息	
				数	%	数	%	数	%
道 路 空 間 に 関 係	戸建て住宅LOT	415	91%	53	96%	80	91%	53	96%
	農家LOT	339	75%	45	82%	70	80%	49	89%
	対象LOT	289	64%	30	55%	57	65%	44	80%
	対象外LOT	50	11%	15		13		5	
	非農家戸建て住宅LOT	76	17%	8		10		4	
	非住宅・集合住宅LOT	40	9%	2	4%	8	9%	2	4%
	旗竿LOTを除くLOT	455	100%	55	100%	88	100%	55	100%
	旗竿LOT	21		1		2		2	
	全LOT数	476		56		90		57	

農家LOTの対象外
LOT=複数主屋LOT、
変化途上のLOT

非農家戸建て住宅LOT=
非農家の一般住宅、分譲
借家住宅、店舗併用住宅

非住宅=付属屋のみの
LOT、事業所、公民
館、寺社、学校

道 路 空 間 に 関 係	種別	横根		上八田		上高砂	
		数	%	数	%	数	%
道 路 空 間 に 関 係	戸建て住宅LOT	53	85%	116	90%	60	91%
	農家LOT	38	61%	96	74%	41	62%
	対象LOT	34	55%	85	66%	39	59%
	対象外LOT	4		11		2	
	非農家戸建て住宅LOT	15		20		19	
	非住宅・集合住宅LOT	9	15%	13	10%	6	9%
	旗竿LOTを除くLOT	62	100%	129	100%	66	100%
	旗竿LOT	4		8		4	
	全LOT数	66		137		70	

数字はLOT NO.

道路沿道空間「対象LOT」

数字のみ

対象LOT以外の農家LOT

数字
記述

複数主屋LOT (LOT内に分家建物を建築したLOT)の農家
廃屋LOT・旗竿LOT・変化途中のため計測不能の農家
現在は非農家だがもと農家でLOT規模は変わっていないLOT

非農家戸建て住宅LOT

数字
(非農家)

非農家の戸建て住宅 (一般住宅・店舗併用住宅)

集合住宅・非住宅LOT

数字無し
記述

集合住宅・非住宅 (集合住宅・付属屋のみ・
事務所・事業所・寺社・公民館など)

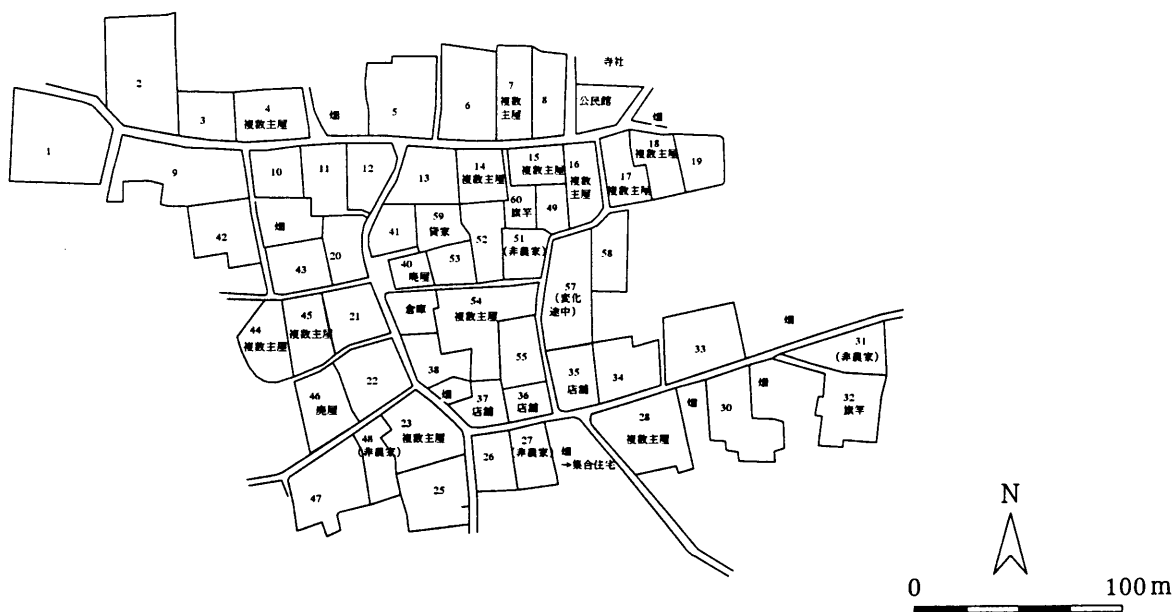


図 5 - 4 対象LOT位置図 (東吉田)

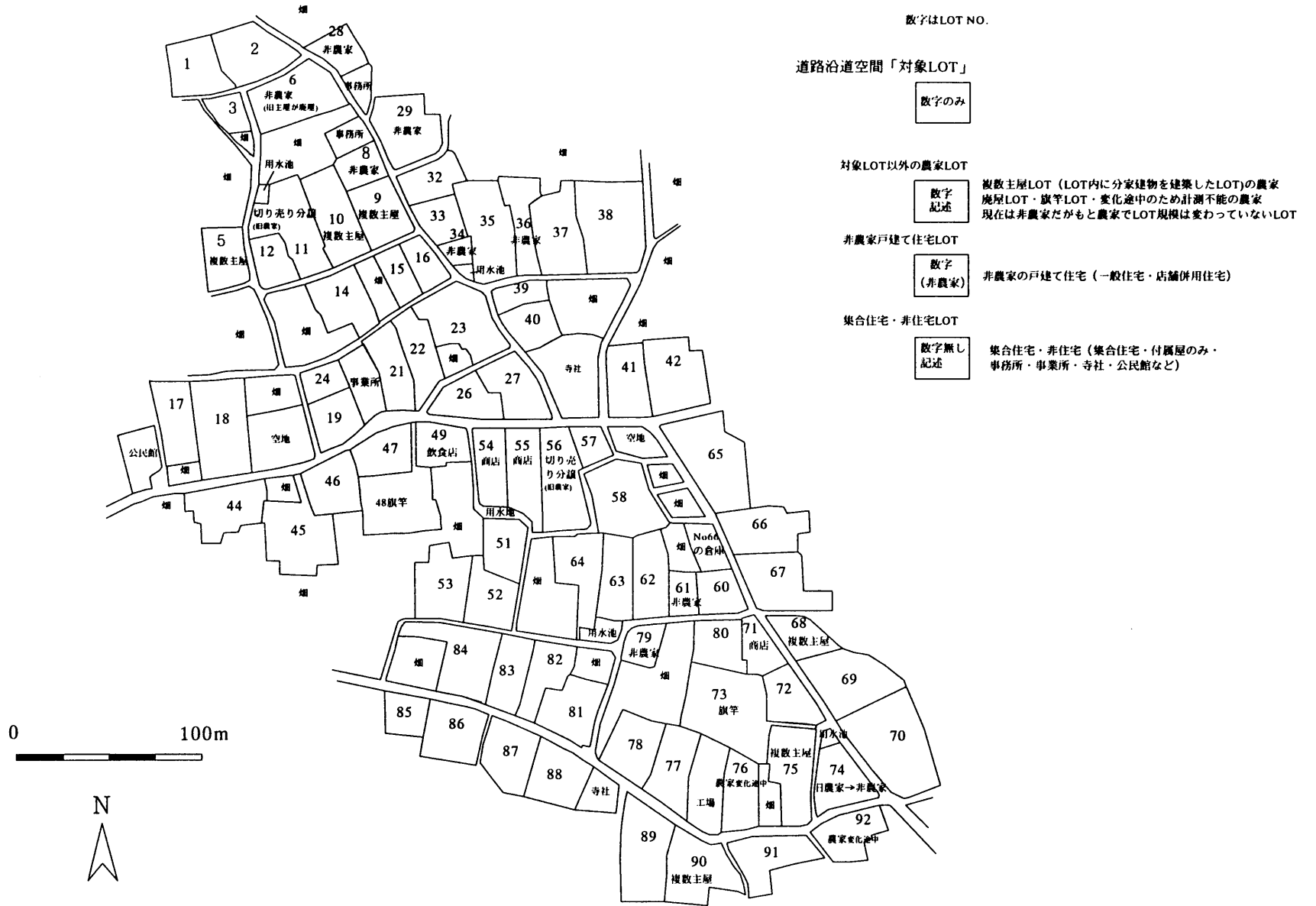


図5-5 対象LOT位置図 (沢登)

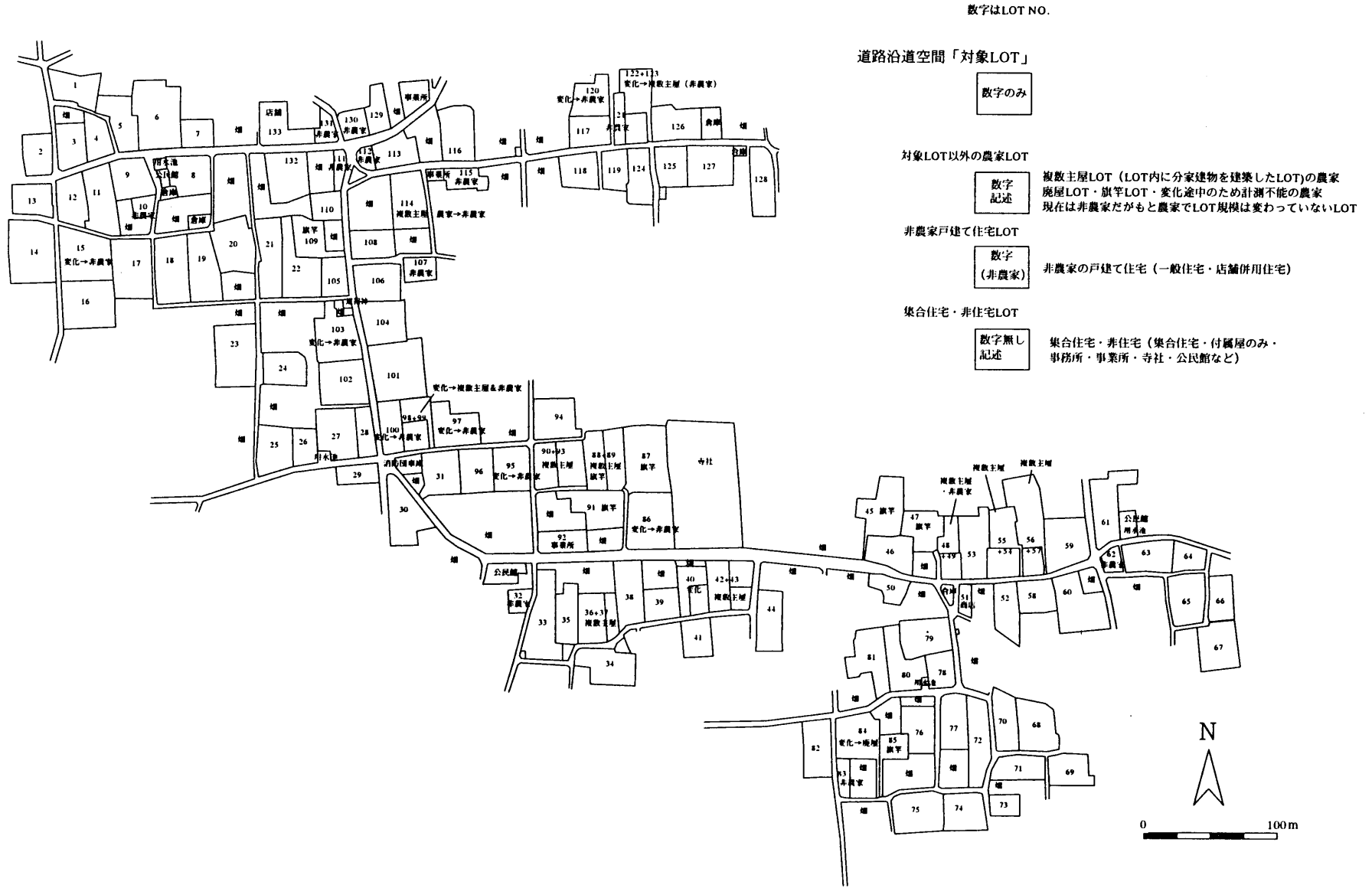


図5-6 対象LOT位置図 (上八田)

数字はLOT NO.

道路沿道空間「対象LOT」

数字のみ

対象LOT以外の農家LOT

数字
記述

複数主屋LOT (LOT内に分家建物を建築したLOT)の農家
廃屋LOT・旗竿LOT・変化途中のため計測不能の農家
現在は非農家だがもと農家でLOT規模は変わっていないLOT

非農家戸建て住宅LOT

数字
(非農家)

非農家の戸建て住宅 (一般住宅・店舗併用住宅)

集合住宅・非住宅LOT

数字無し
記述

集合住宅・非住宅 (集合住宅・付属屋のみ・
事務所・事業所・寺社・公民館など)

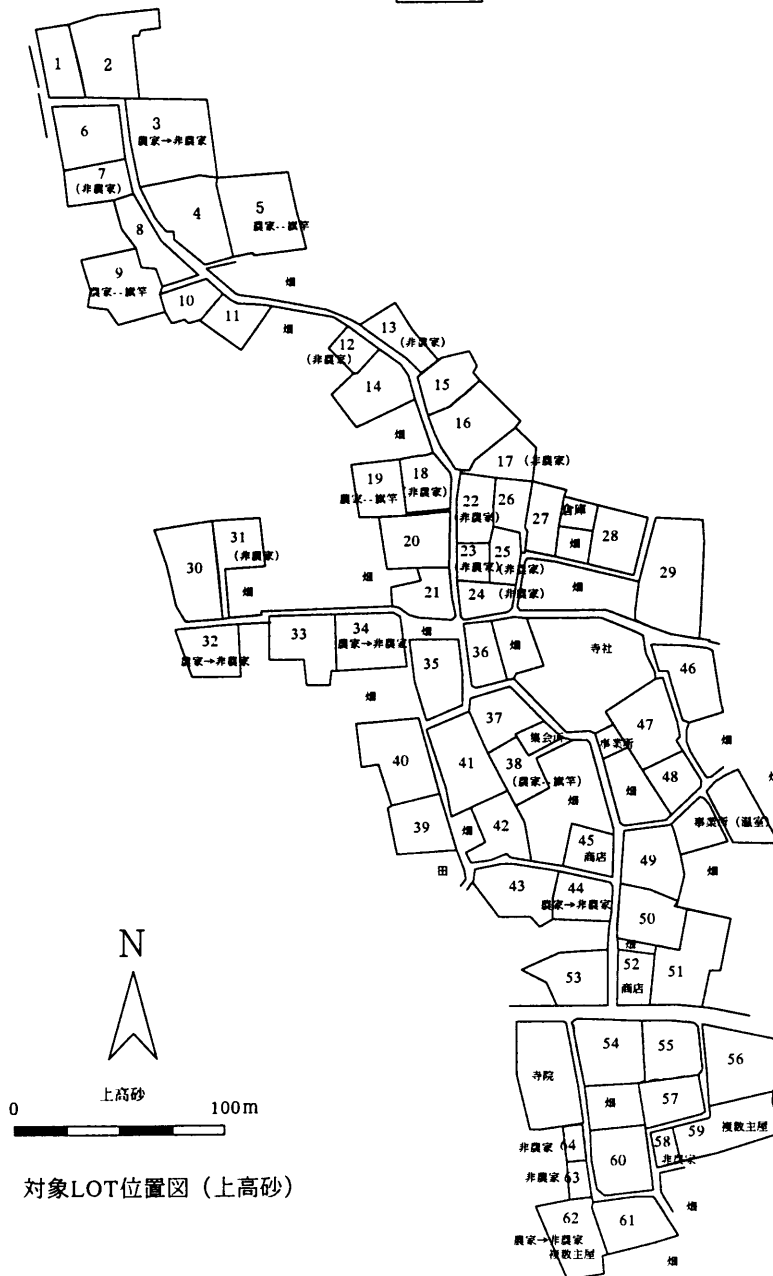


図 5 - 7 対象LOT位置図 (上高砂)

数字はLOT NO.

道路沿道空間「対象LOT」

数字のみ

対象LOT以外の農家LOT

数字
記述

複数主屋LOT (LOT内に分家建物を建築したLOT)の農家
廃屋LOT・旗竿LOT・変化途中のため計測不能の農家
現在は非農家だがもと農家でLOT規模は変わっていないLOT

非農家戸建て住宅LOT

数字
(非農家)

非農家の戸建て住宅 (一般住宅・店舗併用住宅)

集合住宅・非住宅LOT

数字無し
記述

集合住宅・非住宅 (集合住宅・付属屋のみ・
事務所・事業所・寺社・公民館など)

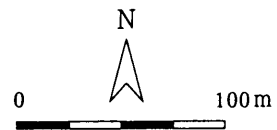
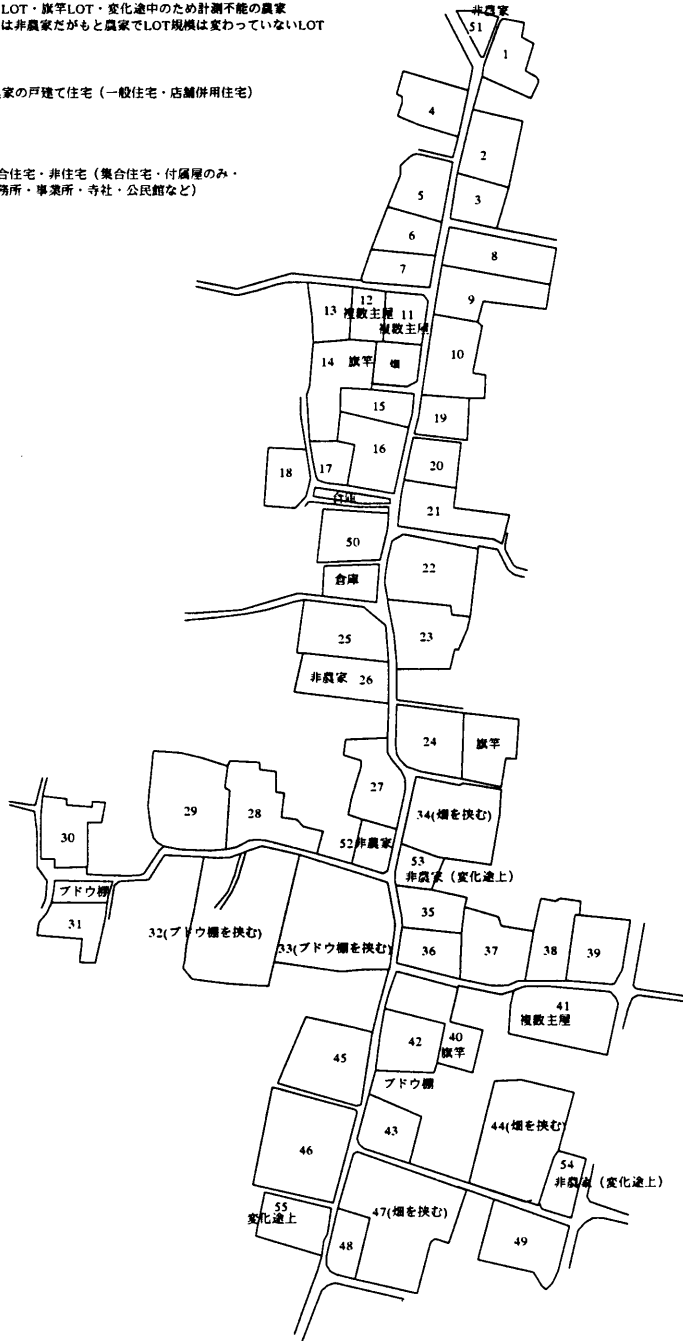


図 5-8 対象LOT位置図 (休息)

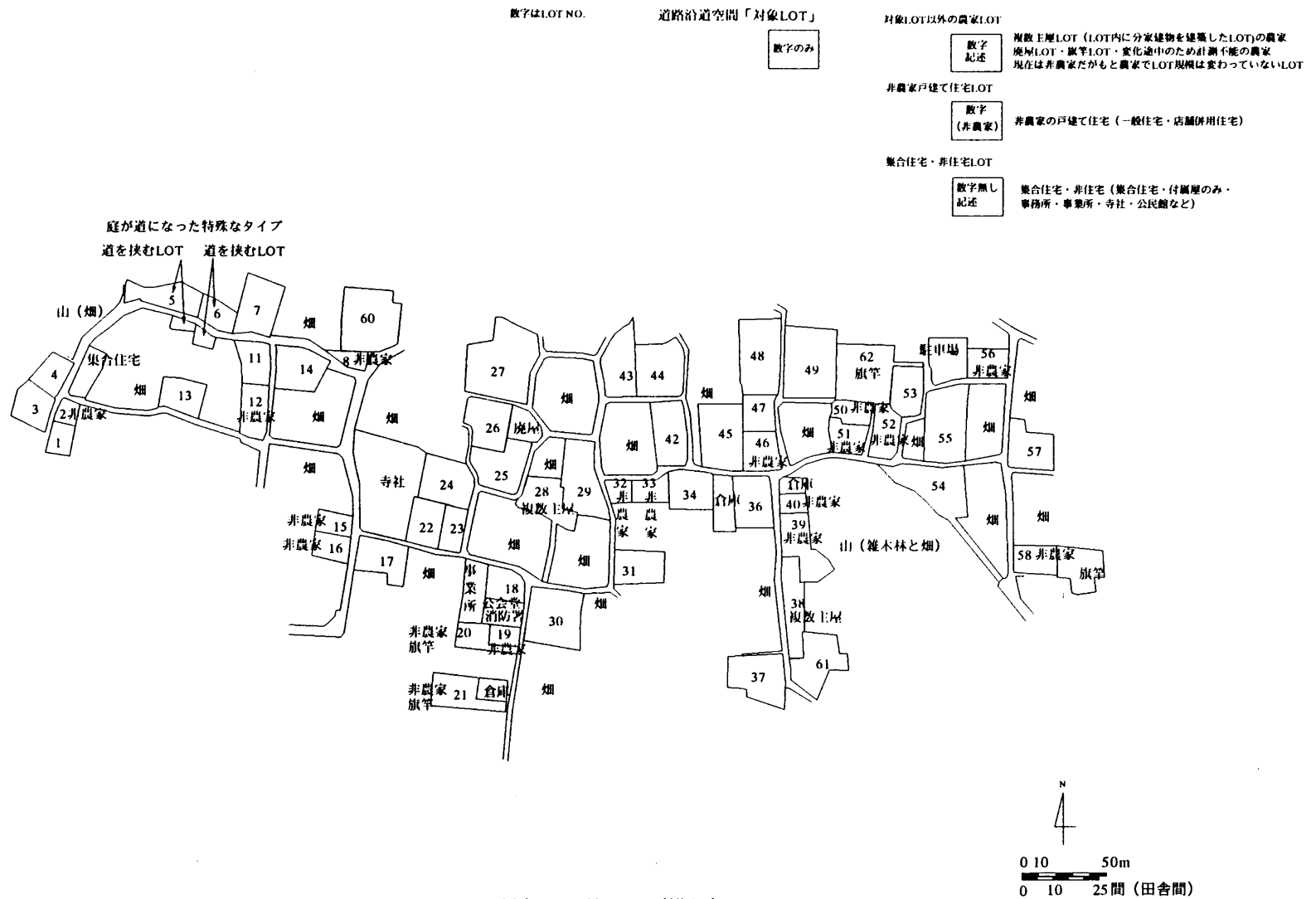


図5-9 対象LOT位置図 (横根)

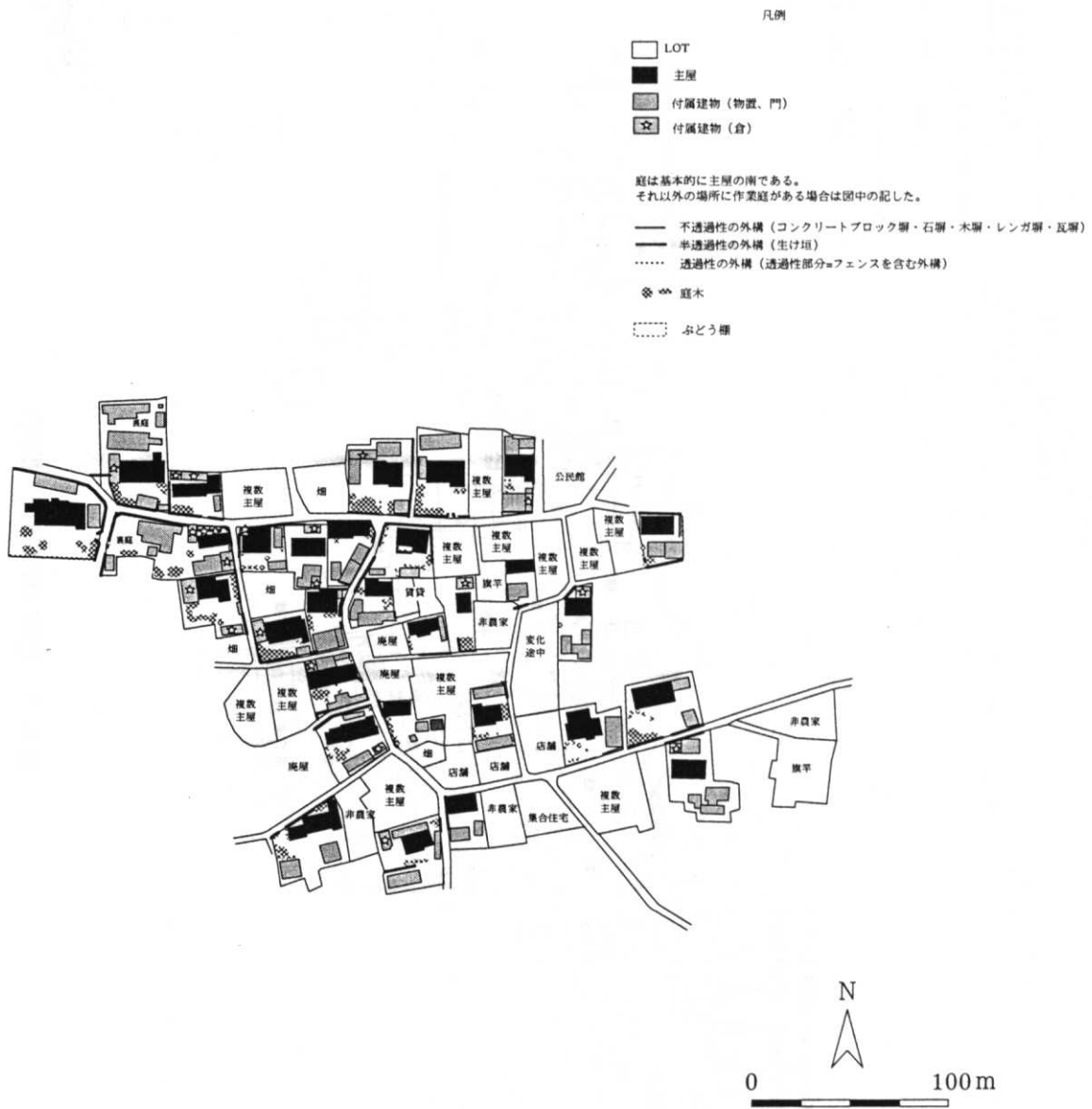


図5-10 LOT内空間要素配置図（東吉田）

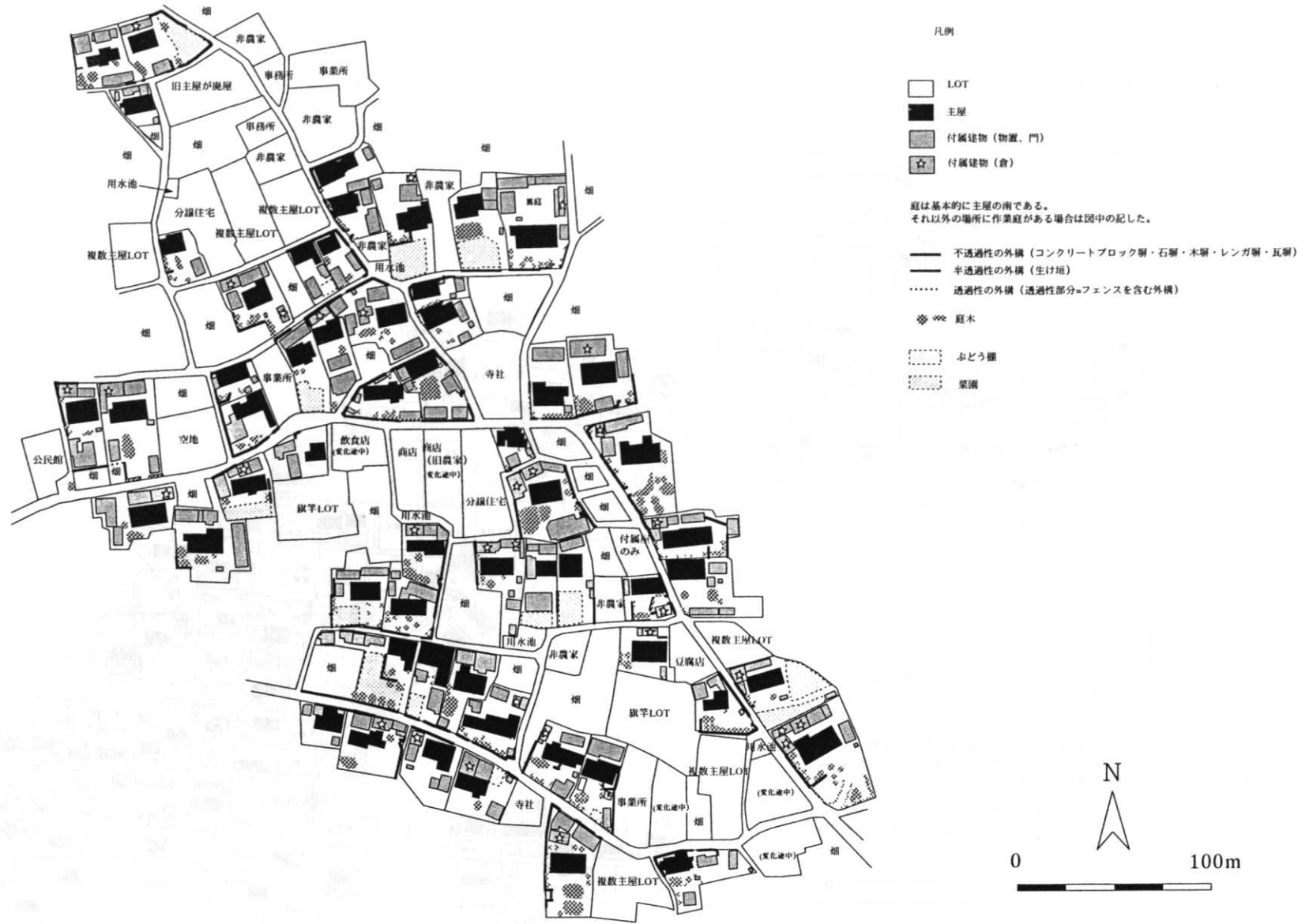


図5-11 LOT内空間要素配置図（沢登）

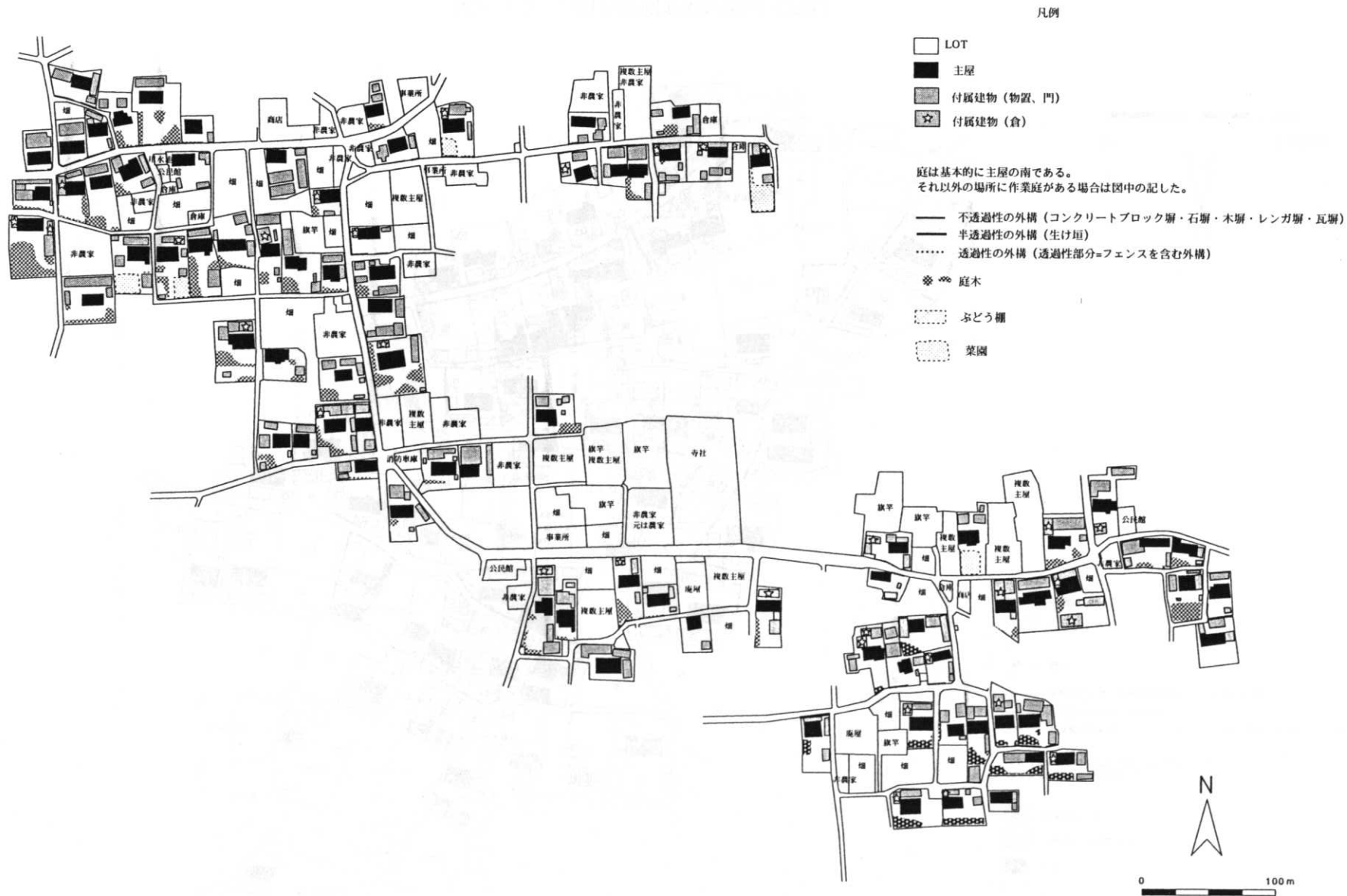





図5-12 LOT内空間要素配置図（上八田）

凡例

-  LOT
-  主屋
-  付属建物（物置、門）
-  付属建物（倉）

庭は基本的に主屋の南である。
それ以外の場所に作業庭がある場合は図中の記した。

-  不透透性の外構（コンクリートブロック塀・石塀・木塀・レンガ塀・瓦塀）
-  半透透性の外構（生け垣）
-  透透性の外構（透透性部分=フェンスを含む外構）

 庭木

 ぶどう棚

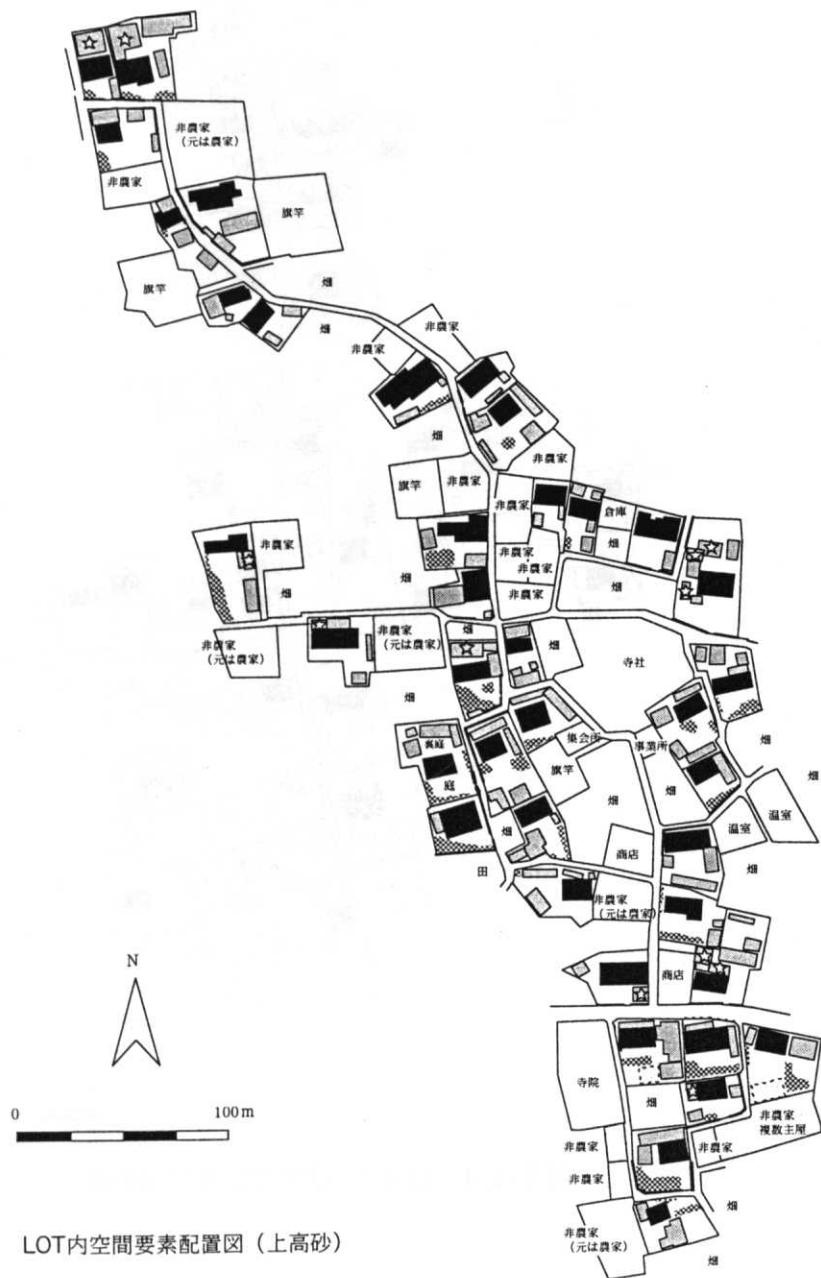


図 5 - 1 3 LOT内空間要素配置図（上高砂）

凡例

- LOT
- 主屋
- ▨ 付属建物（物置、門）
- ☆ 付属建物（倉）

庭は基本的に主屋の南である。
それ以外の場所に作業庭がある場合は図中の記した。

- 不透透性の外構（コンクリートブロック塀・石塀・木塀・レンガ塀・瓦塀）
- 半透透性の外構（生け垣）
- 透透性の外構（透透性部分=フェンスを含む外構）

- ⊗ 庭木
- ⋯ ぶどう棚
- ⋯ 菜園

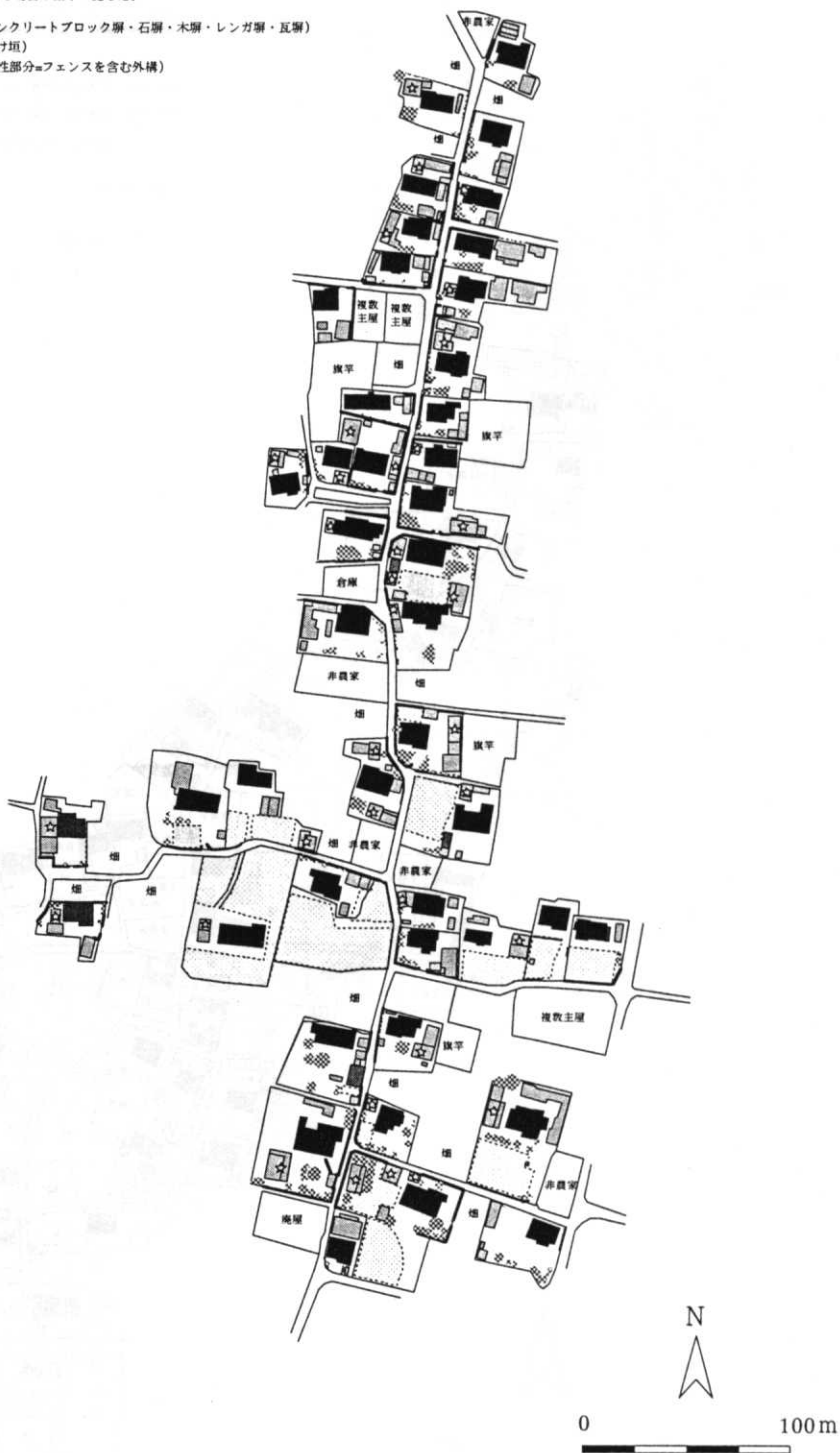


図 5 - 1 4 LOT内空間要素配置図（休息）

凡例

- LOT
- 主屋
- ▨ 付属建物（物置、門）
- ☆ 付属建物（倉）

庭は基本的に主屋の南である。
それ以外の場所に作業庭がある場合は図中の記した。

- 不透透性の外構（コンクリートブロック塀・石塀・木塀・レンガ塀・瓦塀）
- 半透透性の外構（生け垣）
- ⋯⋯ 透透性の外構（透透性部分=フェンスを含む外構）
- ✪ 庭木
- ⋯⋯ ぶどう棚
- ⋯⋯ 菜園

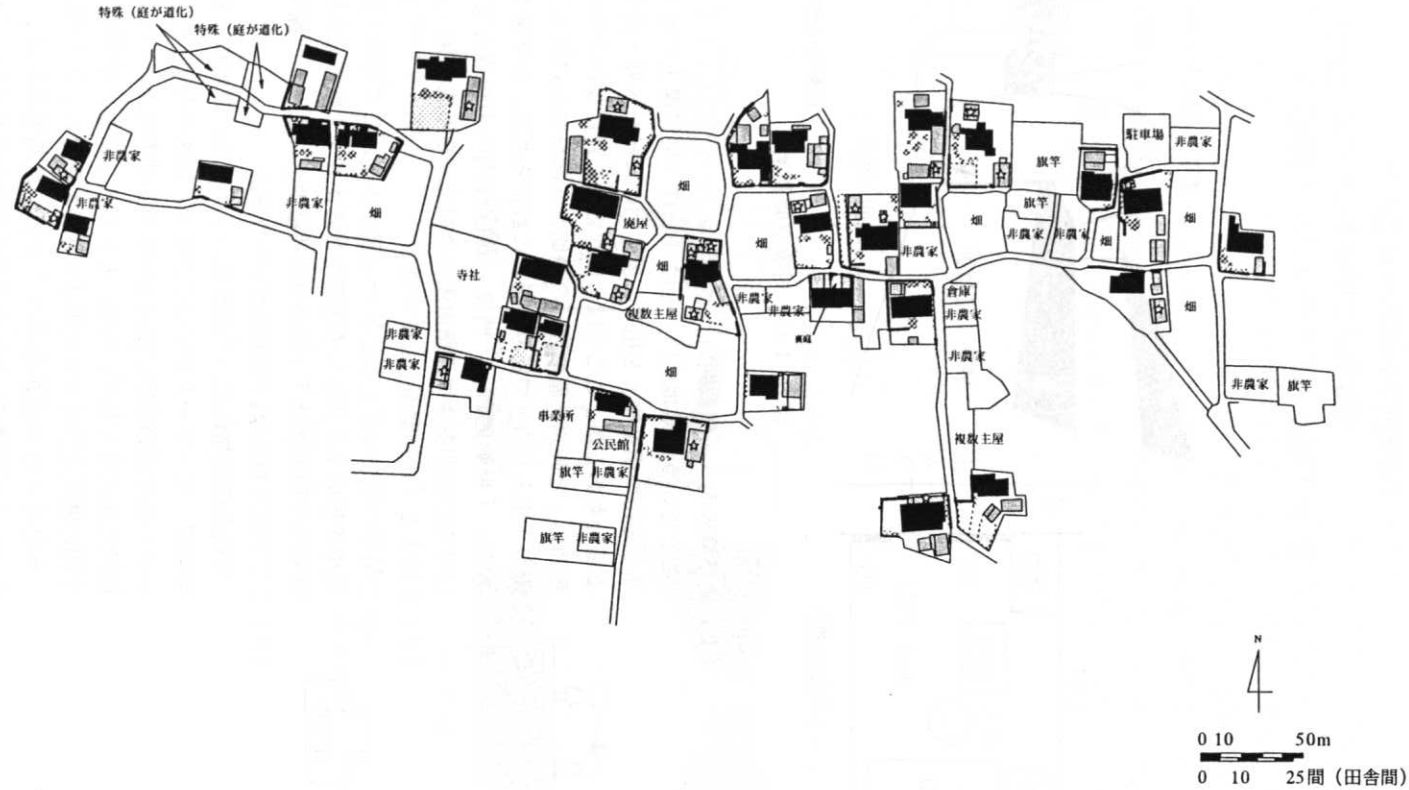


図5-15 LOT内空間要素配置図（横根）

5-1-4 対象空間要素

沿道の囲繞に関する「空間要素」は次の5つである。

①道路境界面：「屋敷囲いと門扉（出入口）」^{下の(1)}

②LOT内の空間要素：

②-1「立面」

・「建物（特に1階壁面^{下の(2)}）」

・「屋敷囲い以外の外構造作物

：空間形成に関係するものは、樹木」^{下の(3)}

②-2「地面（庭^{下の(4)}あるいは通路）」

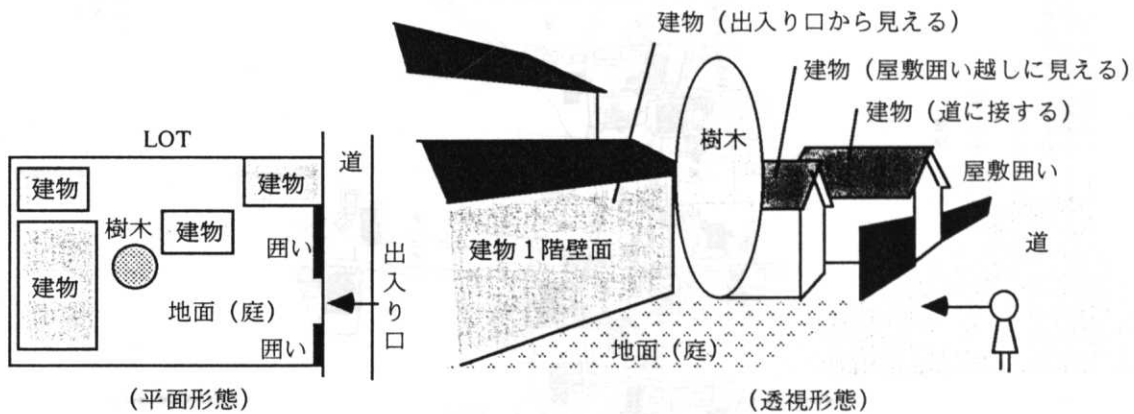
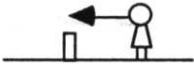


図5-16 対象空間要素

(1) 道路境界面（「屋敷囲い」と「門扉（出入口）」）の定義

ここでいう「敷地囲い」とは「LOTの境界線上にあって、人の出入りを遮断する高さを持つ構造物」を指す。屋敷囲いに縁石・堀・溝など高さが無い構造物を含める場合もあるが、ここでは人間が容易に跨げないような高さを持つ屋敷囲いを「屋敷囲い」と呼ぶ。屋敷囲いの途切れた部分でLOT内と道路の間の行き来を可能な場所が「出入口」であり、そこに設けられた、行き来を遮断する立面が「門扉」である。「屋敷囲い」「門扉」がLOT内への視線を完全に遮断していたら、②のLOT内の空間要素は道路沿道の透視空間を形成しない。



(2) 注目する「建物壁面」とその理由

集落の建物はほとんどが1~2階である。ここでは1階部分の壁面が空間の基盤的特徴を形成する面として重要だと考えて「1階部分の壁面」に注目した。すなわち建物の平面形態は「1階部分の建蔽地」によって把握する。



(3) ここで取り扱わない空間要素とその理由

外構の造作物には、「屋敷囲い」「樹木」の他に、庭園の石組、小型のスチール製物置、カーポート屋根などがある。庭園の石組、小型のスチール製物置は規模が小さいため道路空間の囲繞を形成する効果は小さい。カーポート屋根は対象集落にはほとんど見られず、また、あったとしても、壁が無く見通しを妨げないので道路空間の囲繞を形成する効果は小さいと見なし、ここでは取り上げない。

またその他の道路沿道の「立面」空間要素には、「電柱・電線」「カーブミラー」「道路標識」などの道路付帯施設があるが、これらの施設は点的で、道路空間の囲繞を形成する効果は小さいのでここでは取り扱わない。

(4) 対象とする「庭」

対象集落においてみられた道路沿道の庭は主屋南の「前庭」である。主屋北に作業場の空地（裏庭）を持つLOTもあったが、数が少なく、道路沿道から見えない場合がほとんどであったので、特に断らない限り「庭」とは主屋南の「前庭」を指す。

5-2 道路境界面が囲繞に与える影響（囲繞をつくる空間要素の把握）

沿道の囲繞空間は基本的に「道路境界面」と「その奥（のLOT内の空間要素）の立面」の2つの面で構成される。

「道路境界面」とは道路境界線上（間口上）に設けられた、LOTを取り囲む「屋敷囲い」と、その屋敷囲いの切れ目である「出入口」を塞ぐ「門扉」である。

もし「道路境界面」がその奥のLOT内の空間を隠しているならば、沿道の囲繞空間は「道路境界面」のみに規定され、その奥のLOT内の空間の形態は囲繞空間の形成に関係しない。しかし、対象集落では「道路境界面」は「その奥」の建物の透視を妨げず、庭や建物の空間要素配置が、開放と閉鎖の変化に富む囲繞空間をつくることに特徴があることが現地踏査によって把握された。

そこで、ここでは、道路境界面と道路横断方向の囲繞の関係を見ることによって、その基本的な見え方を把握し、「屋敷囲い」および「門扉」の道路境界面が、沿道空間（道路横断方向の囲繞空間）を規定するのではないことを確認しておきたい。

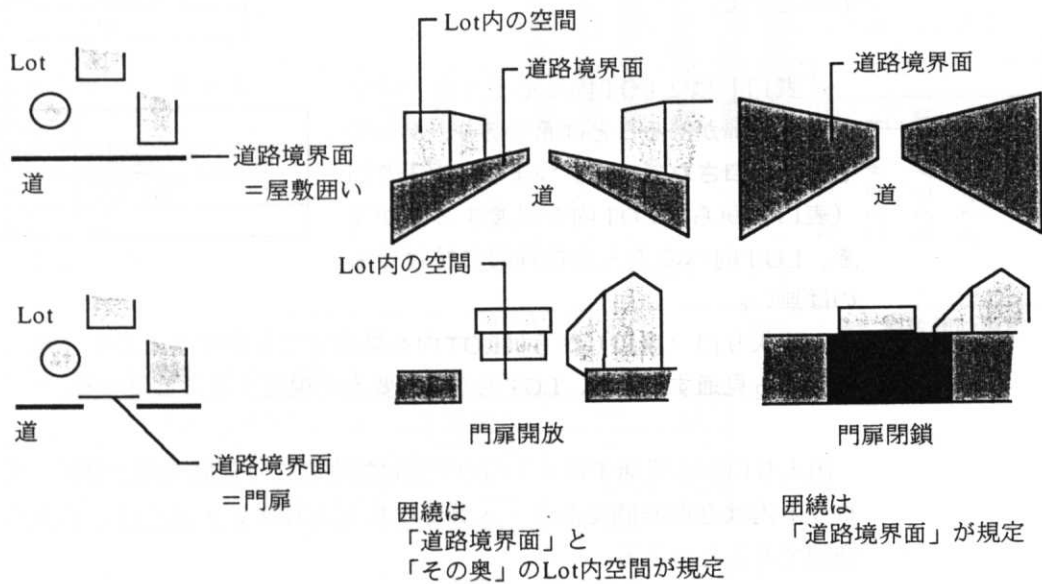


図5-17 道路境界面

5-2-1 門扉と囲繞

日本各地の農家は屋敷囲いによって内と外が区分され、1カ所か家によっては数カ所の開口がついている。道とLOT内部を行き来するための、この開口部が「出入口」である。「出入口」を数カ所をもつ場合は、それは「表口」と「裏口」に区別される。

対象LOTについて「出入口」の数を見てみよう。対象LOTの87%は「出入口」が1つである。その出入口の門扉は常に開放し表庭（主屋南側の前庭）を通して主屋南の玄関に通じている。これを「表口」と呼ぶことにする。

複数の「出入口」を持つLOTは、このような「表口」1つの他に、これとは様子の異なる出入口を持つ。それは「表口」よりも幅が狭く、ほとんどが日常的に門扉が閉鎖されており、空間形態的に見れば「屋敷囲いで閉ざされた間口」と変わらない。このような出入口を「裏口」とみなし、本研究が対象とする「出入口」には含めない。したがって以降では、「出入口」は「表口」を指すものとする。

「表口」は1LOT内に必ず1つだけであり、門扉があることは希であり、あっても常に開口されていた。つまり、出入口（表口）からはLOT内を見渡すことができ、LOT内への進入を物理的に妨げるものは無い。

出入口（表口）からはLOT内を見渡すことができるから、出入口（表口）から見通す空間は、LOT内の空間要素が規定することになる。

出入口から見通すロット内の空間は物理的には道路空間と連続しているが、ロット内は私的空間であり「入れるけれど入れない」見えない結界の張られた空間であると言える。

表5-3 1Lotの出入口数

出入口の数	該当Lot数	
1	250	87%
2	36	12%
3	3	1%
計	289	100%

表5-4 裏口の状況

	該当Lot数	
表庭を見る	4	11%
裏庭を見る	6	16%
門扉閉鎖	28	74%
計	38	100%

表5-5 表口の状況

	該当Lot数	
門扉なしまたは開放	289	100%
門扉閉鎖	0	0%
計	289	100%

5-2-2 屋敷囲いと囲繞

(1) 屋敷囲いの種類と高さ

対象集落のLOTは基本的に屋敷囲いによって囲まれている。

付属屋がLOT境界に近接して配置される場合には付属屋の壁面が屋敷囲いに替わる場合もみられる。

屋敷囲いの種類は、ほとんどが視線を遮る「塀」であった。

屋敷囲いの高さは、平均値（中央値とも）1.4mで、概ね2m以下（90%タイル値）の高さで構成される正規分布を示す。平均値1.4mは日本人の平均的視線高1.5mに近く、半数以上の屋敷囲いはLOT内を覗き込めばLOT内の地面まで容易に見通すことができる高さである。

1LOTの辺を東西南北の4辺に分け、道路に接道して外構を持つ辺をサンプルとして集計した。接道するが屋敷囲いのない辺はサンプルに含めない。異なる種類の屋敷囲いによって1辺が構成される例が希に見られたが、そのような場合は「主要な屋敷囲い」を容易に判断できたので「主要な屋敷囲い」をサンプルとした。屋敷囲いの全く無いLOT辺数は43辺（全辺の9%）

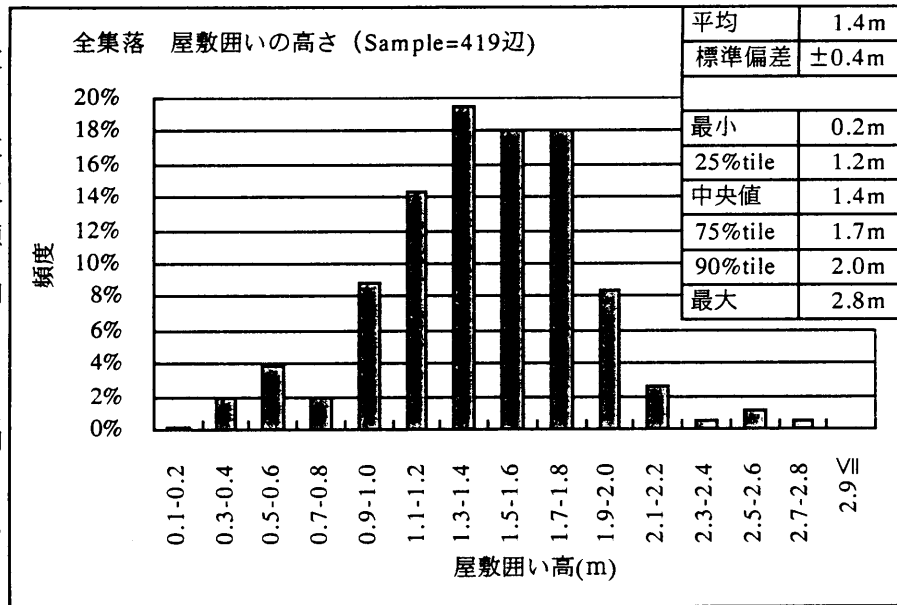


図5-18 屋敷囲い高さ

表5-6 屋敷囲い高さの構成

人の背丈より高い外構高2.0m以上の外構数=	53	13%
平均眼高より高い1.5mを超え2m未満の外構数=	112	27%
平均眼高より低い1.5m以下の外構数=	254	61%
計（屋敷囲いのある場合のみ）	419	100%

表5-7 屋敷囲いの種類別該当数と高さ（屋敷囲い無しは算定に含めない）

視線の透過性	屋敷囲い種類	うち			平均高さ	（不透過 半透過or 透過）	最大高さ	視線不透過部分の最大
		該当数	伝統意匠	屋敷囲いに沿う庭木あり				
透過	フェンス	4	0	1	1.2m		1.2m	-
半透過	生け垣	28	23	10	2.0m		2.5m	-
不透過+透過	塀&フェンス	41	2	3	1.5m	(0.9m +0.6m)	2.4m	1.8m
不透過+半透過	塀&生垣	8	7	0	-		2.0m	1.2m
不透過	塀	338	75	5	1.4m		2.8m	2.8m
total		419	107	19	1.3m			

・伝統的意匠＝近代以前から住宅外構に使われてきた素材・様式

：生け垣、柴垣、土壁・築地塀、板塀、木垣、竹垣、土垣、石垣、石柵。

これ以外のものは近代的意匠である

：コンクリート塀、煉瓦塀、タイル張り、塗装、鉄板、人造石ブロック、切石ブロック、スチールフェンスなど。

・屋敷囲いに沿う庭木：屋敷囲いのすぐ背面（住居側）に接して植えられた植栽が屋敷囲いの上に張り出している状態。

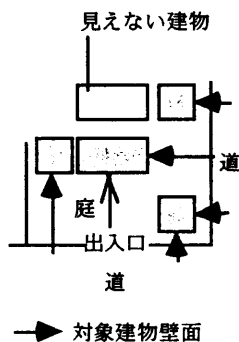
(2) 囲繞と屋敷囲いの関係

1) 方法

ここでは、道路上に立つ人が視線を道路横断方向に向けたときに見る立面の状況を把握することによって、屋敷囲いが囲繞にどのように係わっているかを明らかにする。検討対象は「出入口以外の沿道に面する建物」の見え方である。

大野⁵⁾は「建物の道側壁面(=1次面)と道路境界面(=2次面)が作り出す道路沿道の見え方」を「表層」と呼んだ。その言葉を借りて「出入口以外の道路境界面(主として屋敷囲い越し)におけるの囲繞空間の見え方」を「表層」と呼ぶことにする。

特にここで明らかにしたいことは、「出入口以外の道路境界面に屋敷囲いが有るか無いか」と「屋敷囲いがあった場合は屋敷囲い(2次面)が主要な面になるのか、建物(1次面)が主要な面になるのか、どちらなのか」の2点である。具体的な作業手順は次の通りとした。



①対象

対象LOT(道路沿道の伝統的農家)内にある道路に面した建物壁面の見え方を対象とする。建物壁面は東西南北の4面を1つの壁面とする。道路に面する建物壁面とは、道路からみて他の建物に隠されない建物壁面であり、建物と道路の距離にはよらない。出入口から道路横断方向に視線を向けたときに見える建物壁面はすでに出入口から見えているので、その壁面は対象としない。

②1次面

1次面の計測対象は、1つの建物の1階壁面とする。建物はその壁面の長さを問わず1壁面を1サンプルとした。1つの建物壁面に対して種類の異なる「見え方(例えば違う種類の屋敷囲い)」は希であったので、そのような場合は主要な「見え方」を取った。

建物(1次面)には主屋と付属屋があるが、主屋と付属屋によって表層の特徴が異なっていたので、主屋と付属屋を分けて集計する。

③1.5次面

屋敷囲いに沿う樹木やLOT内の樹木が建物を隠す場合も考えられるので、そのような建物を隠す樹木を1.5次面とする。

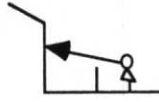
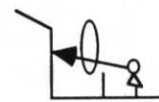
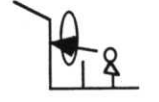
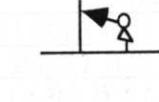
④主要面が建物1階壁面となる判断基準

現地において視線高1.5m(=日本人の平均眼高)で道路横断方向に視線を向けたときに、建物1階(厳密には1階の窓あるいは窓の位置に相当する軒下部分)が見える場合に「建物1階壁面が主要面」となると判断する。この判断に従えば、概ね、視野に占める高さは道路境界面の高さよりも、それより上に見える屋根面を含む建物壁面の高さの方が大きくなる。

建物の手前の一部に樹木が植栽される例は少なくないが、「建物1階が完全に隠されない」ならば主要に見える面は1次面とする。

5) 横文彦、若月幸敏、大野秀敏、高谷時彦(1980)「見えがくれする都市」、鹿島出版会、p140-195

集落の沿道の表層は下図に示すようになり、表層のタイプは6タイプに分類できる（下表の[○-○]タイプ）。各タイプの出現数を構成比(%)で記した。

		2次面				
		屋敷囲いあり			屋敷囲い無し	
		不透過 (塀)	半透過 (生垣)	透過 (フェンス)		
主要面	1次面 (主屋 1階壁面) 23%	[屋敷囲い-主屋]Type 16% 庭の樹木(1.5次面)の影響あり(半透過)			[露出-主屋]Type 7%	
	1次面 (付属屋 1階壁面) 71%	[屋敷囲い-付属屋]Type 30% 庭の樹木(1.5次面)の影響あり(半透過)			[露出-付属屋]Type 41%	
	庭の樹木 (1.5次面)	[樹木]Type 0.4%				
		主屋を隠す 主屋2階が見える 付属屋を隠す 付属屋2階が見える				
2次面	[屋敷囲い]Type 6%					
		主屋を隠す 主屋2階が見える 付属屋を隠す 付属屋2階が見える				

%数字は全サンプルに占める割合

図5-19 表層の見え方と表層タイプ

6つの表層タイプの見え方を下表に説明する。

表5-8 集落の道路沿道の表層タイプの説明

2次面の有無 主要に見える面	屋敷囲いあり	屋敷囲い無し
	1次面 主屋1階壁面	[屋敷囲い-主屋]タイプ 屋敷囲い越しに主屋1階壁面が見える。主屋1階壁面前の一部分に庭木が植えられている場合を含む。
付属屋1階壁面	[屋敷囲い-付属屋]タイプ 屋敷囲い越しに付属屋1階壁面が見える。付属屋1階壁面前の一部分に庭木が植えられている場合を含む。	[露出-付属屋]タイプ 屋敷囲いが無く付属屋の壁面が道路側に露出する。付属屋1階壁面前の一部分に庭木が植えられている場合を含む。
1.5次面 庭の樹木	[樹木]タイプ LOT内の樹木によって建物1階壁面が完全に隠されている。	
2次面 屋敷囲い	[屋敷囲い]タイプ 屋敷囲いによって建物1階壁面が完全に隠されている。	

2) 屋敷囲いと囲繞の関係および典型的な表層

各表層タイプの出現数を次表に整理する。

この結果から次のような結論が導かれる。

- ① 2次面が主要面となる例、すなわち屋敷囲いがLOT内の建物を隠し沿道の囲繞を規定している例は6%とほとんど無く、道路境界面は沿道の囲繞を規定していない。屋敷囲いに沿う樹木に隠される例も0.4%とほとんど無く、沿道の囲繞は道路境界面によって規定されるのではなく、LOT内の建物が主に係わっていることが確認できた。
- ② 屋敷囲い越しの建物は46% (=16%+30%)、屋敷囲いが無く壁面を道路側に露出させた建物も48% (=41%+7%) とこの2つが主要である。中でも壁面を露出させた付属屋の場合が41%と表層タイプの中で最も多くを占め、典型的かつ特徴的な表層と言える。付属屋は通常的生活空間でないことからLOT内空間の効率的利用のために外構を作らずに建物を道路境界線ぎりぎりに建ててもプライバシー上問題はないためと考えられる。また、倉は火難から生活品を守るという実用的な機能に加えて、富の象徴として「外に見せる」意図もあったといわれているが、倉の壁面を海鼠壁などを用いて美しく装飾して道路側へ見せるという意図も考えられる。
- ③ 建物の種類に注目すれば主屋の3割に対して付属屋が7割 (=30+41%) と多くを占める。

表5-9 表層タイプの出現数

[] = はTYPE 数字は該当数	2次面の有無		計
	外構有り	外構無し	
1次面 (主屋1階壁面)	[外構-主屋] = 140 (16%)	[露出-主屋] = 64 (7%)	825 (94%)
1次面 (付属屋1階壁面)	[外構-付属屋] = 260 (30%)	[露出-付属屋] = 361 (41%)	
1.5次面 (庭木)	[庭木] = 4 (0.4%)		56 (6%)
2次面 (屋敷囲い)	[屋敷囲い] = 52 (6%)		
計			881 (100%)

数字は該当数 (%) はSample計に対する比

5-2-3 まとめ- 道路境界面（屋敷囲いと門扉）と囲繞

道路境界面は「出入口」と「出入口以外」の部分に分けることができる。「出入口」の道路境界面の要素は「門扉」であり、「出入口以外」の道路境界面の要素は「屋敷囲い」である。

「門扉」は開放されていて、出入口からはLOT内を完全に見渡すことができた。したがって出入口（表口）から見通す空間は、LOT内の空間要素が規定する。

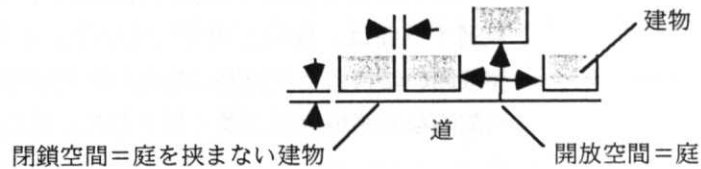
「屋敷囲い」も背後の建物を隠さず、LOT内の建物が表層の主要面を構成していた。植栽も建物を完全には隠していなかった。したがって屋敷囲い越しに見通す空間は、建物が規定している。さらに、対象集落には、屋敷囲いが無く屋敷囲いに替わって道路に接近した付属屋壁面が道路境界面を形成するという、特徴的な道路境界面が多く見られた。また表層となる建物の多くは付属屋であった。

このように、沿道の囲繞空間は建物（特に付属屋、中でも屋敷囲いのない壁面を露出させた付属屋が特徴的）が規定し、出入口から見通す空間はLOT内の空間要素が規定している。

5-3 沿道の定性的特徴

対象集落の沿道（すなわち沿道の圍繞平面形態）の空間特徴は、庭による開放的な空間（すなわち建物が大きくセットバックする空間）と、道路に接近した建物による閉鎖的な空間、がつくる変化に富む空間であることが、現地踏査によって把握できる。

前節では、沿道の圍繞は、道路境界面が規定するのではなくLOT内の空間（建物）によって形成されていることを示した。本節ではLOT内の空間がつくるこのような開放と閉鎖の変化に富む空間の定性的な特徴を示すために、開放空間をつくる「庭」と閉鎖空間をつくる「建物（道との間に庭を挟まない建物）」が沿道にどのように現れ、どのような見え方をしているかを明らかにしたい。



道路沿道は、出入口の有無によって「出入口のある間口」と「出入口の無い間口」に分けられる。どちらの間口についても、沿道の開放空間あるいは閉鎖空間の出現の状況は、沿道が「庭」か「建物」かによって、把握することができるだろう。

「出入口のある間口」では、これに加えて、「出入口」前に視点を置いてLOT内を眺めたときの特別で重要な見え方がある。出入口は常に開放されていたから、この「出入口から見通す空間」はLOT内を完全に見通すことができる。出入口がLOT内の何に接するかによってその見え方は異なるだろう。出入口が庭や通路に接する場合は、道路側に開いた凹空間の3次元的な見え方となる（下図⑤⑦⑧）。出入口が建物の出入口に一致する場合には3次元的な空間は出現しない（下図④⑥）。

		閉鎖空間		開放+閉鎖空間		開放空間
出入口の無い間口	沿道	建物		建物 + 庭		庭
	平面図	① 建物 道		② 庭		③ 庭
	透視図					
出入口のある間口	沿道	建物	建物(+通路)	建物 + 庭		庭
	出入口	建物	通路	建物	庭	庭
	平面図	④ 建物 屋敷囲い 道 入口	⑤ 通路	⑥ 建物 庭	⑦ 建物 庭	⑧ 庭
	透視図					

建物は「庭を挟まない建物」

は「庭を挟む建物」

図5-20 道路沿道タイプ

「出入口のある間口」「出入口の無い間口」別に、沿道が、開放空間をつくる「庭」であるか、閉鎖空間をつくる「建物」であるかを分類し、さらに「出入口のある間口」について「出入口がどこに接しているか」を分類すると、考えられる全ての類型は全部で8つとなる（前図の①～⑧）。これを「沿道タイプ」と呼ぶことにする。「沿道の庭」は、『注目する間口から、主屋南の空地を見たときに、方形で取り囲むことができる空地の範囲』とする（下図参照）。「沿道の建物」は道路から見て「庭を挟まない建物」とした。出入口が接する空間は基本的に「庭」か「建物」であるが、「出入口のある間口」ではこの他に「通路」が考えられるのでこれを加えた。建物や屋敷囲いに挟まれた幅2m程度の線状の空間を「通路」とし、「通路」は閉鎖空間に類別した。

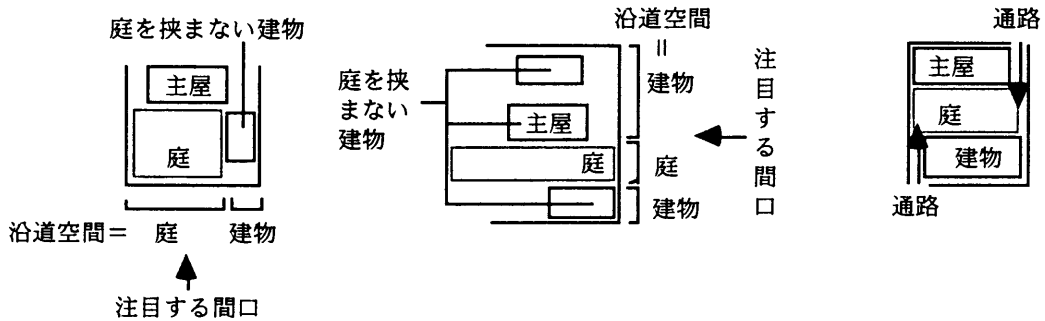


図5-21 沿道の庭、建物、通路の判断例

本節では、対象集落の沿道タイプを明らかにし、さらに出入口から見通す開放空間と、建物の接近する閉鎖空間の見え方の特徴を明らかにすることによって、沿道の定性的特徴を把握する。現地踏査によって沿道の開放・閉鎖の特徴は、間口の方位（南北道路の東面・西面、東西道路の南面・北面）によって明らかに異なっていた。そこで、特徴把握は間口の方位別に行う。

5-3-1 間口と出入口

まず、対象である「出入口のある間口」と「出入口の無い間口」の定義や、対象とする間口がいくつあるのか、あるいは出入口の典型的な位置の特徴、といった基本的な把握をしておこう。

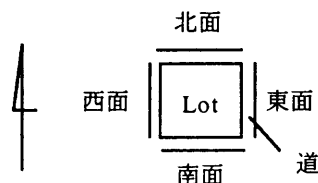
(1) 1 LOTあたりの間口の数

LOTは概ね四方形と見なすことができ、さらに主屋の向きとLOT辺の関係を見ることによってLOTの四方形の各辺を方位に対応させることができる。下図のようにLOTの辺を4つの方位に対応させたとき、その辺の中で道路に接する1辺を1つの「間口」と定義する。

1 LOTあたりの「間口」の数を計上した結果が下の表である。

間口が1面のLOTが対象LOT数の50%を占め、2面のLOTが42%を占めており、1面ないし2面が典型と言える。

表5-10 1 Lotの間口数



間口の数	該当Lot数	
1面	142	50%
2面	122	42%
3面	24	8%
4面	1	0%
計	289	100%

(2) 出入り口のある間口と出入り口の無い間口の数

出入り口は「表口」であり、出入り口は1LOTにひとつある。

間口数は2面以上持つLOTが半数あったから出入り口のない間口が存在する。「出入り口のある間口」の数：「出入り口のない間口」の数は6割：4割となった。

表5-11 間口の出入り口有無

間口の分類	該当Lot数
出入り口あり	289 63%
出入り口なし	173 37%
計	462 100%

(3) 間口の方位と、出入り口の有無

間口の方位は南面（LOTの南面が道路に接する場合）が3割とやや多く、他は2割でほぼ同数である。

一方、出入り口の有無は方位によって偏っている。南面・東面は間口の8割が出入り口となり、ほとんどが出入り口を持つ間口である。西面は出入り口のある間口が6割と東面に比べればやや少なく、北面は出入り口のある間口が2割しかなく、ほとんど（8割）が出入り口をもたない面となっている。

表5-12 間口の方位

間口の方位	該当Lot数
南	146 32%
東	105 23%
西	99 21%
北	112 24%
計	462 100%

表5-13 間口の方位と出入り口（表口）の関係

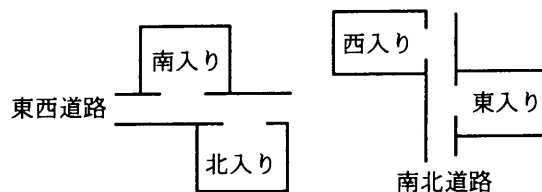
方位	出入り口あり (表口)	出入り口なし (裏口含む)	計
南	120 (82%)	26 (18%)	146 (100%)
東	81 (77%)	24 (23%)	105 (100%)
西	60 (61%)	39 (39%)	99 (100%)
北	28 (25%)	84 (75%)	112 (100%)
計	289 (63%)	173 (37%)	462 (100%)

このように、出入り口の位置は方位を選んでいる。出入り口のある間口に占める各出入り口方位の構成を見ると次のようになる。

対象LOTの出入り口位置は、南入りが4割と最も多く、次いで東入りが3割、西入りが2割の順であった。北入りは1割と少なく、農家の出入り口位置としては典型ではないと言える。

表5-14 出入り口の方位位置

	LOT数
南入り	120 42%
東入り	81 28%
西入り	60 20%
北入り	28 10%
計	289 100%



浦良一ほか⁶⁾、は日本各地の農家の出入り口位置の典型を経験的に「・・・たいていの場合、東側の南寄りまたは、南側の東寄りの隅にあり・・・」と述べており、農家の出入り口の位置は南東隅に多いことを経験的に指摘している。対象LOTの出入り口の位置は南東隅に多いわけではないが、南入りと東西入りが多く北入りは典型ではないという特徴は、浦の指摘に反してはいない。

5-3-2 沿道タイプ（沿道の定性的空間類型）

5-3節の冒頭で述べた「沿道タイプ」（下に再掲）に該当する「間口」数を計上する。

8つの類型のうち、該当数の無かったタイプは出入り口が建物に接する2つのタイプであった。この2つのタイプは除外して、該当数のあった6つの型にA1～B3のタイプ名を付け、各タイプに該当する間口数を計上した。

		閉鎖空間		開放+閉鎖空間		開放空間	
出入り口の無い間口	沿道	建物		建物 + 庭		庭	
	平面図	A1タイプ 		A2タイプ 		A3タイプ 	
	透視図						
出入り口のある間口	沿道	建物	建物 (+ 通路)	建物 + 庭	庭		
	平面図	該当無し 	B1タイプ 	該当無し 	B2タイプ 	B3タイプ 	
	透視図						

建物 は「庭を挟まない建物」 は「庭を挟む建物」

図5-22 沿道タイプ（対象空間に見られた類型）

6つのタイプの該当数の結果を、間口方位別に示したのが次表である。

間口の方位を区別しないで見れば（表の計）、
「出入り口のある間口」の「開放+閉鎖タイプ」が約半数を占めて最も多く、
「出入り口の無い間口」の「開放+閉鎖タイプ」も合わせれば、全体の6割（＝48+13％）を占め、「開放+閉鎖タイプ」が集落の典型であると言える。
「開放+閉鎖タイプ」は沿道に、庭の「開放空間」と建物の「閉鎖空間」を交互に出現させる（LOTとLOTの間に道路が入っても基本的にこのパターンは変わらない）。この「開放と閉鎖が繰り返される変化に富む沿道の空間」が対象集落の沿道の重要な定性的形態特徴であることを確認できた。

6) 浦良一、下河辺千穂子、持田照夫、萩原正三（1976）「建築計画学7-農家住宅」丸善、P178

「開放+閉鎖タイプ」に次いで、出入り口の無い間口の「閉鎖」タイプが2割を占め、出入り口のある間口の「閉鎖」タイプも合わせれば、全体の3割(=23+9%)を占める。

残る1割は「開放」タイプであり、そのほとんどは出入り口のある間口である。

各接道方位別に該当数の多いタイプを典型タイプとして抽出すると、次のようになる。

東西道路のLOT南側が接道する沿道(つまり道路の北側)の典型は、

- ①「出入り口が庭に接する間口」の「開放+閉鎖」のタイプ(B2)
: 東西道路南面接道の6割を占める

東西道路のLOT北側が接道する沿道(つまり道路の南側)の典型は、

- ②「出入り口の無い間口」の「閉鎖」タイプ(A1)
: 東西道路北面接道の8割を占める

南北道路は、道路の西側・東側ともに

- ③「出入り口が庭に接する間口」の「開放+閉鎖」のタイプ(B2)
: 南北道路の7割を占める

このように、南面・東面・西面の典型はいずれも「出入り口のある間口」で出入り口が庭に接する「開放+閉鎖タイプ」であり、北面は「出入り口の無い間口」の「閉鎖タイプ」である。この2つの典型タイプで全間口の7割を占める。内訳は南東西面の「開放+閉鎖」が5割、北面の「閉鎖」が2割である。

表5-15 沿道空間タイプに該当する間口数(各間口方位に占める割合)

		数字は間口数、%数字は各間口方位の間口数に占める割合						
		■ 出入り口の無い間口			■ 出入り口のある間口			計
		A1 閉鎖	A2 開放+閉鎖	A3 開放	B1 閉鎖	B2 開放+閉鎖	B3 開放	
出入り口					通路	庭	庭	
接道 道路	間口							
	東西 道路	南	9 6%	10 6%	7 5%	6 4%	86 59%	28 19%
北		84 75%	0 0%	0 0%	27 24%	1 1%	0 0%	112 100%
南北道路		12 6%	51 25%	0 0%	8 4%	133 65%	0 0%	204 100%
計		105 23%	61 13%	7 2%	41 9%	220 48%	28 6%	462 100%
南北道路の詳細								
		A1	A2	A3	B1	B2	B3	
南北 道路	東	6 6%	17 16%	0 0%	4 4%	77 74%	0 0%	104 100%
	西	6 6%	34 34%	0 0%	4 4%	56 56%	0 0%	100 100%

数字は間口数、%数字は全間口数462に占める割合

		■ 出入り口の無い間口			■ 出入り口のある間口			計
		A1 閉鎖	A2 開放+閉鎖	A3 開放	B1 閉鎖	B2 開放+閉鎖	B3 開放	
東西 道路	南	9 2%	10 2%	7 2%	6 1%	86 19%	28 6%	146 32%
	北	84 18%	0 0%	0 0%	27 6%	1 0%	0 0%	112 24%
南北道路		12 3%	51 11%	0 0%	8 2%	133 29%	0 0%	204 44%
計		105 23%	61 13%	7 2%	41 9%	220 48%	28 6%	462 100%

が典型タイプ

間口の方位は「Lotから見た間口の方位」。例えば南入りLotの間口方位は「南」である
全間口数に対する構成比 典型タイプの合計=66%(=19+29+18)

5-3-3 開放空間（出入口から見通す開放空間）の特徴

沿道の開放空間は「ロットの南・東・西面において、庭に接する出入口を持つ、開放+閉鎖タイプの間口」から見通す開放空間が典型である。その開放空間を見る代表的な視点位置は「出入口」である。出入口は物理的な障壁（門扉）が無く、道路面と同じ平面がLOT内に連続し、「出入口」から見通す開放空間の見え方はLOT内を完全に見通すことができ、沿道の中でも特別で重要な見え方である。



出入口から見通す空間

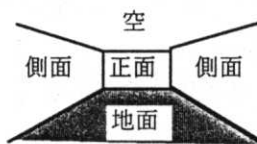


図5-23 出入口から見通す空間

出入口は基本的に「庭」に接していたから、「出入口から見通す空間」はこの庭の「地面」の平面が何の障害もなく見えることに特徴があり、そのため、その空間の見え方はLOT内の奥行き方向に形成される「地面」「側面」「正面」の3次元空間として捉えられる。

以下、南・東・西面の典型タイプである「出入口のある間口の開放+閉鎖タイプ」を対象にして、その間口の出入口からの見え方の特徴を「地面」「側面」「正面」によって把握する。なお対象とするこの典型沿道タイプは、「出入口のある間口」の約8割、「開放空間を持つ間口」の7割を占めている（下表）。

表5-16 出入口のある間口の沿道タイプ

		■出入口のある間口							
出入口		通路		庭		庭		計	
接道	間口	B1	B2	B3					
道路		閉鎖	開放+閉鎖	開放					
東西	南	6	2%	86	30%	28	10%	120	42%
	北	27	9%	1	0%	0	0%	28	10%
南北	東	4	1%	77	27%	0	0%	81	28%
	西	4	1%	56	19%	0	0%	60	21%
計		41	14%	220	76%	28	10%	289	100%

□ は典型タイプ

表5-17 開放空間を持つ間口の沿道タイプ

		■開放空間を持つ間口									
出入口		なし		庭		庭		計			
接道	間口	A2	A3	B2	B3						
道路		開放+閉鎖	開放	開放+閉鎖	開放						
東西	南	9	3%	8	3%	86	27%	28	9%	131	41%
	北	0	0%	0	0%	1	0%	0	0%	2	1%
南北	東	17	5%	0	0%	77	24%	0	0%	94	30%
	西	34	11%	0	0%	56	18%	0	0%	90	28%
計		60	19%	8	3%	220	69%	29	9%	316	100%

□ は典型タイプ

(1) 地面と側面

沿道タイプで見たように南東西面の沿道の典型タイプは「庭に接する出入口を持つ」から、出入口から見通す空間の「地面」は「庭」である。

さらに、「開放+閉鎖タイプ」であったから、出入口から見通す庭の「側面」は建物で囲まれることになり、庭は奥行き感の強調された囲まれた空間となる。

このように、すでに明らかにした間口の沿道タイプによって、南・東・西面の典型タイプの出入口から見通す空間の「地面」と「側面」は明らかにされている。

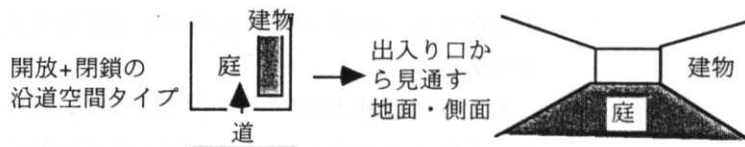


図5-24 南面・東面・西面の典型的沿道空間タイプ（開放+閉鎖）の出入口から見通す地面・側面

少なくとも片側の側面に建物があれば、ロットが連続することによって「開放+閉鎖」がつけられるが、側面の片側のみに建物があるか、両側に建物があるかを集計することによってその様子を詳しく見てみよう。結果は下図のようになり、南面は片側がほとんどを占め、東西面は両側：片側が6：4の割合であった。側面の建物が片側のみの場合に注目すると、東西面は必ず庭の北側にあり、また南面は片側の8割が庭の東側にある。

片側の場合でも側面の建物は庭に対して決まった方向にあるから、ロットが連続すれば庭の両側が閉鎖空間で挟まれることになる。

庭側面の建物	庭の西	庭の東	計
庭の片側	 13 15% (18%)	 59 69% (82%)	72 84% (100%)
庭の両側	 14 16%		14 16%
計			86 100%

図5-25 南面の庭側面の建物

庭側面の建物	東入り	西入り	計
庭の北側	 27 20%	 27 21%	54 40%
庭の北側と南側	 50 37%	 29 22%	79 60%
計	77 57%	56 43%	133 100%

図5-26 東西面の庭側面の建物

(2) 正面

現地踏査によって「正面」に見えるものは「主屋」「付属屋」「外構」のいずれかに分類できた。

間口の方位別にこれら3つの「正面」の出現頻度をみると、次のような典型的「正面」があることが分かった(下表)。

- ①南面の典型タイプの正面は「主屋(玄関)」である(典型タイプの94%)
 - ②東西面の典型タイプの正面は「外構」か「付属屋」である(同98%)
- 東面と西面では「外構」と「付属屋」の割合が異なり、東面は「外構」が多い。

「外構」は「ロット奥の屋敷囲い手前の植栽空間」と「植栽が無いロット奥の屋敷囲い」に分けられる。前者の「植栽空間」は外構の6割を占め、特に東入りの典型タイプでは7割と多くを占める(下表)。

「建物」の手前に植栽が施される場合も若干見られたが、その頻度は少なく、特に「主屋」手前に植栽がある例は希である。

さらに、植栽がある場合でも、植栽は建物を完全に隠すことはなく囲繞の主要面とはならない。したがって正面が「建物」の場合は植栽の有無に係わらず正面は「建物」として理解するのが実感に合っている。

以上のように、南面は主屋を見通し、東西面は外構または付属屋を見通す。そして外構の多くは植栽空間となっている。

表5-18 南面・東面・西面の
出入口から見通す「正面」

道路	入り	正面↓	全体		典型タイプB2 開放+閉鎖	
			数	%	数	%
東西道	南	主屋	107	89%	81	94%
		付属屋	9	8%	4	5%
		外構	4	3%	1	1%
		計	120	100%	86	100%
南北道	東	主屋	6	4%	2	2%
		付属屋	37	26%	35	26%
		外構	98	70%	96	72%
		計	141	100%	133	100%

(東・西の別)

道路	入り	正面	東		西	
			数	%	数	%
南北道	東	主屋	4	5%	2	3%
		付属屋	12	15%	11	14%
		外構	65	80%	64	83%
		計	81	100%	77	100%
南北道	西	主屋	2	3%	0	0%
		付属屋	25	42%	24	43%
		外構	33	55%	32	57%
		計	60	100%	56	100%

数字は該当LOT数、%数字は各入りに占める割合

□が典型的な「入り-地面-側面-正面」タイプ

*南入りで正面が「主屋」のうちの

95%はほぼ見通す正面位置に主屋玄関がある

表5-19 出入口から見通す正面に植栽が施される割合(南東西面全体)

正面		南面	東面	西面	計
外構	植栽空間	1	47 72%	17 52%	65 64%
	屋敷囲い	3	18 28%	16 48%	37 36%
	計	4	65 100%	33 100%	102 100%
主屋	手前に樹木が有り	6 6%	1	0	7 6%
	無し	101 94%	3	2	106 94%
	計	107 100%	4	2	113 100%
付属屋	有り	0	3 25%	3 12%	6 13%
	無し	9	9 75%	22 88%	40 87%
	計	9	12 100%	25 100%	46 100%



写真 5-5 南面の出入口から見通す空間の典型
正面に主屋を見る（東吉田）



写真 5-6 南面の出入口から見通す空間の典型
主屋と側面の付属屋（沢登）



写真 5-7 南面の出入口から見通す空間の典型
主屋と側面の付属屋（上高砂）

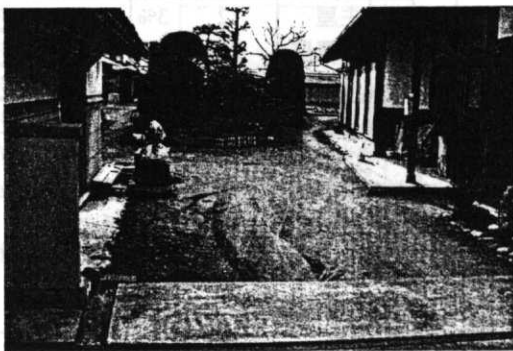


写真 5-8 東面の出入口から見通す空間の典型
側面を囲まれ正面は外構植栽（9 東吉田）



写真 5-9 西面の出入口から見通す空間の典型
側面を囲まれ正面は付属屋（上高砂）

(3) 出入口から見通す空間の典型

出入口から見通す空間のタイプは、
 「沿道タイプ (間口 (入り) - 地面-側面) - 正面」
 によって表現できる。これによって表現すると次の3つのタイプとなり、
 この3つで「出入口から開放空間を見通す間口」の86%が説明できる。%
 は「出入口から開放空間を見通す間口 (248面)」に占める割合である。

- ①南面 (南入) - 庭-開放閉鎖 (側面あり) - 主屋 (33%)
- ②東面 (東入) または西面 (西入) - 庭-開放閉鎖 (側面あり) - 外構 (39%)
- ③東面 (東入) または西面 (西入) - 庭-開放閉鎖 (側面あり) - 付属屋 (14%)

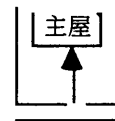
	典型的な沿道タイプ			その他	
出入口から見通す空間タイプ					
間口 (入り) -地面 -側面 -正面	南入り -庭 -開放閉鎖 -主屋	東西入り -庭 -開放閉鎖 -外構	東西入り -庭 -開放閉鎖 -付属屋	南入り -庭 -開放 -主屋	
間口数	81	96	35	22	8
出入口から開放空間を見通す間口 (248面) に占める割合	33%	39%	14%	10%	3%
	86%			53%	

図5-27 出入口から見通す空間タイプの典型 (出入口のある接道面に占める構成比)

なお、典型以外の「出入口のある間口」の中では、出現頻度が少なくはない「南面 (南入り) - 庭-開放タイプ」と「北面 (北入り) - 通路-閉鎖タイプ」についても、その「正面」を見ると、「南面-・・・」は「主屋」、「北面」は「外構」または「付属屋」であった。
 南面 (南入り) は沿道タイプによらず「正面」は「主屋」が典型であることが分かる。

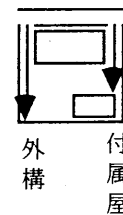
(参考)

		B3 開放			
道路入り	地面→	庭	計		
	側面→	なし			
	正面↓				
東西道	南	主屋	22	79%	28 100%
		付属屋	4	14%	
		外構	2	7%	



(参考)

		B1 閉鎖			
道路入り	地面→	通路	計		
	側面→	あり			
	正面↓				
東西道	北	主屋	2	8%	26 100%
		付属屋	11	42%	
		外構	13	50%	



5-3-4 閉鎖空間の特徴（閉鎖空間をつくる建物の表層）

(1) 閉鎖空間の位置

「開放+閉鎖」タイプの、閉鎖空間の位置、すなわち閉鎖空間をつくる「庭を挟まない建物（＝庭の側面の建物）」の位置は、庭の片側の場合と、両側の場合、さらに複数列並ぶ場合がある。その様子を見た結果が下図である。東面と西面の傾向はほぼ同じだったので東西面としてまとめた。裸数字は出入り口のある間口についての集計、() 数字は出入り口の無い間口も含めた全間口の集計結果である。対象は「南面」と「東西面」の「開放+閉鎖」タイプである。結果は次の通り。

南面（南入）の側面は片側、特に庭の東側の建物がほとんどである。

東西面（東入・西入）の側面は、側面の片側・両側、庭の北の1列の建物・2列の建物、の4つの組み合わせが概ね2~3割ずつ出現している。




庭側面の建物配置	計		
庭の片側	 13 15% (14)(15%)	 59 69% (68)(71%)	72 84% (82)(85%)
庭の両側			14 16% (14)(15%)
計			86 100% (96)(100%)

図5-28 南面の庭の側面建物

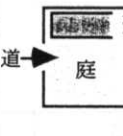
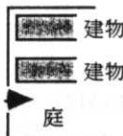

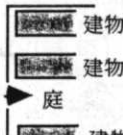
庭側面の建物配置	主屋北に付属屋が		計	
	なし	あり（北に2列）		
庭の片側	 25 18% (53)(29%)	 29 22% (29)(16%)	54 40% (82)(44%)	
庭の両側	 39 29% (58)(32%)	 40 31% (44)(24%)	79 60% (102)(56%)	
計	64 47% (111)(60%)	69 53% (73)(40%)	133 100% (184)(100%)	
東西の内訳	東面 庭の片側	10 13% (20)(21%)	17 22% (17)(18%)	27 35% (37)(39%)
	庭の両側	20 26% (26)(28%)	30 39% (31)(33%)	50 65% (57)(61%)
	計	30 39% (46)(49%)	47 61% (48)(51%)	77 100% (94)(100%)
	西面 庭の片側	15 27% (33)(37%)	12 21% (12)(13%)	27 48% (45)(50%)
	庭の両側	19 34% (32)(36%)	10 18% (13)(14%)	29 52% (45)(50%)
	計	34 61% (65)(72%)	22 39% (25)(28%)	56 100% (90)(100%)

図5-29 東西面の庭の側面建物

(2) 閉鎖空間の表層

道路境界面の検討で、6つの表層タイプ（出入り口以外の部分から見たロット内部の見え方）の出現頻度によって把握した。その表層は「庭を挟まないで見る建物壁面」の表層、つまり「閉鎖空間」の表層と、「庭を挟んで見る建物壁面」の表層、つまり開放空間の表層（出入り口から見通す建物以外）に分けることができる。ここでは「閉鎖空間」の表層を取り上げてその特徴を見てみたい。

「露出-付属屋」が半数前後と多くを占め、この特徴は沿道タイプによらない。方位別では南面は主屋が無いことに若干違いがあるが、主屋の南は必ず庭が配置されるから当然である。道路境界面の検討で示した表層全体の特徴は「壁面を道路側に露出した付属屋」が典型であったが、「閉鎖空間」の表層を取り上げるとその特徴がさらに強調されると言える。

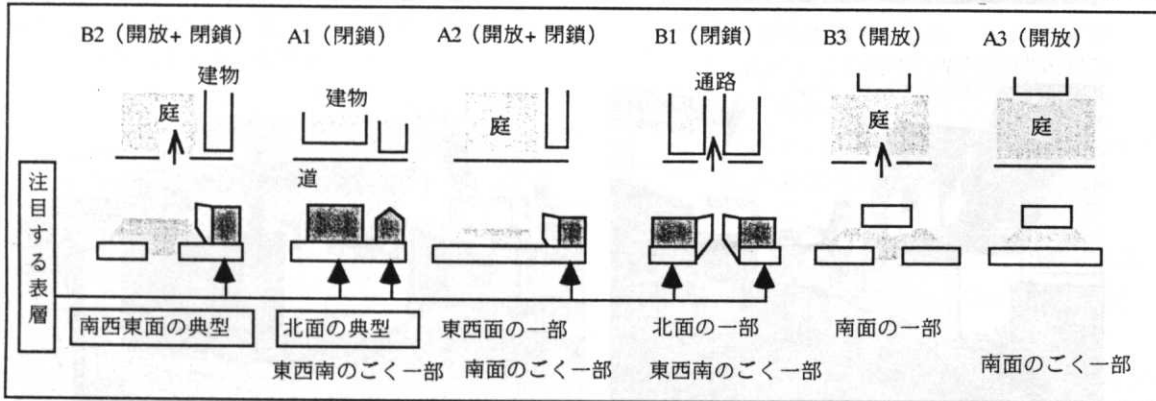


図5-30 沿道空間タイプにおける「閉鎖空間をつくる建物の表層」

表5-20 「閉鎖空間の表層（全間口）」

	閉鎖空間の表層								計			
	外構-主屋		露出-主屋		外構-付属屋		露出-付属屋				外構、樹木	
南面	0	0%	0	0%	43	39%	67	61%	0	0%	110	100%
東面	41	21%	26	13%	43	22%	89	45%	0	0%	199	100%
西面	37	23%	19	12%	37	23%	67	42%	0	0%	160	100%
北面	34	13%	19	8%	61	24%	138	55%	0	0%	252	100%
計	112	16%	64	9%	184	26%	361	50%	0	0%	721	100%

(参考) 表層の全体 (庭を挟む建物壁面を含む)												
	外構-主屋		露出-主屋		外構-付属屋		露出-付属屋		外構、樹木		計	
	南面	28	15%	0	0%	74	39%	67	35%	22	12%	191
東面	41	16%	26	10%	71	29%	89	36%	22	9%	249	100%
西面	37	20%	19	10%	54	29%	67	35%	12	6%	189	100%
北面	34	13%	19	8%	61	24%	138	55%	0	0%	252	100%
計	140	16%	64	7%	260	30%	361	41%	56	6%	881	100%

(参考) 出入り口から見通す空間の正面の建物												
	外構-主屋		露出-主屋		外構-付属屋		露出-付属屋		外構、樹木		計	
	南面			103	92%			9	8%			112
東面			4	25%			12	75%			16	100%
西面			2	7%			25	93%			27	100%
北面			0				0				0	
計			109	70%			46	30%			155	100%

表層：出入り口以外から見たロット内の見え方
閉鎖空間の表層：庭を挟まずに表層

また、沿道タイプが「A1B1の閉鎖タイプ」は、建物壁面が沿道全体を覆い、建物の表層が沿道に強く影響する。北面は主屋が接近すると考えられるが、その建物種類をみる

と多く（7割）が付属屋であった。付属屋は1階建てが多く、圧迫感が少ない囲繞をつくる。また倉など特徴ある壁面が特徴的な風景をつくっている。

表5-21 閉鎖空間の建物種類

	計	北面	東西面	南面
付属屋	103 71%	71 64%	17 85%	15 100%
主屋	43 29%	40 36%	3 15%	0 0%
計	146 100%	111 100%	20 100%	15 100%



写真5-10 南面(写真の右側)沿道の開放閉鎖空間の繰り返し(東吉田)

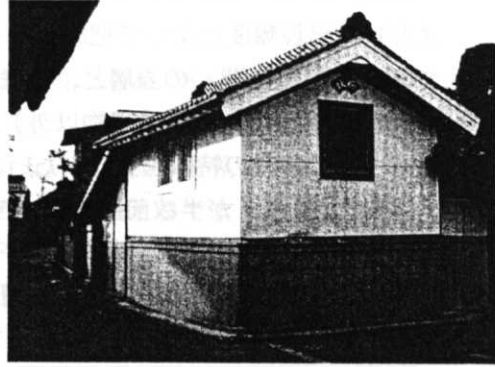


写真5-11 南面の沿道の閉鎖空間の典型
ロット南東隅の倉(東吉田)

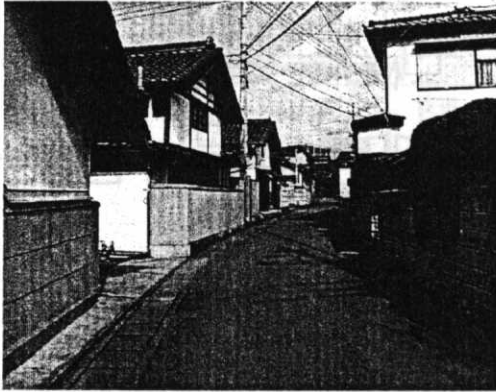


写真5-12 東面(写真の左側)沿道の開放閉鎖空間の繰り返し(東吉田)

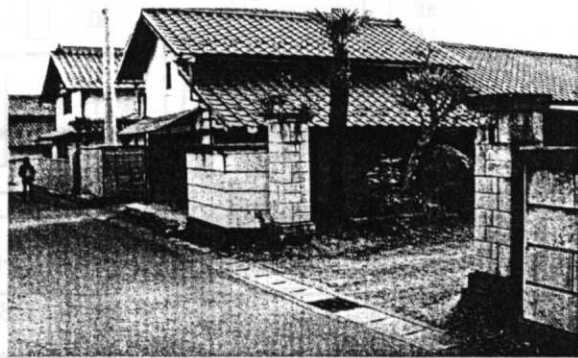


写真5-13 東面(写真の右側)沿道の開放閉鎖空間の繰り返し(写真5-11と同じ場所を北から見る)



写真5-14 東面(写真の左側)沿道の開放閉鎖空間の繰り返し(上八田)

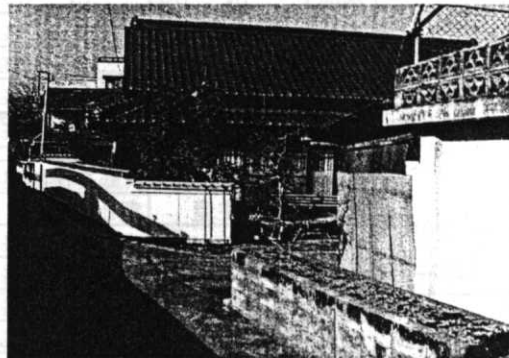


写真5-15 西面の沿道の閉鎖空間
-南から見る(上高砂)



写真5-16 北面沿道の閉鎖空間の連続
-西から見る(上高砂)



写真5-17 北面の出入り口は建物の隙間を通り庭へ至る閉鎖的な細長い通路(東吉田)

① 沿道の典型的な囲繞（沿道タイプ）は「開放+閉鎖」である

①-1 全体の特徴



庭の開放空間と建物の閉鎖空間が交互に繰り返される「開放+閉鎖」タイプであることに特徴がある。このタイプを持つ間口は全間口数の6割を占め、特に出入り口を持つ「開放+閉鎖」タイプは5割を占めて典型的である。他は「閉鎖タイプ」が3割、「開放タイプ」が1割である。

①-2 間口方位別に見た特徴

- ・ 南面は「出入り口が庭に接する間口」の「開放+閉鎖」が6割
- ・ 東面、西面も同じで7割を占める。
- ・ 北面は「出入り口の無い間口」の「閉鎖」が8割

② 開放空間の定性的特徴（典型的な風景がある）

南・東・西面の典型沿道タイプである「出入り口が庭に接する間口」の開放+閉鎖タイプに注目して、その代表的かつ重要な見え方である「出入り口から見通す空間」の特徴を把握した結果は次のようにまとめられる。



東西道路北側（南入りロット）の典型的風景

②-1 出入り口の結界：出入り口は開放されており、物理的には何の障壁もない。出入り口から見通すLOT内の地面（庭）は道路路面と物理的には一体であり、出入り口は内と外を仕切る見えない境界線である。



南北道路西側（東入りロット）の典型的風景

②-2 側面：庭の「側面」が建物で囲まれ、庭は奥行き感の強調された囲まれた空間となっていることに特徴がある。これは沿道タイプが「開放+閉鎖」であるという間口の特徴によってつくられる。また側面の建物は、庭の一定方向（東西道の場合は必ず北にあり、場合によって南にもある、南北道の北側の場合は殆どが東にある）にあるため、ロットが連続すれば、1つの庭の開放空間と、建物の閉鎖空間が交互に繰り返されることになる。

②-2 正面：方位によって異なる典型的な「正面」がある。

②-3 典型風景：（間口方位—地面—側面—正面で示すタイプ）

出入り口から見通す空間の典型は次の2タイプとなり「出入り口のある間口」の7割を占める。

- ・ 南面（南入） — 庭— 開放閉鎖（側面あり）— 主屋
- ・ 東西面（東西入）—庭— 開放閉鎖（側面あり）— 外構or付属屋
外構は植栽が一体になったものが半数以上を占める



南北道路東側（西入りロット）の典型的風景

③ 閉鎖空間の定性的特徴（閉鎖空間をつくる建物の表層）

- ・ 閉鎖空間をつくる建物は付属屋が主である（8割を占める）
- ・ 中でも屋敷囲いが無く壁面を露出させた付属屋が典型である（5割）
- ・ この特徴は、間口の方位によらず、沿道タイプによらない。
主屋が寄せられる北面（＝閉鎖タイプ）でも付属屋が7割を占める。

以上のように、沿道空間は南北道路の両側（東西間口）と東西道路の北側（南間口）に出現する「出入り口から庭を望む開放空間と建物（ほとんどが付属屋）が接近する閉鎖空間」が交互に繰り返される空間が典型であり、庭は見えない結界によって道と仕切られながら連続し、出入り口から見通す開放空間は南北道路（東西間口）と東西道路（南間口）で異なる典型景観がある。つまり「開放空間の出現」「見えない結界」「典型風景の出現」の3点が沿道空間の特徴であるとまとめられよう。このうち「見えない結界」が農家に見られることは従来から経験的に指摘されている⁷⁾。他の2点は指摘されていない実態である。

7) 藤井英二郎、細田和寿（1984）「農村空間の構造と特性に関する研究」造園雑誌47（3）pp137-153

5-4 沿道の定量的特徴

沿道の空間は、「出入口から見通す庭の開放空間」と「出入口以外で庭を挟まない建物壁面による閉鎖空間」の2つの空間によって捉えられることが、前節の定性的特徴の把握によって明らかにされた。

開放空間は南入り（東西道路の北側）と東西入り（南北道路の両側）に現れ、間口の方位によって定性的特徴が異なっていた。

閉鎖空間はロットの北面（東西道路の南面）を中心に全ての間口方位に現れ、その定性的特徴は建物の種類、すなわち「主屋」「付属屋」によって、建物手前の屋敷囲いの有無に関する定性的特徴が異なっていた。

以上のことを考慮して、次のように分析をすすめる。

まず「開放空間」に注目して、その大きさを明らかにする。

このとき間口の方位別に空間量を捉え、特に定性的特徴の検討で明らかにされた「典型的な沿道空間」を中心にして、その空間量の特徴を明らかにする。

次に、閉鎖空間に注目して、その大きさを建物種類別、方位別に明らかにする。

5-4-1 定量の方法

(1) 計測指標

1) 開放空間の大きさ

開放空間の大きさはすなわち庭の大きさである。その大きさを「庭の奥行き長（出入口から見通す見通し距離または出入口の無い間口で屋敷囲い越しに望む庭の奥行き長）＝開放奥行き長と呼ぶ」と「庭の間口長（庭の沿道長）＝開放間口長と呼ぶ」で把握する。さらに出入口から見通す開放空間は特別な見え方であるから、「出入口の幅」を把握する。

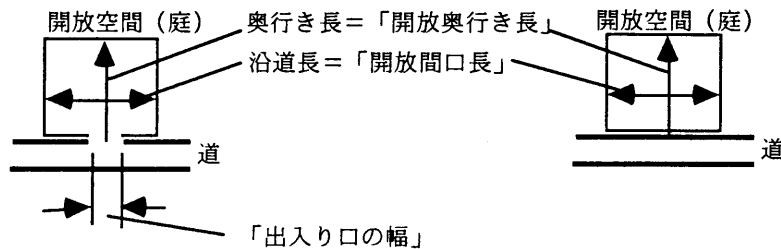


図5-31 開放空間の空間定量計測指標

2) 閉鎖空間の大きさ

閉鎖空間の大きさはすなわち庭以外の部分の道に沿った空間の大きさである。その大きさも奥行き長と間口長で把握することができる。閉鎖空間の奥行き長は「庭を挟まない建物の、道（ロット表界線）からのセットバック長」であり、閉鎖空間の間口長は「庭以外の部分の間口長」である。閉鎖空間の奥行き長を「セットバック奥行き長」、閉鎖空間の間口長を「閉鎖間口長」と呼ぶ。閉鎖空間の間口長はさらに「建物壁面長」と「ロット側界線と建物との間口に沿う間隙の長さ」に分けられる。ロット側界線と建物との間口に沿う間隙の長さを「セットバック間口長」と呼ぶ。

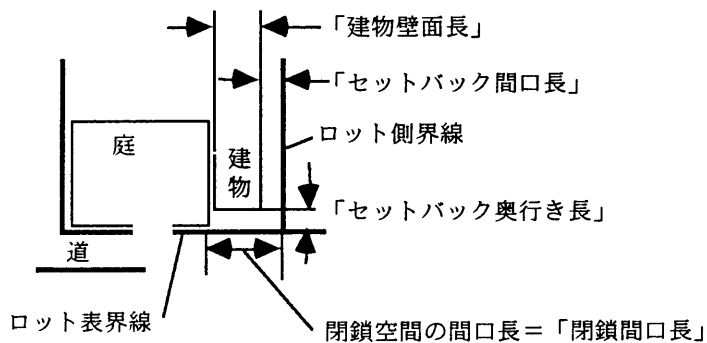


図5-32 閉鎖空間の空間定量計測指標

沿道には開放空間と閉鎖空間が繰り返されるが、そのプロポーションは、「ロット間口長」に占める「開放間口長」あるいは「閉鎖間口長」の比で把握する。そこで「ロット間口長」を計測し、これら3つの計測値の関係を把握する。

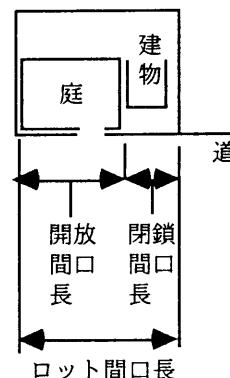


図5-33 開放空間と閉鎖空間のプロポーション

(2) 計測方法

1) 開放空間の大きさ

1- 1) 開放奥行き長

「開放奥行き長」は「出入口中央」から「道路横断方向＝道路中心線に直角方向」に測った「正面」までの長さ、または「出入口の無い間口」に接する庭の奥行き長である。

- ①「出入口から見通す開放奥行き長」は「出入口開口部の中心位置」から「道路中心線に直角方向」に測ることを原則とする。ただし、道路線形の局所的な変形によってその方向が、現地において把握した実際に見る「視線方向」と異なる場合は、現地において把握した「視線方向」に対応する「開放奥行き長」を計測する。それは「庭の奥行き長」となる。「出入口の無い間口」における開放奥行き長は、庭の平均奥行き長とする。

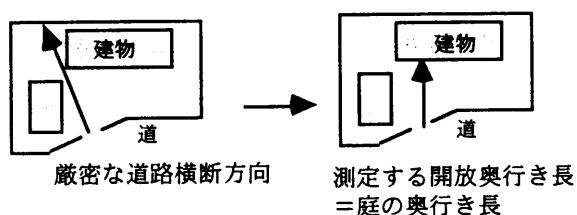


図5-34 開放奥行き長

- ②正面の建物壁面凹凸の取り扱い：玄関部分の壁面凹凸など建物壁面の若干の凹凸は無視し、主要な壁面までの距離を測る。
- ③外構に植栽が植えられている場合は「植栽を無視して屋敷囲いまでの奥行き長を測る」。

1- 2) 開放間口長

出入口およびその両側で、道路に接する庭の部分の沿道長さ

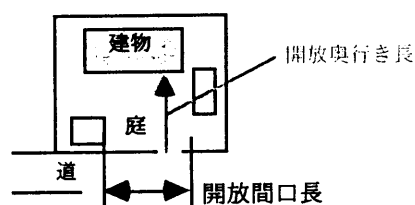


図5-35 開放間口長

1- 3) 出入口の幅

出入口とは、屋敷囲いや建物が途切れ、ロット内に物理的に進入することが可能な開口部である。ここでは表口を対象とする。

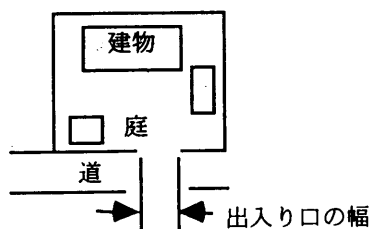


図5-36 開放間口長

2) 閉鎖空間の大きさ

2- 1) セットバック奥行き長

道路との間に庭を挟まない建物を対象として、道路表界線と建物壁面との距離を測る。庭を挟まない建物は主屋よりも南にある建物とする。

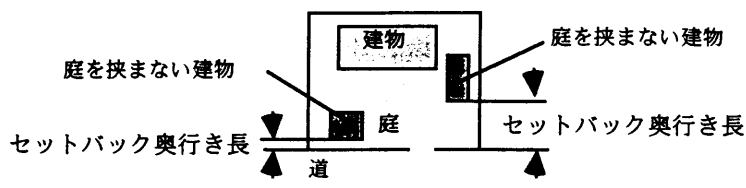


図5-37 セットバック奥行き長

2- 2) セットバック間口長

ロット側界線と、セットバック奥行き長を計測した建物との間の、間口に平行な長さを測る。

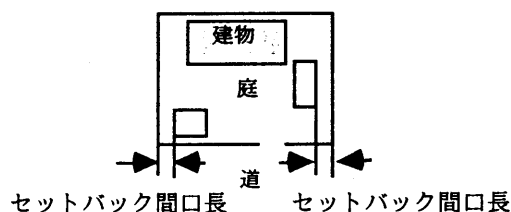


図5-38 セットバック間口長

2- 3) 閉鎖間口長

ロット間口のうち、開放間口以外の部分で連続した部分の長さを測る。

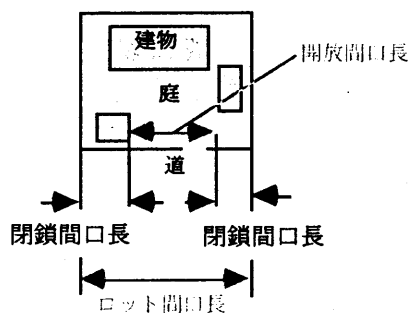


図5-39 閉鎖間口長

2- 4) 建物壁面長

建物の壁面の長さ。閉鎖間口長とセットバック間口長を明らかにすれば、建物壁面長をあらめて取り上げる必要はないだろう。セットバック間口長が小さいことによって閉鎖間口のほとんどが建物壁面であることが確認できればよい。

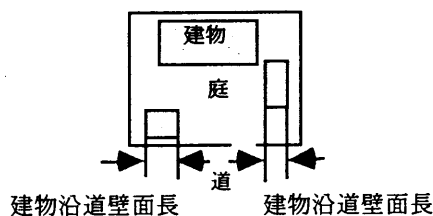


図5-40 建物壁面長

5-4-2 開放空間の大きさ

(1) 南間口（東西道路の北側）の開放空間

南面（東西道路の北側）の開放空間を持つ間口数は131ある。

典型タイプは「出入口から庭を見通し-側面に建物があり-正面が主屋」のタイプでありその間口数は81で開放空間を持つ間口数の62%を占める。

出入口の有無を無視すれば、開放空間を持つ間口は「沿道に開放空間と閉鎖空間を交互に出現させるタイプ（開放+閉鎖タイプ）」と「沿道に開放空間のみを出現させるタイプ（開放タイプ）」の2つによって構成される。「開放+閉鎖タイプ」の間口数は96で開放空間を持つ間口数の73%を占め、「開放タイプ」の間口数は35で、開放空間を持つ間口数の27%を占める。

まず、間口の62%を占める「典型タイプ」の開放空間の大きさを示し、次に「開放閉鎖タイプ（間口の73%）」の開放空間の大きさ、「開放空間を持つ全間口」の開放空間の大きさを見ていく。

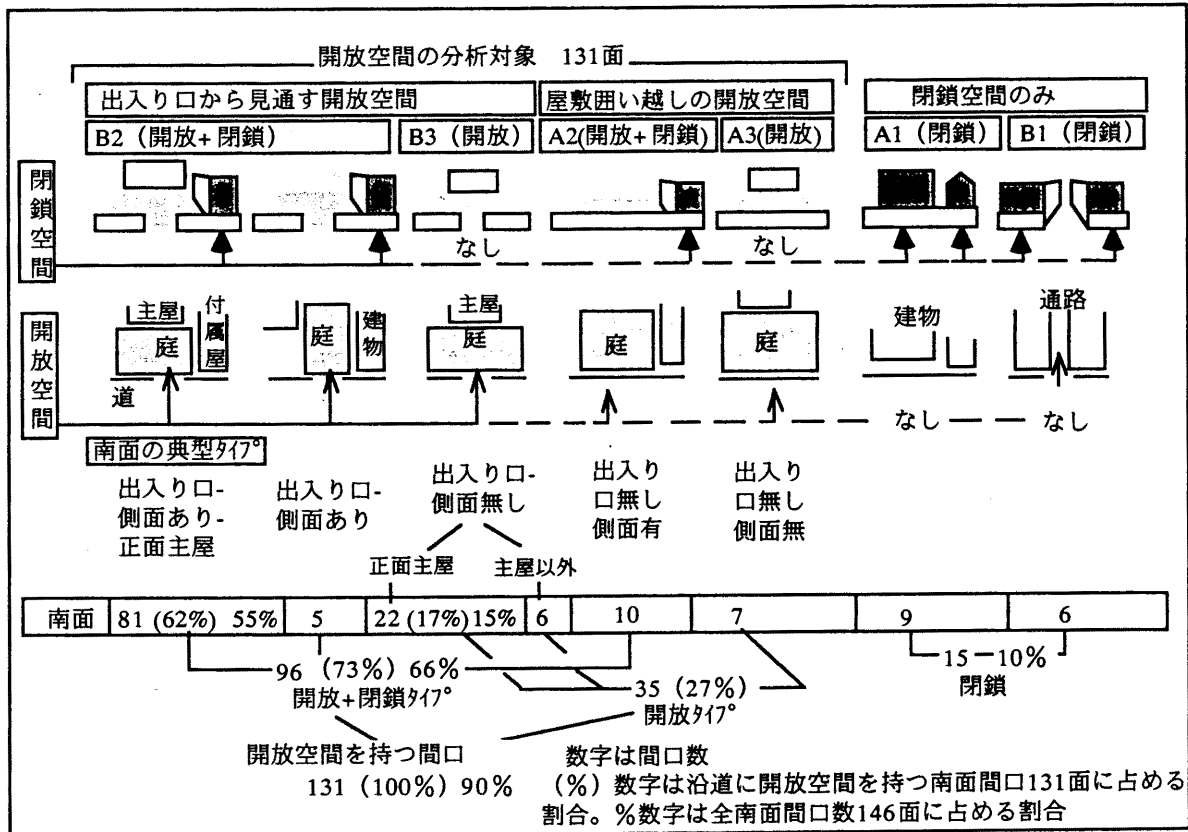


図5-41 南面（東西道路北側）の沿道空間の定性的類型

1) 典型タイプの開放空間

典型タイプである「出入口-庭-側面に建物あり-正面主屋」タイプ（面数81）の開放空間の大きさを次図表に示す。中央値でみると「開放奥行き長」は7間半（14m）、「開放間口長」は中央値10間（18m）という大きさである。「開放奥行き長」「開放間口長」ともに、取る大きさの範囲は概ね18間（30m）以下と同じであり、対数正規分布でばらついている。「開放間口長」は正規分布も否定されないが対数正規分布である確率の方が高い。

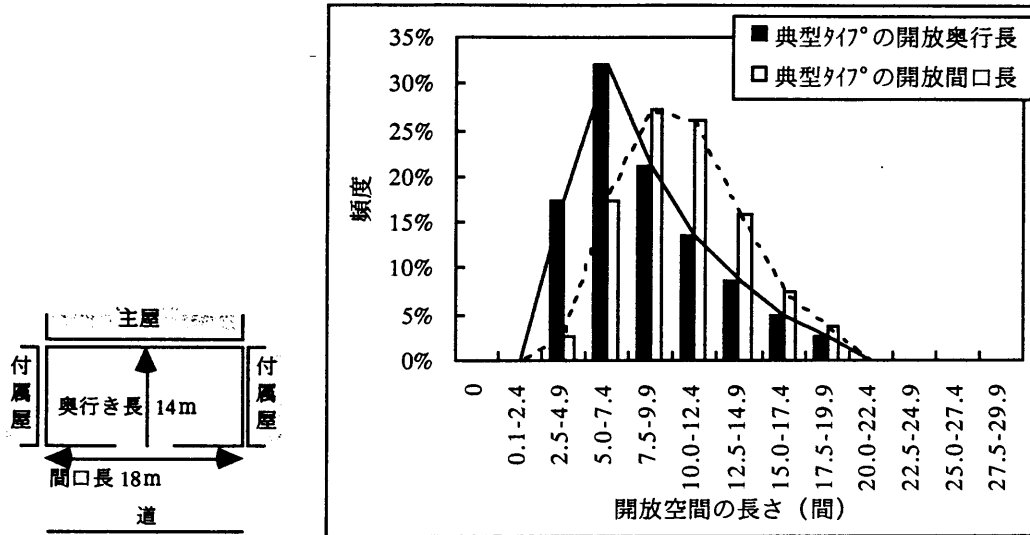


図5-4-2 南面（東西道路北側）の開放空間の大きさ

表5-2-2 南面（東西道路北側）の開放空間の大きさ

典型タイプ	開放奥行き長		開放間口長	
中央値	7.5間	14m	10.2間	18m
平均値	8.4間	15m	10.6間	19m
標準偏差	±4間	±7m	±3間	±6m
最小値	3.0間	5m	3.0間	5m
5%tile	3.6間	7m	5.3間	10m
95%tile	15.6間	28m	17.3間	31m
最大値	18.8間	34m	18.0間	33m
LOT数	81		81	
分布形				
対数正規	*****		*****	
正規	-		***	

棄却の有意水準：*****49%未満、
***79%~50%、*94%~80%、
-95%以上（-は分布形を否定）

開放間口長の分布は、対数正規分布を棄却する有意水準は1%、正規分布を棄却する有意水準は51%で、対数正規分布である確率の方が高い

2) 典型タイプの開放空間と南面の全開放空間の比較

「南面の開放空間を持つ全間口」の開放空間の大きさ、「出入口有無を無視した開放+閉鎖タイプ」の開放空間の大きさを計測し、さきの典型タイプの開放空間の大きさと比較すると、いずれの分布形も一致した。

図5-43 南面（東西道路北側）の開放奥行き長（典型タイプと全体の比較）

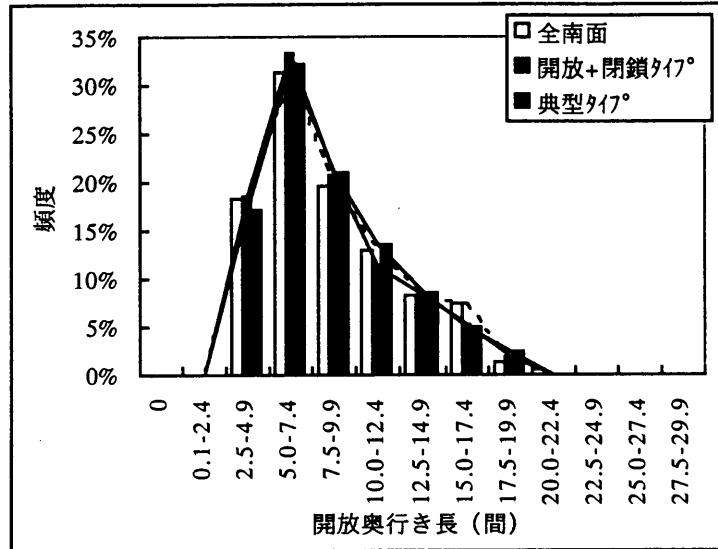


図5-44 南面（東西道路北側）の開放間口長（典型タイプと全体の比較）

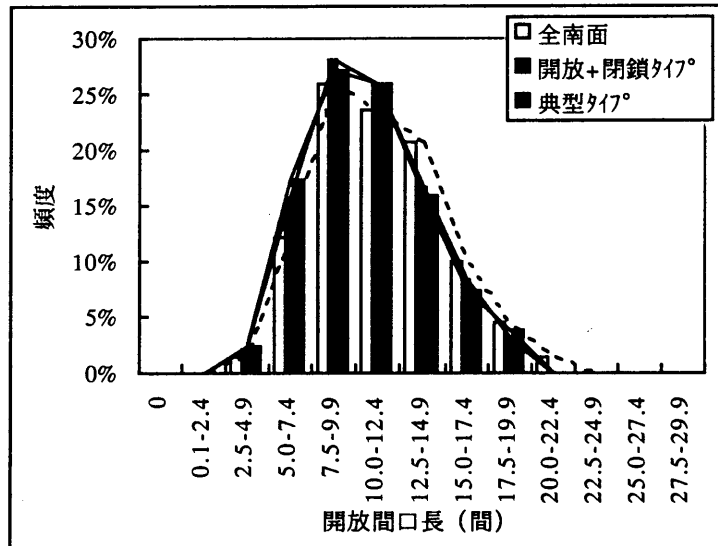


表5-23 南面（東西道路北側）の開放空間の大きさ（典型タイプと全体の比較）

	南面の開放奥行き長						南面の開放間口長					
	全南面		開放+閉鎖タイプ		典型タイプ		全南面		開放+閉鎖タイプ		典型タイプ	
中央値	7.5間	14m	7.2間	13m	7.5間	14m	10.9間	20m	10.3間	19m	10.2間	18m
平均値	8.5間	15m	8.2間	15m	8.4間	15m	11.4間	21m	10.6間	19m	10.6間	19m
標準偏差	±4間	±7m	±4間	±7m	±4間	±7m	±4間	±7m	±3間	±6m	±3間	±6m
最小値	2.6間	5m	2.6間	5m	3.0間	5m	3.0間	5m	3.0間	5m	3.0間	5m
5%tile	3.7間	7m	3.6間	7m	3.6間	7m	5.6間	10m	5.3間	10m	5.3間	10m
95%tile	17.1間	31m	15.6間	28m	15.6間	28m	17.9間	32m	17.1間	31m	17.3間	31m
最大値	18.8間	34m	18.8間	34m	18.8間	34m	20.5間	37m	18.0間	33m	18.0間	33m
LOT数	131		96		81		131		96		81	
分布形												
対数正規	*****		*****		*****		*****		*****		*****	
正規	-		-		-		***		***		***	

棄却の有意水準：*****49%未満、***79%~50%、*94%~80%、-95%以上（-は分布形を否定）
 典型タイプとは「出入口-側面あり-正面主屋」のタイプ

(2) 東西間口（南北道路の両側）の開放空間

東西面（南北道路の両側）の開放空間を持つ間口数は184ある。典型タイプは「出入口から庭を見通し- 側面に建物があり-正面が外構または付属屋」のタイプでありその間口数は131で開放空間を持つ間口数の64%を占める。

出入口の有無を無視すれば、開放空間を持つ間口は全て（100%）「沿道に開放空間と閉鎖空間を交互に出現させるタイプ（開放+閉鎖タイプ）」である。

まず、間口の64%を占める「典型タイプ」の開放空間の大きさを示し、次に典型タイプと「開放空間を持つ全接道（すべて開放+閉鎖タイプである）」の開放空間を比較する。

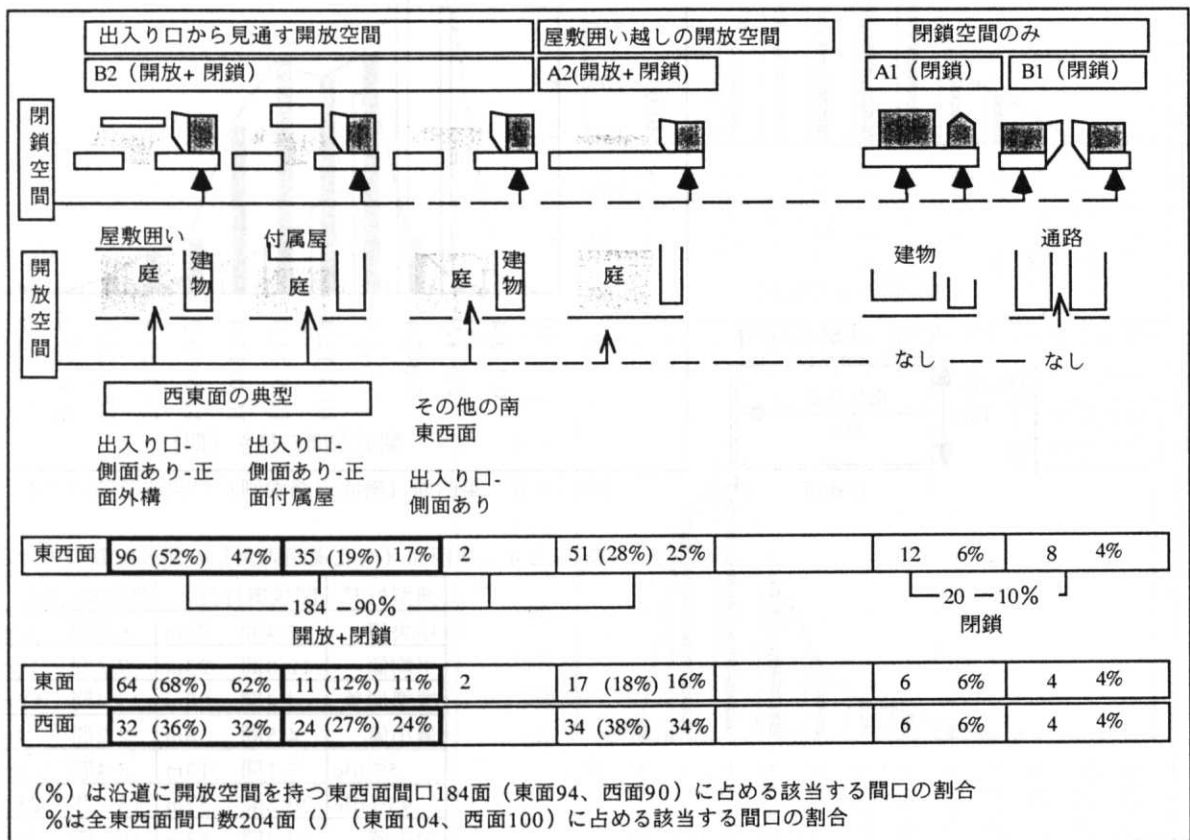


図5-45 東西面（南北道路両側）の沿道空間

1) 典型タイプの開放空間

典型タイプである「出入口-庭-側面に建物あり-正面が外構または付属屋」タイプ（面数131）の開放空間の大きさを次図表に示す。中央値で見ると「開放奥行き長」は12間半（23m）、「開放間口長」は中央値6間半（12m）という大きさである。「開放奥行き長」は概ね7間～20間（10～40m）の範囲を取る対数正規分布でばらつき、「開放間口長」は概ね3間半～14間（5～25m）の範囲を取る対数正規分布でばらついている。

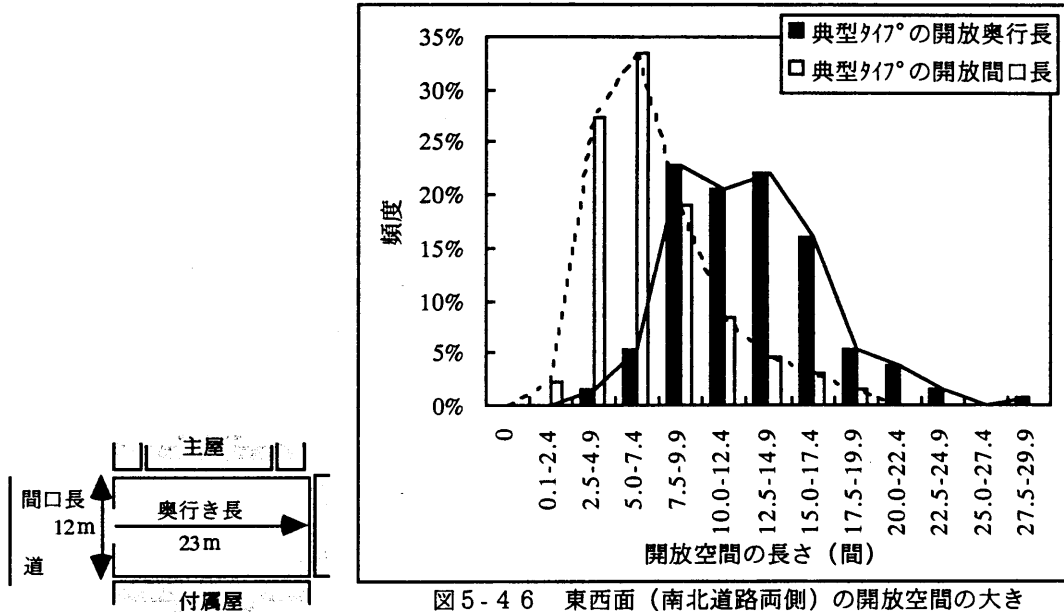


表5-24 東西面（南北道路両側）の開放空間の大きさ

典型タイプ	開放奥行き長		開放間口長	
中央値	12.4間	23m	6.5間	12m
平均値	12.8間	23m	7.2間	13m
標準偏差	±4間	±8m	±4間	±6m
最小値	4.5間	8m	2.2間	4m
5%tile	7.1間	13m	3.4間	6m
95%tile	20.2間	37m	13.8間	25m
最大値	29.4間	53m	19.6間	36m
LOT数	131		131	
分布形				
対数正規	*****		*****	
正規	***		-	

棄却の有意水準：*****49%未満、
 ***79%～50%、*94%～80%、
 - 95%以上（-は分布形を否定）

2) 典型タイプの開放空間と東西面の全開放空間の比較

この典型タイプ[°]の開放空間の大きさおよび分布は、「東西面の開放空間を持つ全間口」の開放空間の大きさと同じである。

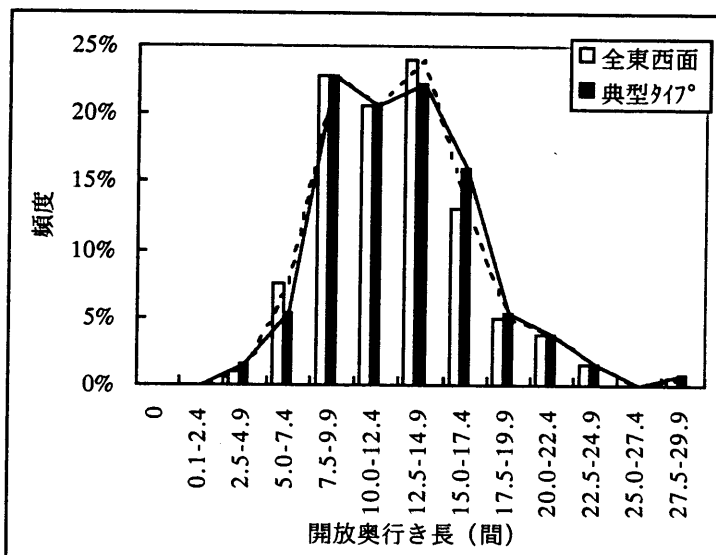


図5-47 東西面（南北道路両側）の開放奥行き長（典型タイプ[°]と全体の比較）

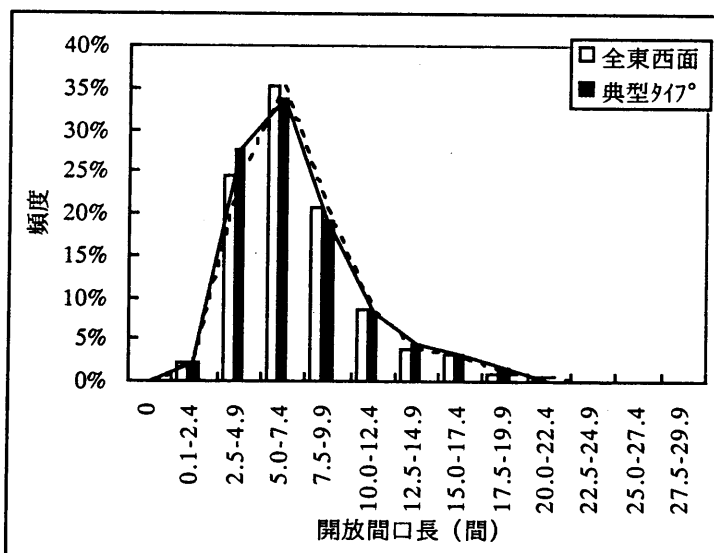


図5-48 東西面（南北道路両側）の開放間口長（典型タイプ[°]と全体の比較）

表5-25 東西面（南北道路両側）の開放空間の大きさ（典型タイプ[°]と全体の比較）

	東西面の開放奥行き長		東西面の開放間口長	
	全東西面	典型タイプ [°]	全東西面	典型タイプ [°]
中央値	12.1間 22m	12.4間 23m	6.5間 12m	6.5間 12m
平均値	12.6間 23m	12.8間 23m	7.3間 13m	7.2間 13m
標準偏差	±4間 ±8m	±4間 ±8m	±4間 ±6m	±4間 ±6m
最小値	4.5間 8m	4.5間 8m	2.2間 4m	2.2間 4m
5%tile	6.9間 13m	7.1間 13m	3.4間 6m	3.4間 6m
95%tile	20.2間 37m	20.2間 37m	13.8間 25m	13.8間 25m
最大値	29.4間 53m	29.4間 53m	21.8間 40m	19.6間 36m
LOT数	184	131	184	131
分布形				
対数正規		*****	*****	*****
正規	***	**	-	-

棄却の有意水準：*****49%未満、***79%～50%、*94%～80%、-95%以上（-は分布形を否定）
 典型タイプ[°]とは「出入口-側面あり-正面外構または付属屋」のタイプ

(3) 開放空間の定量的特徴

「開放奥行き長」「開放間口長」の大きさと分布は、「南面」「東西面」で異なっているが、「南面」の「開放奥行き長」と「東西面」の「開放間口長」が類似し、「南面」の「開放間口長」と「東西面」の「開放奥行き長」が類似していることに気がつく。「南面」の「開放奥行き長」と「東西面」の「開放間口長」は「庭の南北長」であり、「南面」の「開放間口長」と「東西面」の「開放奥行き長」は「庭の東西長」である。つまり間口の方位や沿道 γ 17°に因らず「庭の南北長」と「庭の東西長」は特徴的な大きさと分布を持ち、その大きさが沿道の開放空間の大きさを規定していると理解することができる。

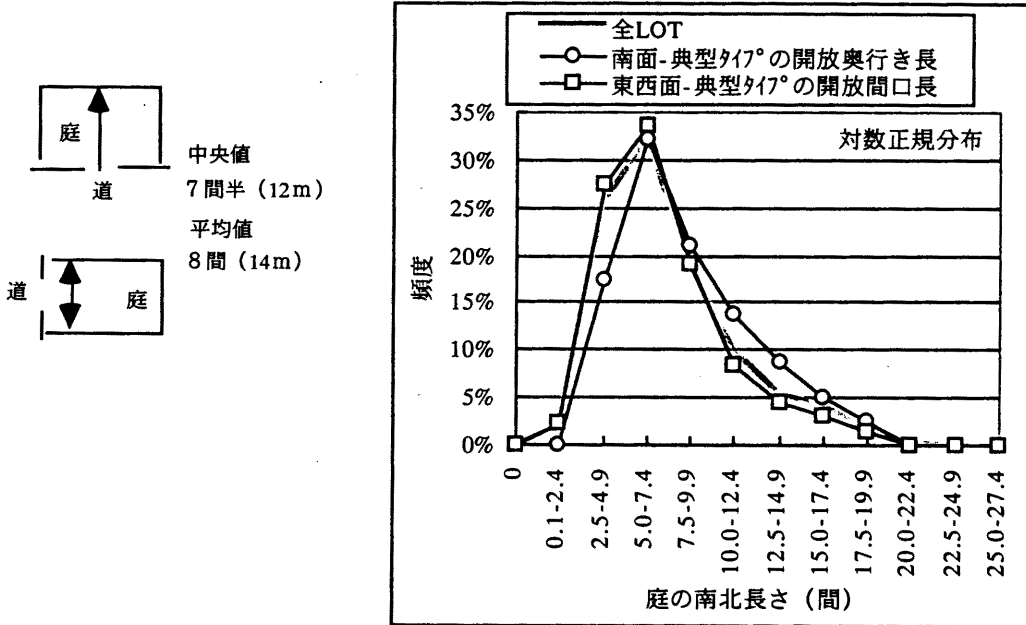


図5-49 庭の南北長

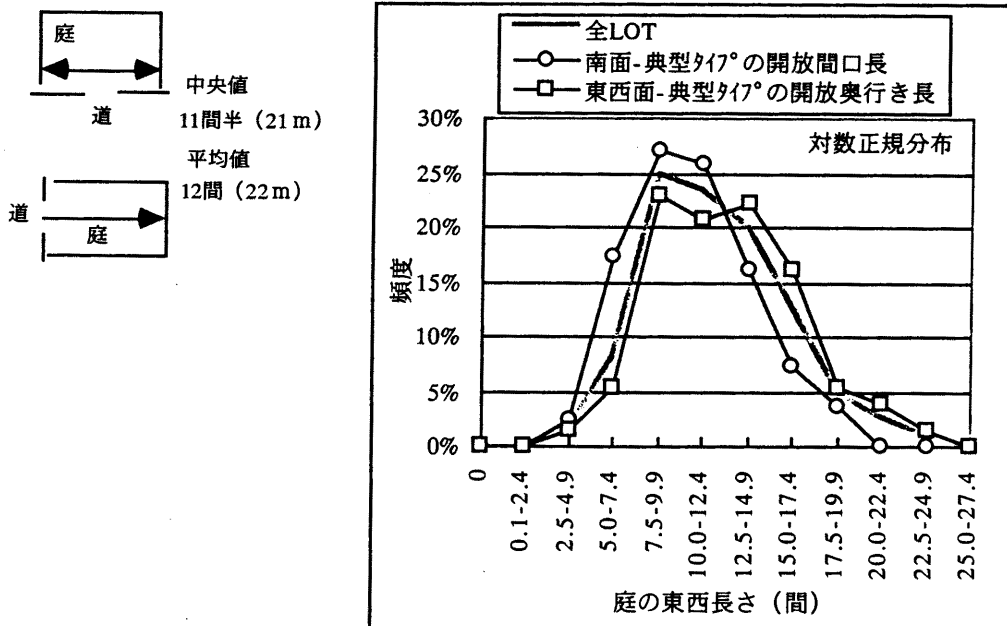


図5-50 庭の東西長

代表値の表は次頁

そこで、開放空間の定量的特徴は以下のようにまとめることができる。

「庭の南北長」、すなわち「南面の開放奥行き長」と「東西面の開放間口長」は、平均値7間半(14m)、中央値約7間(12m)で、5%タイル~95%タイルでみると概ね4間(6m)から16間(30m)の範囲を取り、対数正規分布でばらつく。

「庭の東西長」、すなわち「南面の開放間口長」と「東西面の開放奥行き長」は、平均値12間(22m)、中央値11間半(20m)で、5%タイル~95%タイルでみると、概ね6間(12m)から20間(35m)の範囲を取り、対数正規分布でばらつく(正規分布も否定されない)。

表5-26 庭の南北長と東西長

	庭の南北長				全LOTの庭の南北長				庭の東西長				全LOTの庭の東西長			
	南面	奥行き長	東西面	間口長	南面	間口長	東西面	奥行き長	南面	間口長	東西面	奥行き長	南面	間口長	東西面	奥行き長
中央値	7.5間	14m	6.5間	12m	6.8間	12m	10.2間	18m	12.4間	23m	11.5間	21m				
平均値	8.4間	15m	7.2間	13m	7.6間	14m	10.6間	19m	12.8間	23m	12.2間	22m				
標準偏差	3.8間	±7m	3.5間	±6m	3.8間	±7m	3.5間	±6m	4.3間	±8m	4.1間	±8m				
最小値	3.0間	5m	2.2間	4m	2.2間	4m	3.0間	5m	4.5間	8m	3.0間	6m				
5%tile	3.6間	7m	3.4間	6m	3.4間	6m	5.3間	10m	7.1間	13m	6.3間	12m				
95%tile	15.6間	28m	13.8間	25m	15.6間	28m	17.3間	31m	20.2間	37m	19.2間	35m				
最大値	18.8間	34m	19.6間	36m	21.8間	40m	18.0間	33m	29.4間	53m	30.0間	55m				
LOT数	81		131		289		81		131		289					
分布形	対数正規															
正規	*****		*****		*****		*****		*****		*****		*****		*****	
	-		-		-		***		***		***		***		***	

南面・東西面はいずれも典型74°、奥行き長=開放奥行き長、間口長=開放間口長

棄却の有意水準：*****49%未満、***79%~50%、*94%~80%、-95%以上(-は分布形を否定)

さらに、沿道に展開する開放間口長と開放奥行き長をまとめて把握すれば、開放空間の大きさは、中央値9間半(17m)、平均値10間(18m)、5%タイル値2間(4m)、95%タイル値18間(33m)であると理解することができる。これは東西道南北道を問わず集落の道を歩いたときに沿道に出現する「開放空間スケール」の出現確率に相当する。

表5-27 開放空間の大きさ

	開放間口長または開放奥行き長		庭東西長または庭南北長	
	間	m	間	m
中央値	9.4間	17.2m	9.4間	17.1m
平均値	10.0間	18.1m	9.9間	18.0m
標準偏差	±5間	±8m	±5間	±8m
最小値	2.2間	4m	2.2間	4m
5%tile	3.8間	7m	3.7間	7m
95%tile	18.0間	33m	18.0間	33m
最大値	30.0間	55m	30.0間	55m
LOT数	522		578	

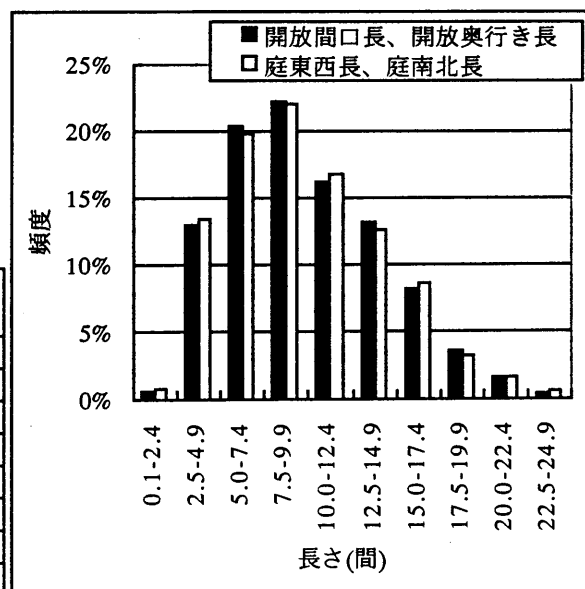


図5-51 開放空間の大きさ

(4) 出入り口の幅

出入り口には門扉が無く、ロット内への進入を物理的に妨げるものはない。そこは私有地であるロット内と公有地である道を仕分ける場であり、心理的な境界線があるが、物理的には路面と同質の空間が道路横断方向へ続いている。

出入り口の幅は平均値で2間半(4m)であった。これは道路幅員とほぼ同じである。道路幅員の分布と比較するとよく一致することが分かる。出入り口の幅は道幅と同様に通行の利用形態に合わせて決められるから当然であると言え、この幅は道幅と同じく農機具や車両の出入りに必要な幅であると考えられる。

表 5 - 2 8 出入り口の幅

出入り口幅	
平均値	2.3間 4m
中央値	2.2間 4m
最頻値	2間 3m
標準偏差	0.8間 2m
最小値	0.8間 1m
5%tile	1.3間 2m
95%tile	3.9間 7m
最大値	6.8間 12m
sampl	289
分布形	-

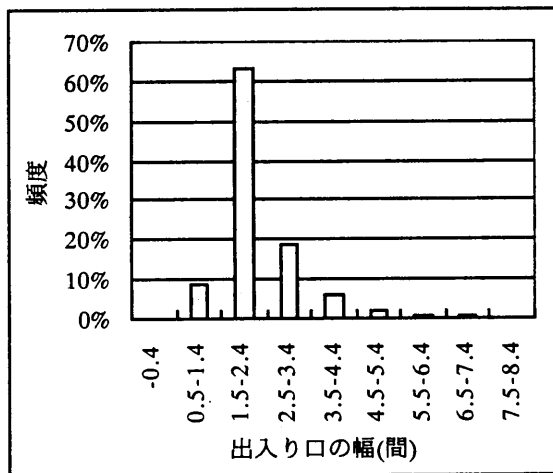


図 5 - 5 2 出入り口の幅

表 5 - 2 9 道路幅員との比較

道路幅員	
平均値	2.0間 4m
中央値	1.9間 3m
最頻値	2間 4m
標準偏差	0.6間 1m
最小値	0.9間 2m
5%tile	1.1間 2m
95%tile	3.0間 5m
最大値	4.5間 8m
sampl	289
分布形	正規

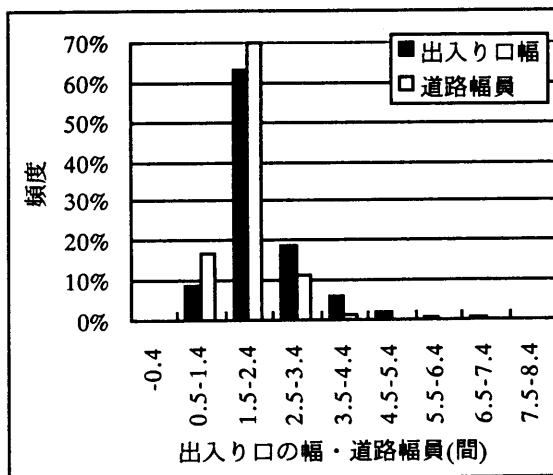


図 5 - 5 3 出入り口の幅 (道路幅員と比較)

5-4-3 閉鎖空間の大きさ

間口数は全部で462あるが、そのうち閉鎖空間を持つ面は427（92％）である。この427面にある閉鎖空間を対象としてその空間量を定量する。

閉鎖空間は、ロット間口のうち開放空間部分を除いた部分の空間であり、道路に接近した建物壁面によってつくられる。

まず、閉鎖空間が、道路に接近した建物によってつくられていることを確認するため、建物が道路に接近し（つまりセットバック奥行き長が小さく）、閉鎖空間のほとんどが建物壁面で占められている（つまりセットバック間口長も小さい）ことを定量的に示す。

その後、閉鎖空間の長さ（閉鎖間口長）を定量的に把握する。

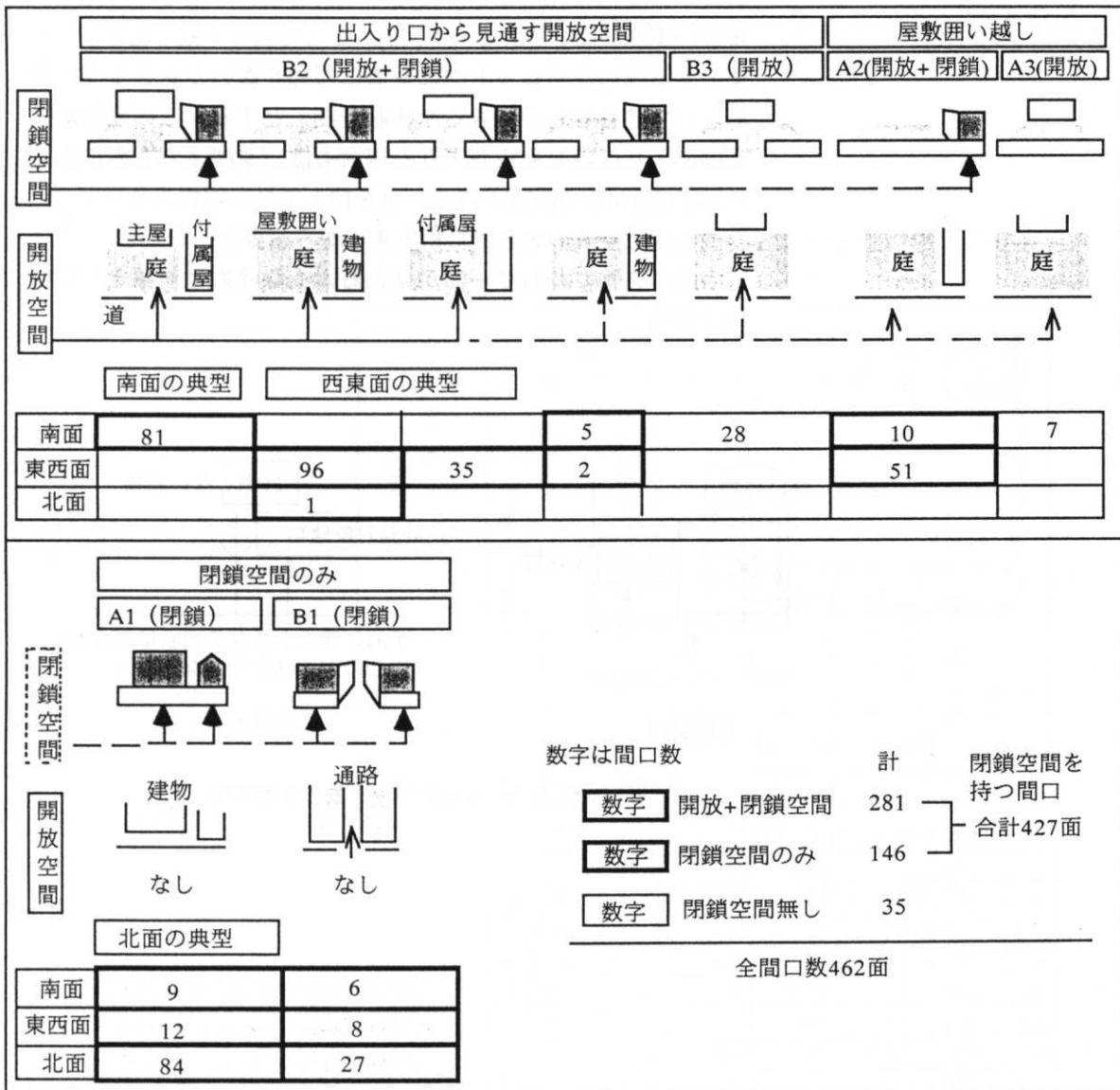


図5-54 閉鎖空間の定量対象

(1) セットバック奥行き長

計測対象は「閉鎖空間の表層」を形成している建物壁面である。その定義をは次の通りであった。

計測対象は「表層」を形成する建物（すなわち出入口以外からロット内を見たときに見える建物壁面）のうち、「庭を挟まない建物壁面」である（下図a）。ここで言う「庭」とは、「対象とする間口からロット内に垂直に視線を置いたとき1つの方形として囲むことができる非建蔽空間」とする。この定義に従えば南入りの場合も東西入りの場合もは、主屋よりも南にある付属屋壁面は計測対象となる。庭を挟んで見る建物のセットバック長は開放空間の大きさに相当するから対象としない。

手前の建物に隠れて一部が見えるような建物は対象としない（下図b）。

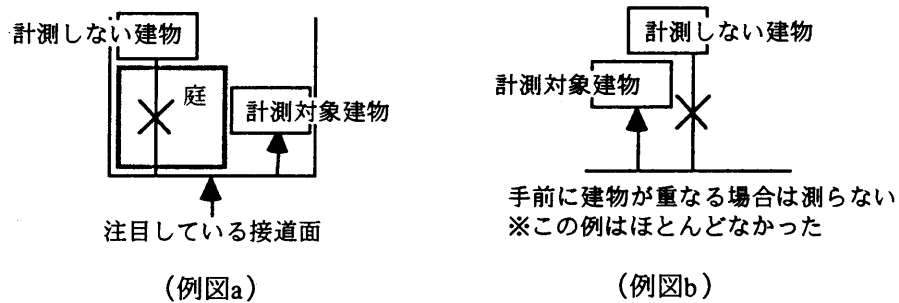


図5-55 セットバック長の計測対象

1) 全体

結果は下図表のようになった。平均値・中央値は約1間（1.5m）である。

表5-30 セットバック奥行き長（全体）

	合計	
平均値	0.9間	1.7m
中央値	0.7間	1.3m
標準偏差	±1間	±1m
最小値	0間	0m
5%tile	0間	0m
95%tile	3間	5m
最大値	5間	10m
計測数	721	
分布形	対数正規	

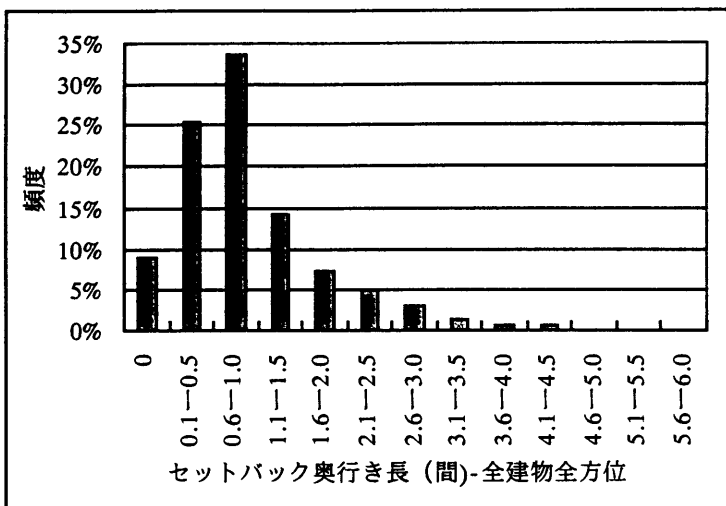


図5-56 セットバック奥行き長（全体）

2) 建物種類別

中央値および平均値で見ると、主屋のセットバック長は付属屋のセットバックより若干長い、その差は僅かである。

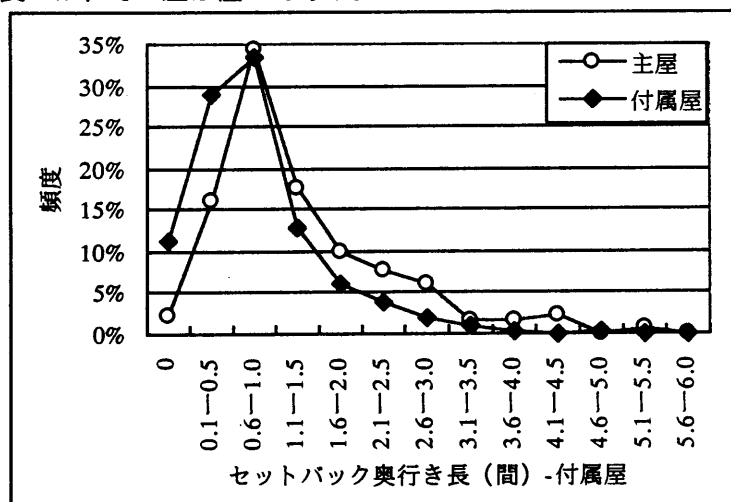


図5-57 セットバック奥行き長（主屋-付属屋別）

表5-31 セットバック奥行き長（主屋-付属屋別）

	主屋		付属屋		合計	
平均値	1.3間	2.3m	0.8間	1.5m	0.9間	1.7m
中央値	1.0間	1.8m	0.6間	1.1m	0.7間	1.3m
標準偏差	±1間	±2m	±1間	±1m	±1間	±1m
最小値	0間	0m	0間	0m	0間	0m
5%tile	0間	0m	0間	0m	0間	0m
95%tile	3間	6m	2間	4m	3間	5m
最大値	5間	10m	5間	8m	5間	10m
計測数	176		545		721	
分布形	対数正規		対数正規		対数正規	

3) 建物種類+間口方位別

主屋、付属屋ともに、方位によって違いはない。

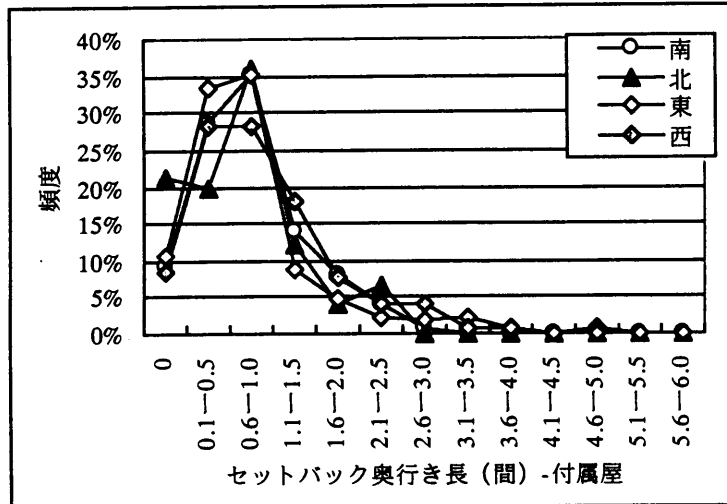


図5-58 セットバック奥行き長 (付属屋の方位別)

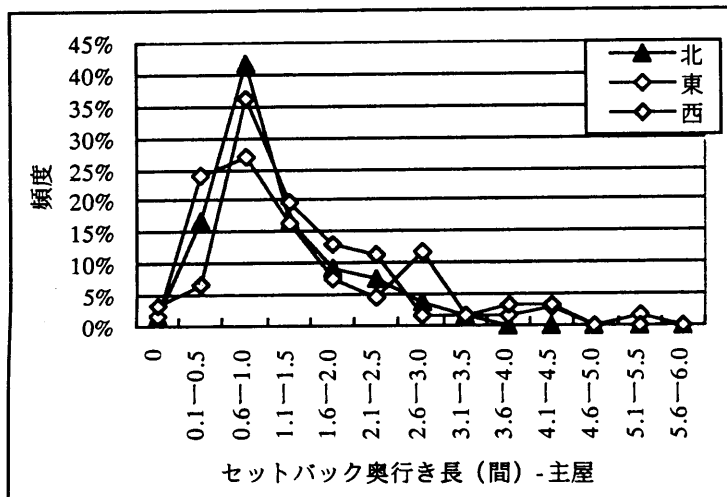


図5-59 セットバック奥行き長 (主屋の方位別)

表5-32 セットバック奥行き長 (付属屋の方位別)

	南		北		東		西		計	
平均値	0.8間	1.4m	0.7間	1.3m	0.8間	1.4m	0.9間	1.6m	0.8間	1.5m
中央値	0.7間	1m	0.7間	1m	0.6間	1m	0.7間	1m	0.6間	1m
標準偏差	±1間	±1m	±1間	±1m	±1間	±1m	±1間	±1m	±1間	±1m
最小値	0間	0m	0間	0m	0間	0m	0間	0m	0間	0m
5%tile	0間	0m	0間	0m	0間	0m	0間	0m	0間	0m
95%tile	2間	3m	3間	5m	2間	4m	2間	5m	2間	4m
最大値	3間	5m	2間	4m	5間	8m	4間	7m	5間	8m
計測数	110		199		132		104		545	
分布形			対数正規		対数正規		対数正規		対数正規	

表5-33 セットバック奥行き長 (主屋の方位別)

	南	北		東		西		計	
平均値	-	1.0間	1.9m	1.4間	2.5m	1.4間	2.5m	1.3間	2.3m
中央値	-	0.9間	2m	1.0間	2m	1.1間	2m	1.0間	2m
標準偏差	-	±1間	±1m	±1間	±2m	±1間	±2m	±1間	±2m
最小値	-	0間	0m	0間	0m	0間	0m	0間	0m
5%tile	-	0間	0m	0間	0m	0間	0m	0間	0m
95%tile	-	3間	5m	4間	7m	4間	6m	3間	6m
最大値	-	3間	6m	5間	10m	4間	8m	5間	10m
計測数	0	53		67		56		176	
分布形		対数正規		対数正規		対数正規		対数正規	

4) 屋敷囲いの有無別

主屋、付属屋ともに「壁面を露出させた建物」のセットバック長は若干短く、特に、壁面を露出させた付属屋の95%が1間（2m）以下である。

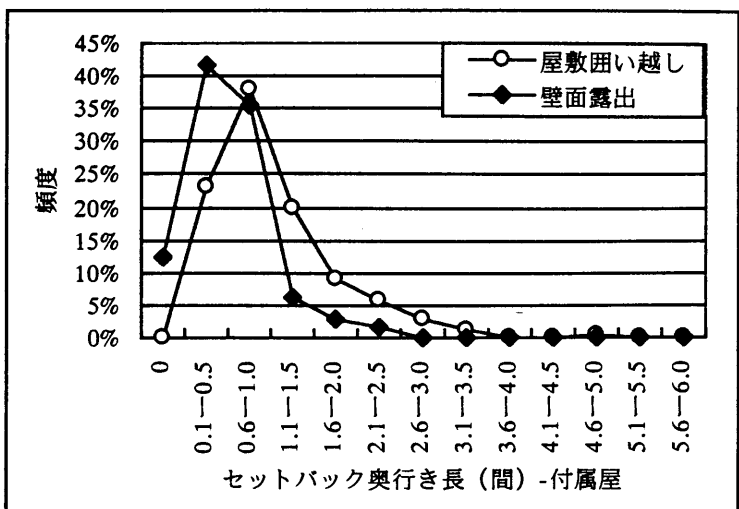


図5-60 セットバック奥行き長（付属屋の屋敷囲い有無別）

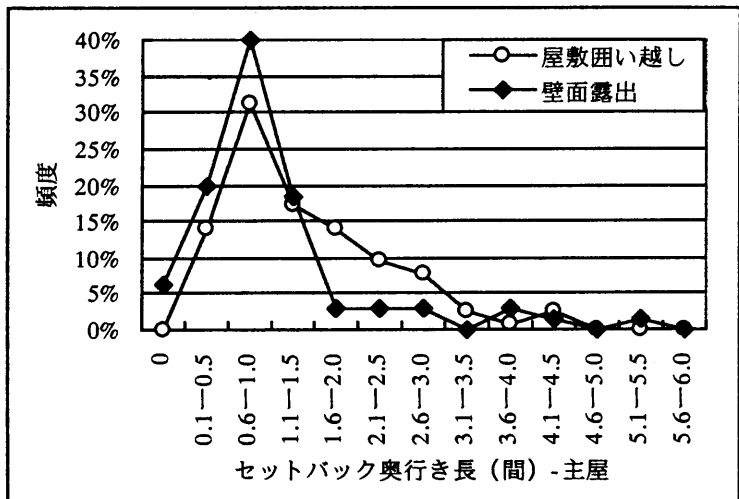


図5-61 セットバック奥行き長（主屋の屋敷囲い有無別）

表5-34 セットバック奥行き長（付属屋の屋敷囲い有無別）

付属屋	屋敷囲い越し		壁面露出	
平均値	1.1間	1.9m	0.5間	1.0m
中央値	0.9間	2m	0.5間	1m
標準偏差	±1間	±1m	±0間	±1m
最小値	0間	0m	0間	0m
5%tile	0間	0m	0間	0m
95%tile	2間	4m	1間	2m
最大値	5間	8m	2間	4m
計測数	184		361	
分布形	対数正規		対数正規	

表5-35 セットバック奥行き長（主屋の屋敷囲い有無別）

主屋	屋敷囲い越し		壁面露出	
平均値	1.4間	2.5m	1.1間	1.9m
中央値	1.1間	2m	0.8間	1m
標準偏差	±1間	±2m	±1間	±2m
最小値	0間	0m	0間	0m
5%tile	0間	1m	0間	0m
95%tile	3間	6m	4間	7m
最大値	4間	8m	5間	10m
計測数	112		64	
分布形	対数正規		対数正規	

(2) セットバック間口長

全体では平均値・中央値ともに約1間(2m)でセットバック奥行き長と同じ分布を示す。

建物種類別では主屋のセットバック長が若干長いとその差は僅かである。

主屋、付属屋ともに、方位あるいは庭の南北の位置によって違いはない。

表5-36 セットバック間口長(全体)

	合計	
平均値	0.9間	1.7m
中央値	0.8間	1.5m
標準偏差	±1間	±1m
最小値	0間	0m
5%tile	0間	0m
95%tile	2間	4m
最大値	5間	10m
計測数	619	
分布形	対数正規	

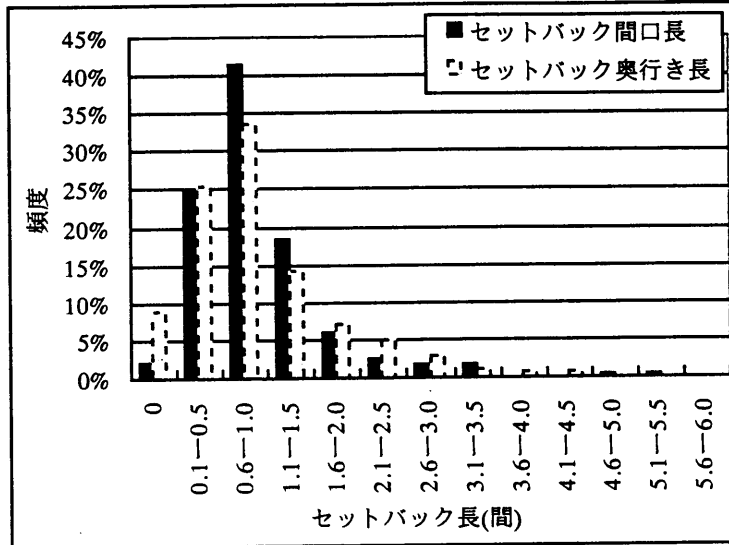


図5-62 セットバック間口長(全体)セットバック奥行き長と比較

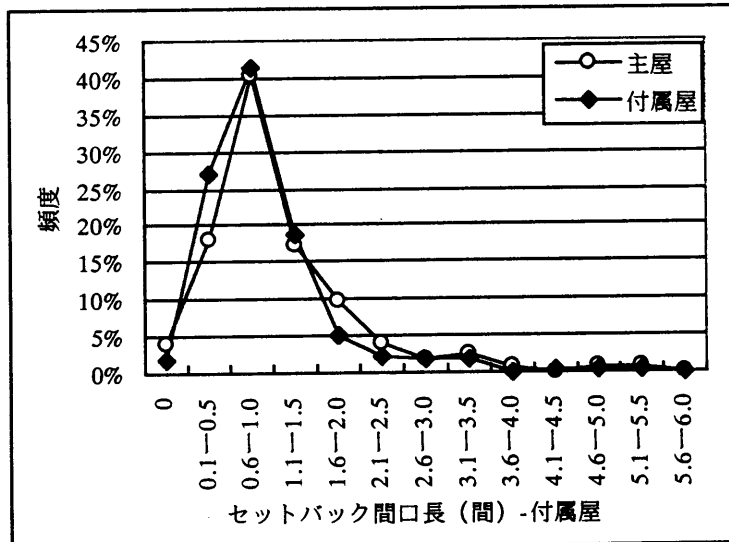


図5-63 セットバック間口長(主屋-付属屋別)

表5-37 セットバック間口長(主屋-付属屋別)

	主屋		付属屋		合計	
平均値	1.1間	2.0m	0.9間	1.6m	0.9間	1.7m
中央値	0.9間	2m	0.8間	1m	0.8間	1m
標準偏差	±1間	±2m	±1間	±1m	±1間	±1m
最小値	0間	0m	0間	0m	0間	0m
5%tile	0間	0m	0間	0m	0間	0m
95%tile	3間	5m	2間	4m	2間	4m
最大値	5間	10m	5間	10m	5間	10m
計測数	63		556		619	
分布形	対数正規		対数正規		対数正規	

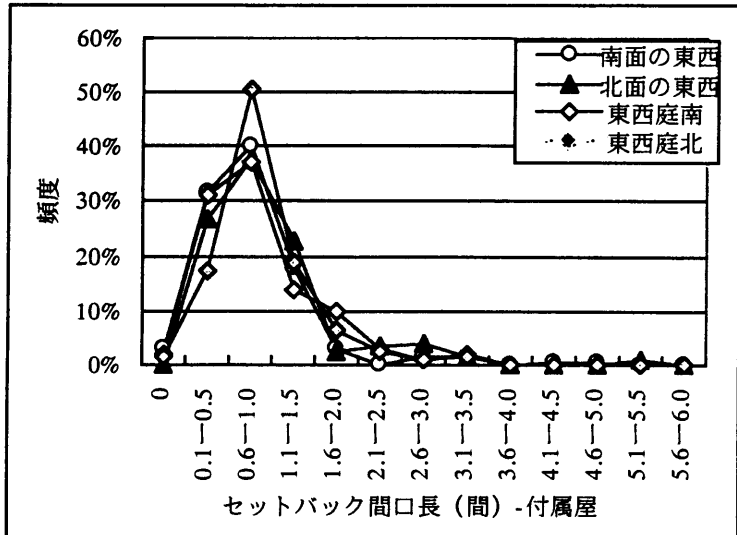
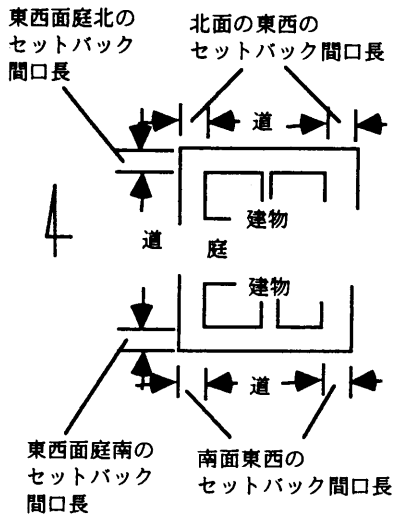


図5-64 セットバック間口長 (付属屋の方別)

表5-38 セットバック間口長 (付属屋の方別)

	南面の東西		北面の東西		東西の庭南		東西の庭北		計	
平均値	0.8間	1.5m	1.0間	1.8m	0.9間	1.6m	0.9間	1.7m	0.9間	1.6m
中央値	0.7間	1m	0.8間	1m	0.7間	1m	0.8間	1m	0.8間	1m
標準偏差	±1間	±1m	±1間	±1m	±1間	±1m	±1間	±1m	±1間	±1m
最小値	0間	0m	0間	0m	0間	0m	0間	0m	0間	0m
5%tile	0間	0m	0間	0m	0間	0m	0間	0m	0間	0m
95%tile	2間	3m	3間	5m	2間	4m	2間	3m	2間	4m
最大値	5間	8m	5間	10m	3間	6m	3間	6m	5間	10m
計測数	110		190		102		154		556	
分布形	対数正規		対数正規		対数正規		対数正規		対数正規	

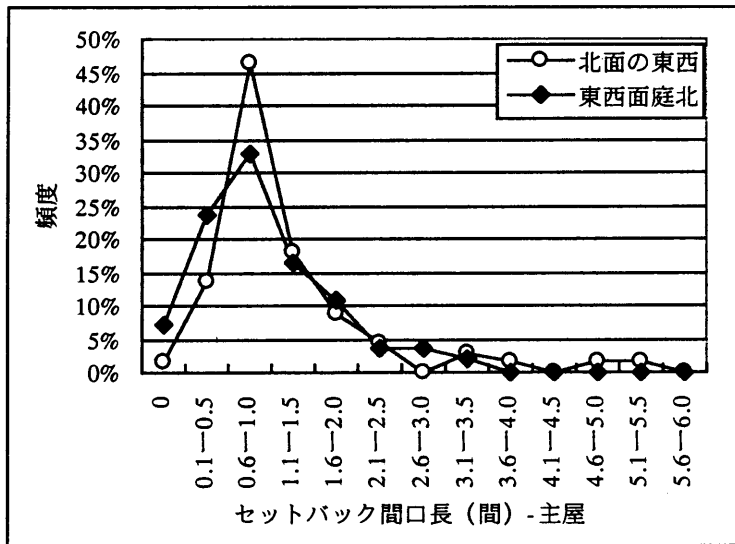


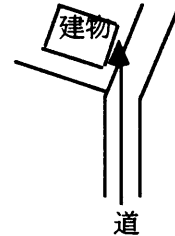
図5-65 セットバック間口長 (主屋の方別)

表5-39 セットバック間口長 (主屋の方別)

	南	北面の東西	東西面の庭北		計	
平均値	-	1.2間 2.1m	0.9間	1.7m	1.1間	2.0m
中央値	-	0.9間 2m	0.8間	1m	0.9間	2m
標準偏差	-	±1間 ±2m	±1間	±1m	±1間	±2m
最小値	-	0間 0m	0間	0m	0間	0m
5%tile	-	0間 1m	0間	0m	0間	0m
95%tile	-	3間 6m	2間	3m	3間	5m
最大値	-	5間 10m	3間	6m	5間	10m
計測数	0	33	30		63	
分布形		対数正規	対数正規		対数正規	

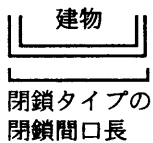
以上のように、セットバック奥行き長、セットバック間口長ともに概ね1間(2m)程度と小さく、閉鎖空間は道路に接近した建物壁面によってつくられていることを定量的に確認できた。

ところで、道路の透視空間形態の分析で、「アイストップには建物が多く特に壁面を露出した付属屋が典型である」ことを見たが、この成因はセットバック奥行き長・セットバック間口長の小さい付属屋、つまりロットの四隅に配置される付属屋、という建物配置の特徴、とLOT端で折れ曲がるという道路線形の特徴、によって説明が付く。



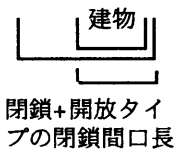
(3) 閉鎖間口長

閉鎖間口長はほぼ建物壁面と一致する閉鎖空間の、間口方向の長さである。定量の前に、定量の対象を明確にするために、その閉鎖空間の間口部分がどのように出現しているか、定性的な検討の結果を再度示す。



閉鎖空間には「ロット間口が閉鎖空間のみで開放空間の無く」タイプにおける閉鎖空間と、「開放空間と閉鎖空間が交互に出現する」タイプにおける閉鎖空間とがある。前者の間口数は146、後者の間口数は281である。

前者の閉鎖空間は間口全体であり、閉鎖間口長はロット間口長に等しい。



一方、後者の「開放+閉鎖」タイプにおける「閉鎖空間」の出現パターンは次のように分けられる。

南面の場合

- ・庭の片側に閉鎖空間が出現するパターン (82面)
- ・庭の両側に閉鎖空間が出現するパターン (14面)

があり、閉鎖空間の数は合計110ある (=82+14×2)。

南面の閉鎖空間は1つの付属屋によってつくられていることが建物配置図によって分かる。

	建物		庭		道		計
庭の片側		13 (14)	15% (15%)		59 (68)	69% (71%)	72 (82) 84% (85%)
庭の両側							14 (14) 16% (15%)
	計						86 (96) 100% (100%)

数字は出入り口のある間口数とその構成比

() 数字は出入り口の無い間口を含む全間口数とその構成比

— 閉鎖空間

図5-66 南面の「開放+閉鎖」タイプにおける「閉鎖空間」の出現パターン

東西面の場合は、

- ・庭の南側に閉鎖空間が出現する場合
- ・庭の北側に閉鎖空間が出現する場合

があり、前者の閉鎖空間は1つの付属屋によってつくられているが、後者は

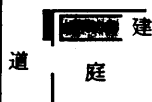
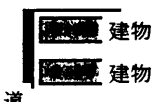
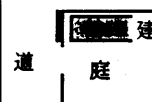

- ・1つの建物によってつくられる場合
- ・2つの建物によってつくられる場合

があった。

庭の北には必ず閉鎖空間が出現し、それは基本的に主屋、あるいは主屋と付属屋によってつくられている。場合によっては主屋と道路の間に付属屋が配置され道路から主屋が見えない場合もある。

庭の南は必ず閉鎖空間が出現するとは限らない。

したがって、これらの場合の組み合わせによって出現するパターンは次図のように4つに分けられる。

庭側面の建物配置	主屋北に付属屋が		計
	なし	あり (北に2列)	
庭の片側	 25 18% (53) (29%)	 29 22% (29) (16%)	54 40% (82) (44%)
庭の両側	 39 29% (58) (32%)	 40 31% (44) (24%)	79 60% (102) (56%)
計	64 47% (111) (60%)	69 53% (73) (40%)	133 100% (184)(100%)

数字は出入り口のある間口数とその構成比

() 数字は出入り口の無い間口を含む全間口数とその構成比

— 閉鎖空間

図5-67 東西面の「開放+閉鎖」タイプにおける「閉鎖空間」の出現パターン

以上のように、「閉鎖+開放」タイプについて、「南面の庭東西(110)」「東西面の庭南(102)」「東西面の庭北(184)」の計396の閉鎖空間の間口長が計測対象となる。また「閉鎖」タイプは冒頭で示したとおり146のロット間口長を計測する。

結果は、間口の出入り口有無による違いはなかったため、出入り口有無を分けない全間口の結果を示す。

1) 「閉鎖+開放タイプ」の閉鎖間口長

まず「閉鎖+開放タイプ」の閉鎖間口長を見てみよう。

庭の南側の閉鎖空間である「南面の庭の東西」「東西面の庭の南」の閉鎖間口長は中央値3間半(6m)・平均値4間(7m)で、概ね1間半(3m)から3間(14m)の範囲の対数正規分布でばらつく。

一方、庭の北側の閉鎖空間である「東西面の庭の北」の閉鎖空間は、中央値8間(15m)・平均値9間(16m)で、概ね5間(9m)から16間(30m)の範囲の対数正規分布でばらつく。庭の北側の閉鎖空間は1列の建物でつくられる場合と2列の建物でつくられる場合があるが、1列の場合は中央値6間半(12m)・平均値8間(15m)、2列の場合は中央値10間(19m)・平均値10間半(19m)である。

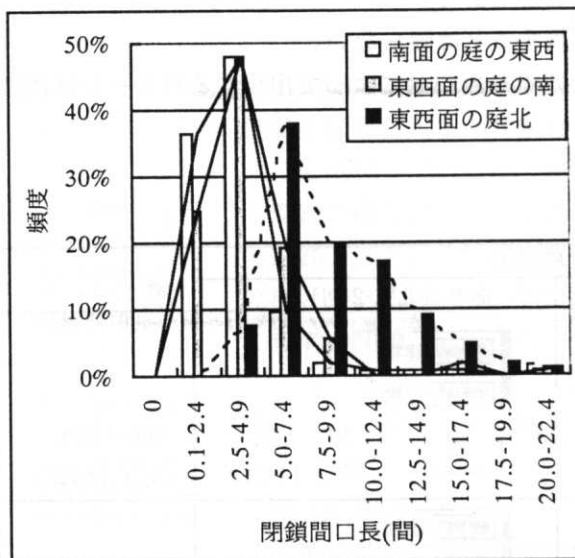


図5-68 閉鎖間口長(出現位置別)

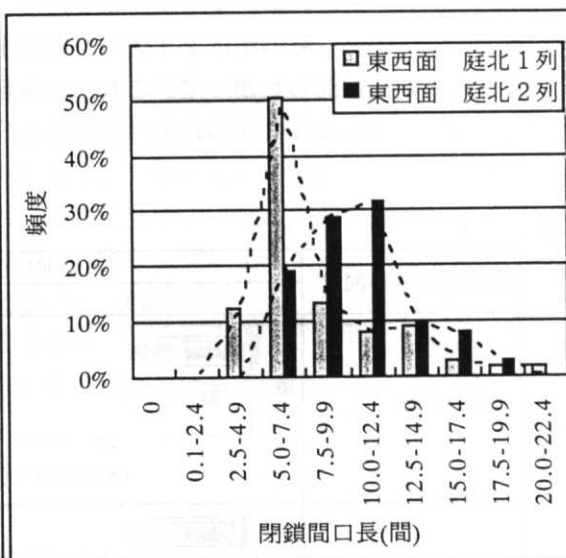
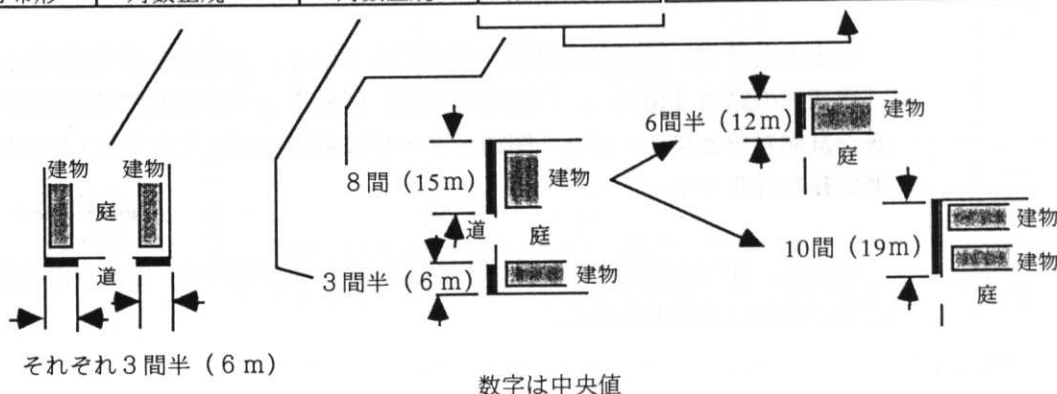


図5-69 東西面庭北側の閉鎖間口長(建物列数別)

表5-40 閉鎖間口長

	南面(庭の東西)		東西面(庭南)		東西面(庭北)		建物1列		建物2列	
中央値	3.4間	6m	3.3間	6m	8.0間	15m	6.5間	12m	10.2間	19m
平均値	3.8間	7m	4.0間	7m	9.1間	16m	8.1間	15m	10.6間	19m
標準偏差	2.8間	5m	2.6間	5m	3.8間	7m	3.8間	7m	3.3間	6m
最小値	1.3間	2m	1.0間	2m	3.5間	6m	3.5間	6m	5.8間	11m
5%tile	1.5間	3m	1.2間	2m	4.7間	9m	4.6間	8m	6.3間	11m
95%tile	7.8間	14m	7.8間	14m	16.1間	29m	15.2間	28m	16.6間	30m
最大値	21.5間	39m	16.4間	30m	20.7間	38m	20.7間	38m	19.8間	36m
開放間口数	110		102		184		111		73	
分布形	対数正規		対数正規		対数正規		対数正規		対数正規	



2) 「閉鎖タイプ」の閉鎖間口長

閉鎖間口長はロット間口長に等しい。このタイプのロット間口長は特別なものではなく、全ロットのロット間口長あるいはロット辺長に等しい。東西長と南北長の差は僅かである。したがって中央値・平均値共に約16間半(30m)で概ね10間(17m)から27間(48m)の範囲でばらつくロット間口長あるいはロット辺長全体の大きさを理解しておけばよい。この分布形を含め以下で取り上げた「閉鎖間口長やロット辺長」のすべての分布形は対数正規分布である。

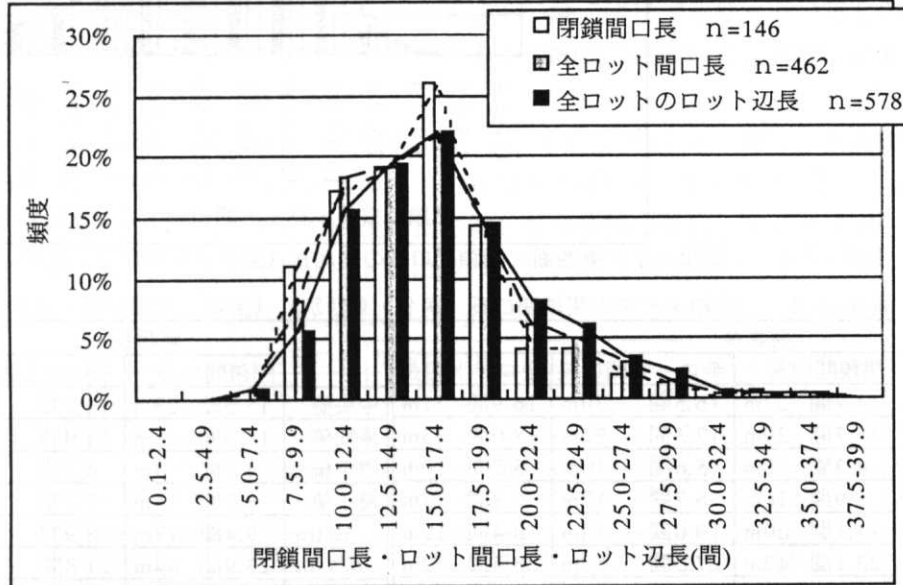


図5-70 閉鎖タイプの閉鎖間口長と全ロットのロット間口長

表5-41 閉鎖タイプの閉鎖間口長 (全ロット間口長・全ロット辺長との比較)

いずれの分布も対数正規分布
(棄却の有意水準を80%未
満にしても棄却されない)

	閉鎖間口長		全ロット間口長		全ロット辺長	
中央値	15.3間	28m	15.4間	28m	16.1間	29m
平均値	15.6間	28m	16.0間	29m	16.6間	30m
標準偏差	4.7間	8m	5.1間	9m	5.2間	9m
最小値	8.2間	15m	6.7間	12m	6.7間	12m
5%tile	9.4間	17m	9.4間	17m	9.5間	17m
95%tile	23.9間	44m	25.7間	47m	26.5間	48m
最大値	34.4間	62m	37.3間	68m	37.3間	68m
LOT数	146		462		578	
分布形	対数正規		対数正規		対数正規	

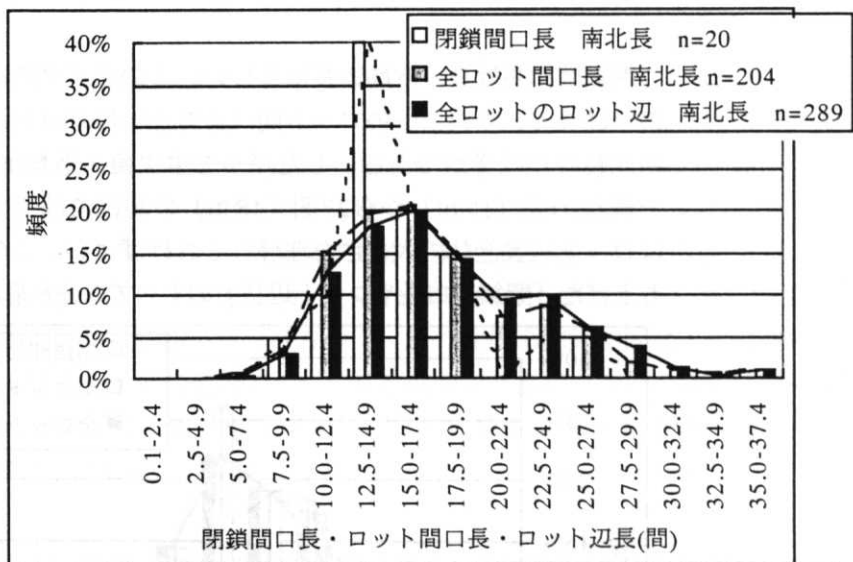


図 5 - 7 1 閉鎖タイプ東西面 閉鎖間口長の南北長 (全ロット間口長・全ロット辺長との比較)

表 5 - 4 2 閉鎖タイプの閉鎖間口長 (南北・東西別) (全ロット間口長・全ロット辺長との比較)

南北長			東西長		
閉鎖間口長	全ロット間口長	全ロット辺長	閉鎖間口長	全ロット間口長	全ロット辺長
14.7間 27m	16.5間 30m	16.9間 31m	中央値 15.5間 28m	14.8間 27m	15.0間 27m
15.7間 29m	17.3間 32m	18.0間 33m	平均値 15.6間 28m	14.9間 27m	15.2間 28m
4.2間 8m	5.6間 10m	5.7間 10m	標準偏差 4.7間 9m	4.3間 8m	4.3間 8m
8.9間 16m	6.7間 12m	6.7間 12m	最小値 8.2間 15m	7.2間 13m	7.2間 13m
11.1間 20m	10.0間 18m	10.4間 19m	5%tile 9.4間 17m	8.9間 16m	9.3間 17m
23.1間 42m	27.3間 50m	28.4間 52m	95%tile 23.9間 44m	21.8間 40m	22.0間 40m
27.3間 50m	37.3間 68m	37.3間 68m	最大値 34.4間 62m	34.4間 62m	34.4間 62m
20	204	289	LOT数	126	258
				258	289

いずれの分布も対数正規分布 (棄却の有意水準を80%未満にしても棄却されない)

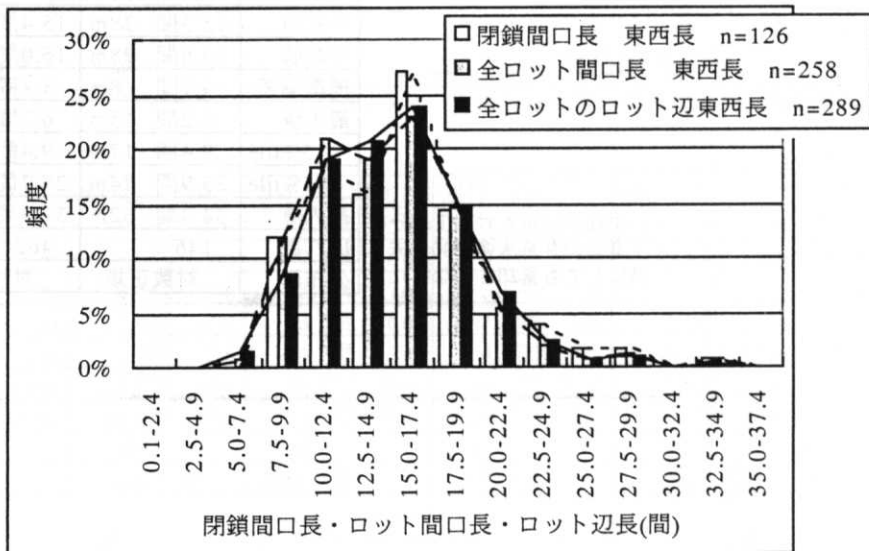


図 5 - 7 2 閉鎖タイプ南北面 閉鎖間口長の東西長 (全ロット間口長・全ロット辺長との比較)

(4) 「開放+閉鎖タイプ」の開閉空間のプロポーショナル

「開放+閉鎖タイプ」の開放空間と閉鎖空間はどのような比率（プロポーショナル）で繰り返されるのだろうか。沿道に展開する開放と閉鎖のプロポーショナルを、「ロット間口長と開放間口長の比」で表わすと次のようになる。今までと同様に出入り口有無を分けない「開放+閉鎖タイプ」の全間口の結果で示す。

閉鎖間口長は、庭を挟んで2つ閉鎖間口に分かれる場合はその2つの閉鎖間口長を合わせた総閉鎖間口長で示す。ロットが連続して並んでいる場合を考えれば、例えば東西面の庭南の閉鎖空間はその南に隣接するロットの庭北の空間と一体になって1つの閉鎖空間をつくるから、総閉鎖間口長は実際に体験する閉鎖間口の平均的な長さを示す。

中央値で説明すれば、南間口では、ロット間口長27mに対して開放間口長19mで、プロポーショナルは0.74すなわちロット間口長の3/4あるいは2/3。

東西間口では、ロット間口長30mに対して開放間口長12mで、プロポーショナルは0.41、すなわち概ねロット間口長の1/2ないし1/3となった。

表5-43 開放空間のプロポーショナル

	総閉鎖間口長	開放間口長	LOT間口長	開放Proportion	
南面	中央値	3.7間 7m	10.6間 19m	14.9間 27m	0.74
	平均値	4.2間 8m	10.6間 19m	14.7間 27m	0.72
	5%tile	1.3間 2m	5.3間 10m	8.9間 16m	0.45
	95%tile	7.9間 14m	16.9間 31m	20.7間 38m	0.89
	LOT数	96			
東西面	中央値	9.2間 17m	6.5間 12m	16.3間 30m	0.41
	平均値	9.9間 18m	7.2間 13m	17.1間 31m	0.42
	5%tile	5.1間 9m	3.2間 6m	10.0間 18m	0.20
	95%tile	17.4間 32m	13.8間 25m	26.1間 47m	0.63
	LOT数	184			
合計	中央値	6.6間 12m	7.9間 14m	15.5間 28m	0.49
	平均値	7.6間 14m	8.6間 16m	16.1間 29m	0.52
	5%tile	1.9間 3m	3.4間 6m	9.2間 17m	0.21
	95%tile	15.8間 29m	15.7間 29m	25.4間 46m	0.86
	LOT数	280			

プロポーショナルは、ロット間口長と開放空間長のばらつきによって、ばらつく。南面の開放空間のプロポーショナルは、概ね0.5（5%タイル値）から0.9（95%タイル値）を取り、東西面のプロポーショナルは、概ね0.2（5%タイル値）から0.6（95%タイル値）を取る。いずれもプロポーショナルの中央値に対して±0.2の範囲でばらつくと理解すればよい。

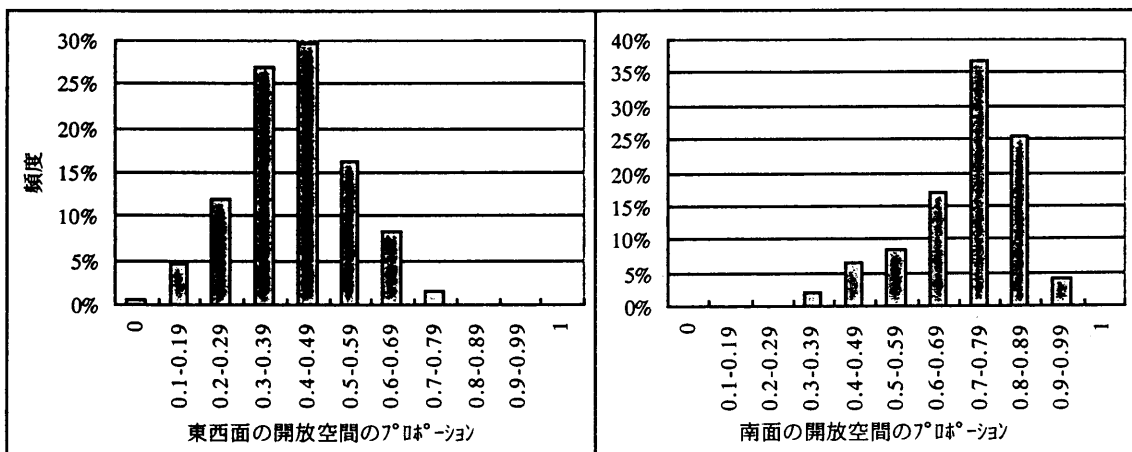


図5-73 開放空間のプロポーショナル

典型的なプロポーシオンは、開放空間と閉鎖空間のスケールを大まかに把握して、丸めた値を使って次のように理解すれば十分であろう。

すなわち、南面はロット間口30mに対して開放間口長20mで、プロポーシオンは開放間口長：閉鎖間口長= 2 : 1、

東西面はロット間口30mに対して開放間口長10mで、プロポーシオンは開放間口長：閉鎖間口長= 1 : 2、と理解できる。

なお、南東西面を合計したプロポーシオンの中央値平均値は0.5で、集落全体を歩いたときに出現する平均的な開放間口長：閉鎖間口長は1 : 1である。

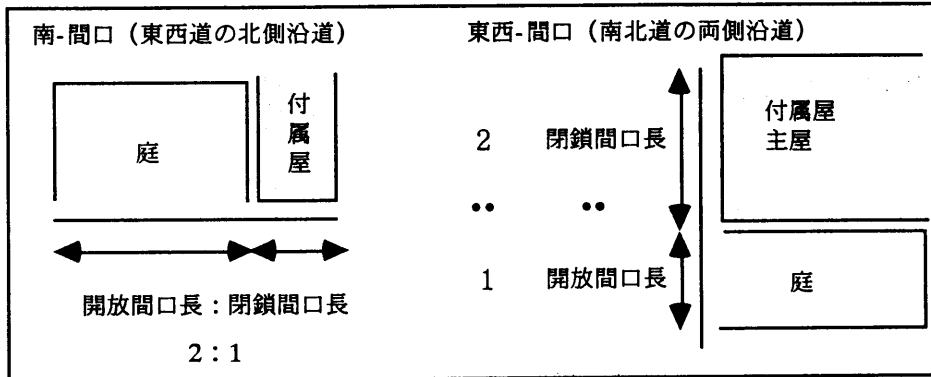


図5-74 開閉の典型プロポーシオン

5-4-4 まとめ -- 沿道の空間定量的な特徴

沿道に展開する開放空間と閉鎖空間の典型的な大きさは下図のようにまとめられる。南と東西の間口、すなわち東西道路の北側沿道と南北道路の両側沿道では、開放空間と閉鎖空間が交互に繰り返される「開放+閉鎖タイプ」が典型であった。南面の開放+閉鎖タイプは96面で全南面146面の約7割を占める。東西面の開放+閉鎖タイプは184面で全東西面204面の9割を占める。

その開放空間の平均奥行き長は南面で8間(14m)、東西面で12間(23m)であった。開放空間の平均間口長は南面で10間半(19m)、東西面で6間半(12m)であった。南面の間口長は東西面の奥行き長とほぼ同じであり、東西面の間口長は南面の奥行き長とほぼ同じであり、中央値で南北7間半(12m)東西11間半(21m)という特徴的な形態をもつ庭が開放空間の形態を規定していた。このような開放空間の大きさは、典型的な「開放+閉鎖」タイプに限定しなくても、全ての間口に同様にみることができる。

出入り口の幅は2間半(4m)で道路幅員とほぼ同じ幅の開口によって道とロット内部が繋がれていた。

閉鎖空間はほぼ1間(2m)のセットバックを持つ「道に接近した建物」によってつくられている。

「開放間口長:閉鎖間口長」のプロポーシオンの典型は南面で「1:2」、東西面で「1:2」、合計で「1:1」であった。

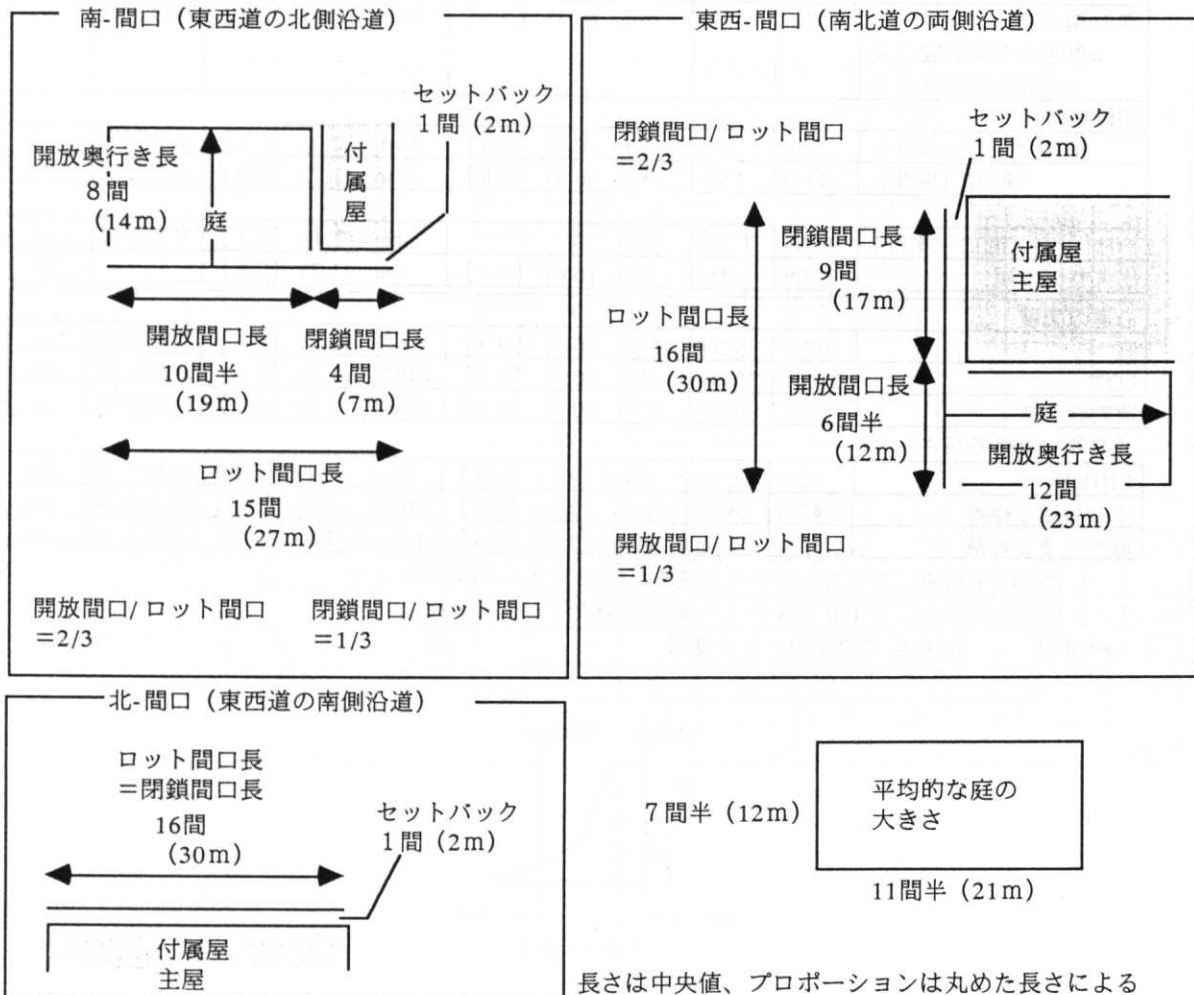


図5-75 典型的な沿道の空間スケール

「沿道」は以上のような平均的な値のまわりにばらつく様々な大きさの空間によってつくられている。ばらつきは対数正規分布であった。対数正規分布はアノニマスにつくられるものの規模分布となることが一般的に知られているが、沿道の空間が対数正規分布を取ると言うことは、これらがアノニマスにつくられていることの証であるとも言える。

そのバラツキの範囲を5%タイル値~95%タイル値で把握すると、概ね中央値の2/5倍~5/2倍（【0.4】~【2.5】）から3/5倍~5/3倍（【0.6】~【1.7】）である。これは「道の形態」でみたLine長や見通し距離（中央値の2/5~5/2倍）と同じか近い特徴であり、アノニマスな伝統的農村空間のもつ独特なバラツキ（変化）の特徴である。Line長や見通し距離の分布のばらつきを規定していたのは主として地形のフラクタル分布であったが、沿道におけるこのようなばらつき範囲の出現は、規模の自由拡大を制限する何らかの制約の度合い、あるいはプロトタイプ（標準的なロットの大きさや庭の大きさ）の影響の度合いが考えられる。

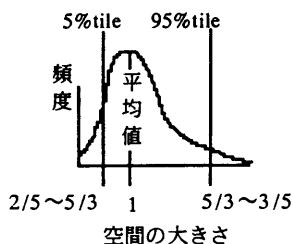
表5-44 沿道空間の大きさのばらつき（平均値・中央値に対する5%タイル値および95%タイル値の比）

沿道の長さ	平均値	中央値	5%Tile値	95%Tile値	分布形	計測数
全ツト辺長（南北・東西）	30m	29m	17m (0.6) 【0.6】	48m (1.6) 【1.7】	対数正規	578
全ツト間口長	29m	28m	17m (0.6) 【0.6】	47m (1.6) 【1.7】	対数正規	462
庭の東西長 =南面の開放間口長 =東西面の開放奥行長	22m	21m	12m (0.5) 【0.6】	35m (1.6) 【1.7】	対数正規	289
庭の南北長 =東西面の開放間口長 =南面の開放奥行長	14m	12m	6m (0.4) 【0.5】	28m (2.0) 【2.3】	対数正規	289
閉鎖間口長						
庭南（東西・南北）	7m	6m	3m (0.4) 【0.5】	14m (2.0) 【2.3】	対数正規	212
庭北（南北）	17m	15m	8m (0.5) 【0.6】	28m (1.7) 【1.9】	対数正規	184
セツバツク長（間口・奥行）						
セツバツク長（間口・奥行）	1.7m	1.3m	0m - -	4m (2.4) 【3.1】	対数正規	1340
出入口口の幅	4m	3m	2m (0.6) 【0.7】	7m (1.7) 【2.1】	-	289
沿道の面積						
庭	97坪	82坪	30坪 (0.3) 【0.4】	214坪 (2.2) 【2.6】	対数正規	289
LOT	270坪	254坪	135坪 (0.5) 【0.5】	440坪 (1.6) 【1.7】	対数正規	289
建物総面積	96坪	92坪	52坪 (0.5) 【0.6】	156坪 (1.6) 【1.7】	対数正規	289
（参考 道路の長さ）						
LINE長	32m	27m	10m (0.3) 【0.4】	70m (2.2) 【2.6】	対数正規	479
中心見通し距離	47m	41m	16m (0.3) 【0.4】	102m (2.2) 【2.5】	対数正規	738
最大見通し距離	61m	50m	20m (0.3) 【0.4】	141m (2.3) 【2.8】	対数正規	738

（ ）数字は平均値に対する5%タイル値または95%タイル値の比

【 】数字は中央値に対する5%タイル値または95%タイル値の比

分布形の - は正規,対数正規ともに棄却



5-5. 集落の比較

以上のように沿道の特徴を定性的・定量的に明らかにしたが、この特徴は各集落別に見ても同様に出現する特徴であるか確認する。

主要な特徴は次の4点である。

- ①開閉の出現：北入りは少なく、ロットの南・東・西面には「開放+閉鎖」の沿道タイプが出現する。
- ②典型的な風景：出入り口から見通す「南入り-庭-開放閉鎖-主屋」と「東西入り-庭-開放閉鎖-外構付属屋」閉鎖空間の表層は「付属屋」
- ③開閉空間のスケール：庭の東西長約20m、南北長約10mの開放空間
開放：閉鎖=1：2（東西面）または2：1（南面）で分ける。
閉鎖空間はいずれのセットバック長も短かったから、集落別に検討するまでもない。プロポーションを決めるのは、ロット間口長と開放間口長であるから、ロット間口長（一般的に議論するならロット辺長）の集落比較をすればよい。
- ④出入り口の結界：出入り口において庭と道路路面を分ける物理的障壁は無い
この特徴は全ての出入り口に見られたから、集落別に検討するまでもない。

(1) 開閉の出現の集落比較

北入りが少なく、南入が多いという特徴は各集落に見られる。

沿道タイプは、出入り口のある南・東・西面における「開放閉鎖」タイプが典型である。

表5-45 集落別に見た「出入り口の方位位置」

入り	東吉田	休息	上高砂	沢登	上八田	横根	計
南	33%	39%	41%	46%	42%	44%	42%
東	37%	30%	33%	18%	27%	32%	28%
西	17%	27%	23%	23%	19%	15%	21%
北	13%	5%	3%	14%	12%	9%	10%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
全Lot数	30	44	39	57	85	34	289

表5-46 集落別に見た「沿道空間タイプの典型」

典 型	出入り口	間口方位	沿道タイプ	東吉田	休息	上高砂	沢登	上八田	横根	計
	あり	南	開放+閉鎖 (B2)	15%	22%	19%	13%	18%	29%	19%
あり	東西	開放+閉鎖 (B2)	32%	37%	29%	22%	29%	29%	29%	133
小計			47%	59%	47%	35%	48%	58%	47%	219
ない	北	閉鎖 (A1)	19%	8%	13%	25%	22%	15%	18%	84
典型タイプの間口数 計			66%	67%	60%	60%	69%	73%	66%	303
全間口数			100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	462
			47	63	70	100	130	52		

(2) 典型的風景の集落比較

2-1) 出入口から見通す空間

「南入り-庭-開放閉鎖-主屋」と「東西入り-庭-開放閉鎖-外構付属屋」が典型である。

表5-47 集落別に見た「出入口から見通す空間の典型」

		東吉田	休息	上高砂	沢登	上八田	横根	計
典型	南入り-庭-開放閉鎖-主屋	23%	30%	28%	26%	24%	44%	28% 81
	東西入り-庭-開放閉鎖-外構付属屋	47%	50%	51%	39%	45%	44%	45% 131
典型タイプ ¹⁾ のLot数 計		70%	80%	79%	65%	68%	88%	73% 212
全LOT数		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100% 289

2-2) 閉鎖空間の表層

閉鎖空間の表層は付属屋である。

表5-48 集落別に見た「閉鎖空間の表層」

閉鎖空間の表層	横根	休息	上高砂	上八田	沢登	東吉田	tota
主屋	35%	21%	27%	20%	23%	29%	24%
露出	8%	4%	19%	14%	4%	3%	9% 64
外構	27%	17%	8%	6%	19%	26%	16% 112
付属屋	65%	79%	73%	80%	77%	71%	76%
露出	27%	32%	64%	65%	52%	43%	50% 361
外構	38%	47%	9%	16%	25%	28%	26% 184
tota	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
	88	109	86	200	162	76	721

(3) 開閉空間スケール

3-1) 開放空間(庭の南北長・東西長)の集落比較

「庭の東西長」「庭の南北長」は、各集落別に見てもほぼ同様に現れる特徴である。

表5-49 庭の東西長

	東吉田	休息	上高砂	沢登	上八田	横根
中央値	11.8間	11.3間	11.3間	11.0間	12.7間	9.9間
平均値	12.5間	13.0間	11.5間	11.4間	13.3間	10.0間
標準偏差	3.8間	5.5間	3.6間	3.6間	4.0間	2.7間
最小値	6.8間	5.2間	5.2間	3.0間	5.2間	4.5間
5%tile	7.6間	7.1間	5.8間	6.2間	7.8間	4.8間
95%tile	17.3間	23.2間	17.1間	17.0間	20.0間	13.7間
最大値	24.1間	30.0間	18.2間	20.2間	22.9間	17.2間
LOT数	30	44	39	57	85	34
5%Tile/Med.	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.5
95%Tile/Med.	1.5	2.1	1.5	1.5	1.6	1.4

表 5-50 庭の南北長

	東吉田	休息	上高砂	沢登	上八田	横根
中央値	5.6間	6.5間	7.0間	7.2間	7.5間	6.7間
平均値	5.7間	7.8間	7.3間	7.9間	8.5間	7.2間
標準偏差	2.3間	4.3間	2.9間	3.9間	4.3間	3.3間
最小値	2.2間	3.5間	2.2間	2.8間	2.5間	2.6間
5%tile	2.5間	3.9間	3.6間	3.7間	3.4間	3.3間
95%tile	9.7間	16.5間	11.6間	16.0間	17.2間	13.2間
最大値	10.9間	21.8間	18.7間	17.2間	19.6間	14.4間
LOT数	30	44	39	57	85	34
5%Tile/Med.	0.4	0.6	0.5	0.5	0.4	0.5
95%Tile/Med.	1.8	2.5	1.7	2.2	2.3	2.0

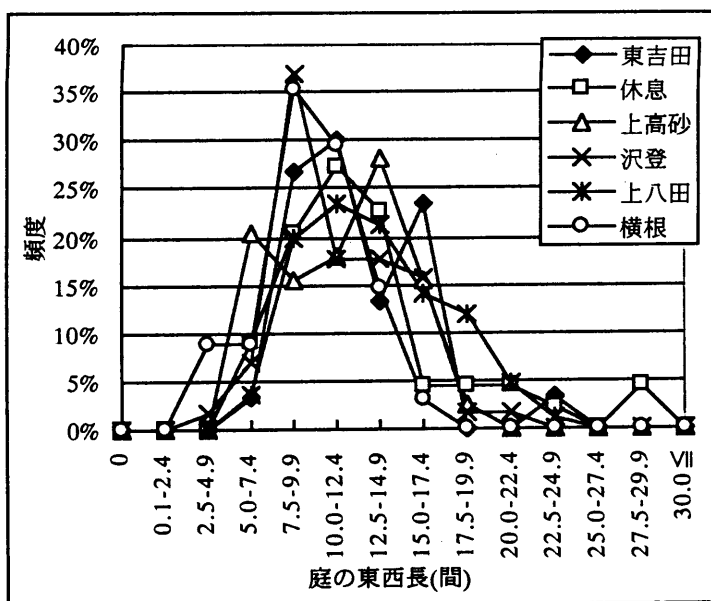


図 5-76 庭の東西長 (集落別)

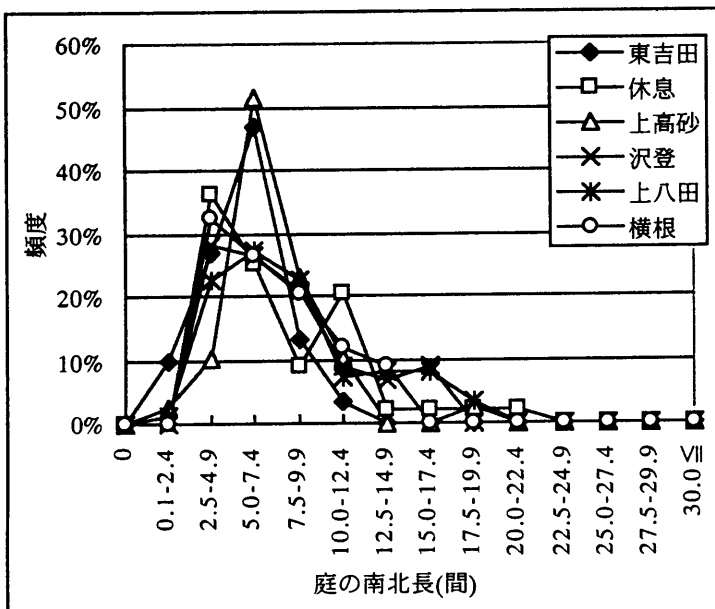


図 5-77 庭の南北長 (集落別)

3-2) 「開閉空間のプロポーション」と「ロット長」の集落比較

「ロット辺の東西長」「ロット辺の南北長」「開閉のプロポーション」は、各集落別に見てもほぼ同様に現れる特徴である。

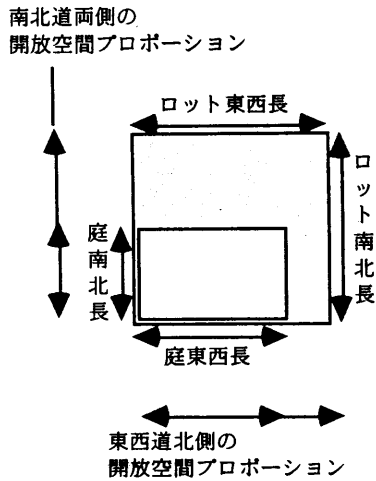


表5-51 各集落
中央値の最大最小

各集落の中央値の	最大	最小
LOTの南北長	18.3間	14.7間
東西長	17.2間	13.4間
プロポーション南北道	0.8	0.7
東西道	0.4	0.3

表5-52 開放空間のプロポーション (開放間口長/ ロット間口長)

	東吉田	休息	上高砂	沢登	上八田	横根
南北道の東西 (ロットの東西接道面)						
中央値	0.80	0.68	0.70	0.73	0.80	0.72
5%tile	0.68	0.37	0.55	0.44	0.51	0.47
95%tile	0.87	0.86	0.93	0.85	0.88	0.79
東西道の北側 (ロットの南接道面)						
中央値	0.32	0.43	0.44	0.44	0.41	0.36
5%tile	0.16	0.24	0.30	0.24	0.24	0.22
95%tile	0.45	0.68	0.60	0.57	0.64	0.59

表5-53 LOT東西長

	東吉田	休息	上高砂	沢登	上八田	横根
中央値	14.6間	17.2間	15.2間	14.7間	15.6間	13.4間
平均値	14.8間	17.5間	14.8間	14.7間	15.1間	14.0間
標準偏差	5.4間	5.3間	3.3間	3.8間	3.8間	3.8間
最小値	8.1間	8.7間	7.2間	8.2間	7.2間	7.5間
5%tile	9.2間	10.3間	8.7間	9.5間	9.5間	8.7間
95%tile	23.7間	27.7間	19.1間	20.5間	21.1間	18.6間
最大値	34.4間	30.0間	20.0間	23.3間	22.4間	27.0間
LOT数	30	44	39	57	85	34
5%Tile/Med.	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6
95%Tile/Med.	1.6	1.6	1.3	1.4	1.3	1.4

表5-54 LOT南北長

	東吉田	休息	上高砂	沢登	上八田	横根
中央値	16.6間	16.7間	16.5間	17.6間	18.3間	14.7間
平均値	17.6間	17.2間	17.3間	18.8間	19.3間	16.0間
標準偏差	4.4間	6.3間	4.7間	5.8間	6.2間	4.5間
最小値	11.1間	8.0間	10.0間	6.7間	7.8間	9.6間
5%tile	12.8間	9.5間	11.0間	11.0間	10.9間	10.3間
95%tile	24.1間	30.4間	25.3間	28.6間	28.4間	24.2間
最大値	30.4間	35.1間	30.8間	29.8間	37.3間	25.0間
LOT数	30	44	39	57	85	34
5%Tile/Med.	0.8	0.6	0.7	0.6	0.6	0.7
95%Tile/Med.	1.5	1.8	1.5	1.6	1.6	1.6

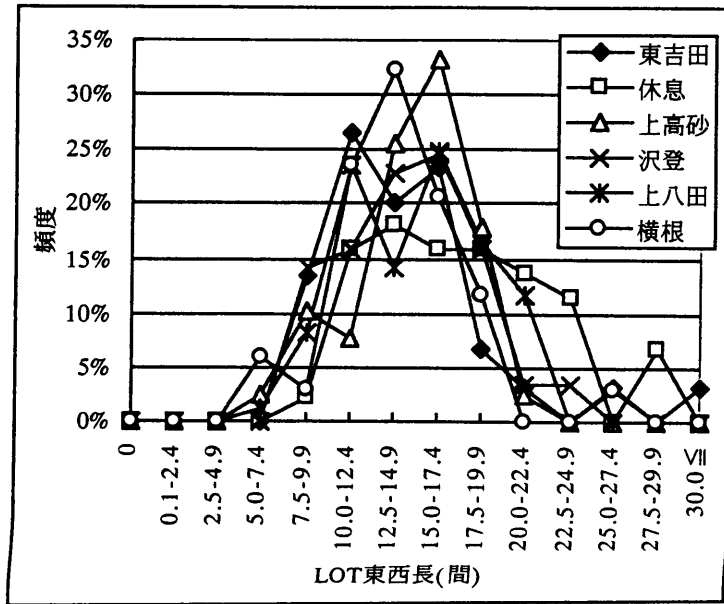


図5-78 ロットの東西長 (集落別)

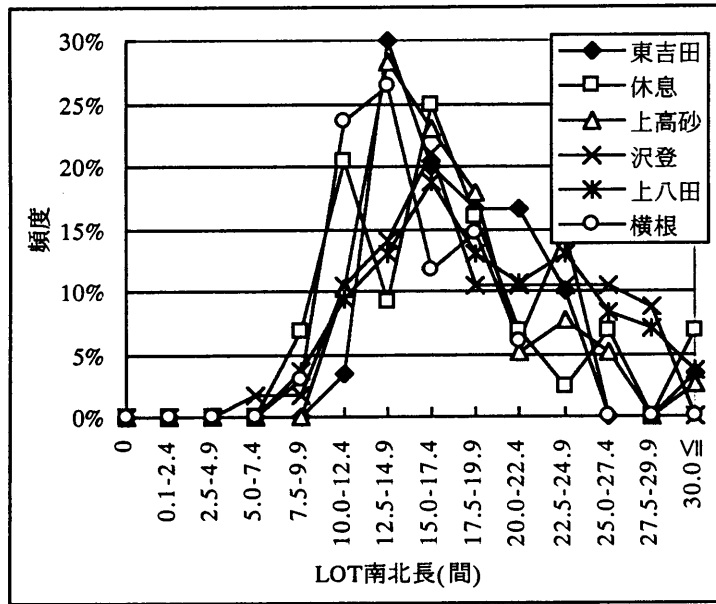


図5-79 ロットの南北長 (集落別)

(4) まとめ

以上のように、沿道に見られた特徴は全ての集落に共通して出現し、一般性のある特徴である。

5章では道路空間のうち「沿道」に注目して、「沿道の透視平面形態」の形態的特徴を定性的特徴と定量的特徴に分けて明らかにしてきた。

結果は次のような「定性的な特徴」と「定量的な特徴」に要約される。

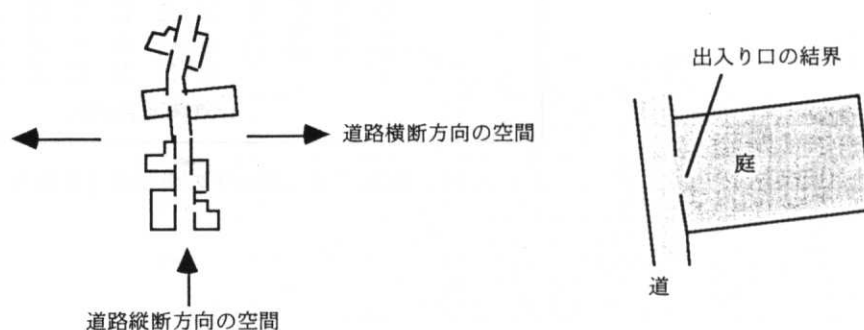
(1) 空間の定性的特徴：開閉空間と典型風景

- 1) 開閉の空間：東西道の北側（ロット南面）と南北道の両側（ロット東西面）には開放空間（庭）と閉鎖空間（建物、特に付属屋の壁面）が交互に繰り返される。庭は出入り口で道と接続している。この「出入り口が庭に接し、庭の側に閉鎖空間が現れる間口」はロット南側間口の6割、ロット東側間口および西側間口の7割を占めて典型である。一方、ロット北側間口は出入り口の無い閉鎖空間が8割を占める。



このような農村の「開閉空間」は「町家」「長屋」「武家屋敷」といった従来から指摘されている「閉鎖型」の沿道とは異なる。

- 2) 出入り口の結界：また、農村の出入り口が庭に接し、かつ開放していることは従来から経験的に指摘されているが、対象地域でもその実態が見られた。つまり、出入り口から見るLOT内は道路路面と連続し道路側に開かれた空間であり、路面（地面）は道路縦断方向に長くのびる空間と沿道のところどころに開いた道路横断方向にのびる空間から成り立っていると言える。ただし、出入り口は、「入れるけれどそこから奥は入ってはいけない」という心理的・規範的な見えない境界線のある場であると言え、道路縦断方向の空間（道）と道路横断方向の開いた空間（庭）は物理的には連続し同質であるけれども、意味的には異なる空間である。



3) 典型的な風景の出現：

出入り口から見通す空間の風景は、南入りでは「側面を付属屋で囲まれた庭越しに見る主屋」、東西入りでは「側面を主屋や付属屋で囲まれた庭越しに見る植栽外構あるいは付属屋」、という典型がみられた。

出入り口以外の空間は「付属屋（特に壁面露出）」が典型であった。



東西道路北側（南入りロット）の典型的風景



南北道路西側（東入りロット）の典型的風景

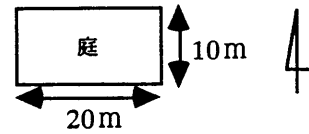


南北道路東側（西入りロット）の典型的風景

(2) 空間の定量的特徴：開放空間と閉鎖空間のスケール

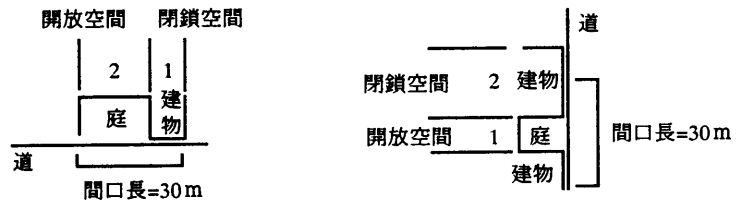
1) 開放空間のスケール：

間口の方位によらず中央値で東西長約20m、南北長約10mの大きさを持つ。



2) 開閉のプロポーション（閉鎖空間と開放空間の比率）：

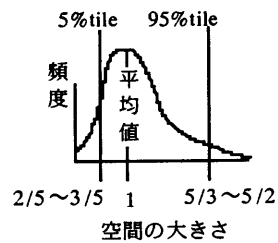
平均的に、30mのロット間口を、南面は開放間口2：閉鎖間口1で分け
東西面は開放間口1：閉鎖間口2の比率で分ける。



3) スケールの分布：

対数正規分布であった。

中央値の $2/5 \sim 5/2$ 倍、あるいは、 $3/5 \sim 5/3$ 倍のバラツキの範囲



参考文献

- 日本建築学会編（1979）建築設計資料集成6建築-生活、丸善、p19
- 平井聖（1980）図説日本住宅の歴史、学芸出版、pp67-88
- 西山卯三（1975）日本のすまい（1）、勁草書房、P10.
- 坂本高雄（1994）山梨の草葺民家-伝統的形式住居の終焉-、山梨日日新聞社、p215
- 楨文彦、若月幸敏、大野秀敏、高谷時彦（1980）「見えがくれする都市」、鹿島出版会、pp140-195
- 浦良一、下河辺千穂子、持田照夫、萩原正三（1976）「建築計画学7-農家住宅」丸善、P6-16
- 藤井英二郎、細田和寿（1984）「農村空間の構造と特性に関する研究」造園雑誌47（3）pp137-153
- 大山 勲・花岡利幸・田辺守（1995）「沿道建物配置からみた農村集落の道路空間特性に関する研究」日本都市計画学会学術論文集、pp265-270

使用地図

各市町村都市計画担当（平成3年～5年修正）1/2,500国土基本図をベースマップとした現地実測図